

兵庫県伊丹市

# 有岡城跡発掘調査報告書XII

— 第66次調査 —

2006年3月

伊丹市教育委員会



1. 調査区より旧岡田家店舗・釜屋・酒蔵を見る（東より）

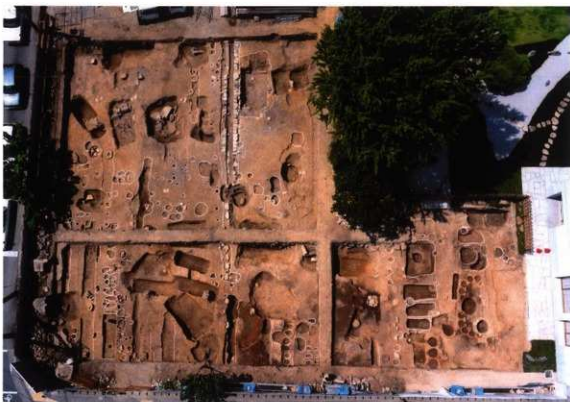


2. 調査区と旧岡田家店舗

## 巻頭図版2



1. 調査区より産業道路及び周辺の町並みを見る（西より）



2. 第1・2遺構面 調査区全景



1. 第1遺構面 竈15出土遺物



2. 第1遺構面 土坑2出土遺物



## 巻頭図版4



1. 第3遺構面 井戸5出土遺物



2. 第3遺構面 土器溜まり1出土遺物

兵庫県伊丹市

# 有岡城跡発掘調査報告書XII

— 第66次調査 —

2006年3月

伊丹市教育委員会



## 序

有岡城跡・伊丹郷町遺跡第66次発掘調査を担当することになって、ふとした感慨があった。昭和25年の頃であったと思うが、尼崎市域の遺跡の90パーセント以上を確認し、伊丹市域の調査を予定していた。この年、猪名寺廃寺址の第一次発掘調査をおこない、現地でも伊丹史談会の方々と伊丹廃寺址の調査について話し合うことがあった。岡田利兵衛氏にお会いしたのもその頃であった。畏友である松尾高一氏、樽谷富三氏らと度々岡田氏に会い、伴正之氏宅で古地図の膨大な資料を拝見したこともあった。その後、逸翁美術館や池田文庫で岡田氏と会うことがあった。小林一三氏の依頼で雲雀ヶ丘古墳群の発掘調査をしたのも岡田氏との関係からであった。芦屋市会下山遺跡、芦屋市八十塚古墳群、尼崎市水堂前方後円墳、西宮市苦楽園古墳、尼崎市田能遺跡、大坂城石垣調査や「尼崎市史」、「芦屋市史」、「摂津市史」の執筆などで、しばらく伊丹市域から遠ざかっていたが、当時囑託をされていた橋本久氏の依頼で有岡城跡の調査に入ったのが昭和50年頃である。この頃以後、緑ヶ丘地域をはじめ伊丹市域の調査に関与してきた。父の友人であり、私の出征の日に来宅され写真を撮って下さった山本賢之助氏が図書館長に就任されていたこともあった。昭和60年代に入り、有岡城跡・伊丹郷町地域の再開発が進められ、伊丹駅周辺から郷町の中心部まで発掘調査がおこなわれることになった。当時の大手前女子大学の藤井直正教授が主体となって発掘調査がすすめられてきたが、協力するということで大阪経済法科大学考古学研究会の学生たちに参加を指示した。このような経過を経て、岡田利兵衛氏代々の本拠である地域の発掘調査を私が担当することになった。私としては奇しき因縁を想う調査であった。

しかし、本務校での海外出張が多く、台湾大学・北京大学・延辺大学・金日成綜合大学・ソウル大学など東アジア各国との共同研究の協議や講演で多忙な日程をこなしている時期であった。月に2回以上の北京大学出張もあった。このため、調査地域の直接指揮ができず、現地からの調査員の報告によって電話で指示を出すこともあった。それだけに小長谷正治氏の負担と心労が加重されたことを今も申し訳なく思っている。しかしその成果は充分なものであった。岡田家酒蔵の施設跡であることも明白になり、弥生中期の壺形土器完形品が土坑から出土しているので、弥生時代以来の生活の場があったことも判明した。成果の内容は報文のとおりである。

平成18年3月

大阪経済法科大学名誉教授

村川行弘

## 例 言

1. 本書は、兵庫県伊丹市伊丹1丁目を中心とする、有岡城跡・伊丹郷町遺跡内の発掘調査のうち、第66次調査（伊丹市宮ノ前2丁目地内）の成果をまとめたものである。
2. 本調査は、工芸センター建設・美術館増築に伴う事前調査として実施した。
3. 調査期間は昭和63年7月26日から10月11日である。
4. 発掘調査は宮ノ前地区埋蔵文化財調査団 団長村川行弘（現大阪経済法科大学名誉教授）で実施し、整理作業及び報告書刊行までの作業は伊丹市教育委員会が実施した。
5. 発掘調査は、村川行弘団長指導の下に小長谷正治（現伊丹市立博物館）・中井秀樹（現三田市教育委員会）が調査を担当し、田中賢人（現三田市教育委員会）・細川佳子（現伊丹市教育委員会）・小笠原典子（旧姓萩野）がこれを補佐した。
6. 報告書の執筆は分担して行った。執筆者は以下の通りである。  
第1章、第2章、第3章第1節・第2節、及び第4章は小長谷正治が担当した。  
第3章第3節から第6節は遺構別に分担した。詳細を以下に記す。  
礎石建物、礎石列4・5、竈、埴列建物、炉、土坑2～土坑296・土坑950の遺構は小長谷正治が担当した。  
地下室、井戸、焼土処理土坑、土器溜まり、土坑329～土坑573の遺構は細川佳子が担当した。  
上記の遺構の遺物は岡野理奈が担当した。  
溝、礎石列1～3、柵列、白屋、埋甕遺構、土坑586～土坑910の遺構と遺物は瀬川眞美子が担当した。
7. 整理作業は、発掘調査担当者指導のもと、伊丹市教育委員会埋蔵文化財臨時職員が遺物の実測・トレースなどを行った。各作業の担当者は以下の通りである。  
遺物実測 岡野理奈・三輪隆子・吉川敬子・瀬川眞美子  
中畔明日香（旧姓上村 現伊丹市教育委員会）・森美恵子・徳永悦子  
遺構のトレース 丸岡たかみ・三輪隆子  
遺物のトレース 丸岡たかみ  
写真図版 吉川敬子・岡野理奈・上谷浩司  
遺物観察表 吉川敬子・岩田朱美・岡野理奈
8. 本書の編集作業は小長谷正治・中畔明日香・和島恭仁雄・細川佳子が行った。
9. 発掘調査及び本書作成にあたって、次の方々の御指導を受けた。記して感謝の意を表したい。  
赤松 和佳 荒川 正明 稲原 昭嘉 大橋 康二 川口 宏海  
黒田 慶一 近藤 康司 嶋谷 和彦 高須賀由美 種定 淳介  
福澤 邦夫 藤井 直正 細川 由貴（旧姓石神） 前川 要（敬称略 五十音順）
10. 兵庫県教育委員会 種定淳介氏の指導のもと、I区東壁の土層剥ぎ取りを行った。資料は伊丹市立博物館に展示している。
11. 発掘調査資料及び出土遺物は、伊丹市教育委員会にて保管している。広く利用されたい。



## 凡 例

1. 遺構実測図は、国土座標第V系を使用した。水準高は、大阪湾平均海水値(O.P.)を用いている。
2. 現地の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修の「新版標準土色帖」に準拠した。
3. 遺構の挿図番号は、写真図版番号と一致させている。
4. 遺物実測図において、中心線を一点破線で示しているものは、反転復元していることを表す。
5. 遺物観察表において、法量がカッコ付きのものは、復元した数値であることを表す。
6. 竈1～35の遺構図版のスクリーントーンは火を受けて、赤く焼けた部分を示す。
7. 遺物番号181・254・307のスクリーントーンは断面を表す。

## 参 考 文 献

- 青木重雄 「明石(朝霧)・舞子・須磨焼」『兵庫のやきもの』 神戸新聞総合出版センター 1993年
- 赤松和佳 「大阪府下出土の肥前陶磁について」  
『国内出土の肥前陶磁 西日本の流通をさぐる』第1分冊 九州近世陶磁学会 2002年
- 赤松和佳他 「伊丹郷町遺跡の陶磁器の様相」(第1回伊丹郷町研究会大会発表要旨集)  
伊丹郷町研究会 2003年
- 尼崎市教育委員会 「田能遺跡発掘調査報告書」 1982年
- 有田町教育委員会 「幸平遺跡」 2003年
- 伊丹市 「重要文化財 旧岡田家住宅保存修理工事報告書(災害復旧)」 1999年
- 伊丹市教育委員会 「旧岡田家住宅・酒蔵調査報告書」 1990年
- 伊丹市教育委員会 「兵庫県伊丹市 有岡城跡発掘調査報告書Ⅷ」 1992年
- 伊丹市役所 「伊丹市史」第2巻 1969年・第6巻 1970年
- 伊丹市立博物館 「新・伊丹史話」 1994年
- 上田秀雄 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No2 日本貿易陶磁研究会 1982年
- 江戸遺跡研究会編 「図説 江戸考古学研究事典」柏書房 2001年
- (財)大阪市文化財協会 「住友銅吹所跡発掘調査報告書」 1998年
- (財)大阪市文化財協会 「広島藩大坂蔵屋敷跡Ⅰ」 2003年
- (財)大阪市文化財協会 「大坂城跡Ⅶ」 2003年
- (財)大阪市文化財センター 「大坂城跡発掘調査報告Ⅰ」 2002年
- 岡佳子他 「軟質施釉陶器の成立とその展開」研究集会資料集 関西陶磁史研究会 2004年
- 大橋康二他 「九州陶磁の編年」九州近世陶磁学会 2000年

- 大橋康二他 「国内出土の肥前陶磁 西日本の流通をさぐる」第1分冊  
九州近世陶磁学会 2002年
- 大橋康二 「肥前磁器」(考古学ライブラリー55) ニューサイエンス社 1989年
- 大橋康二他 「別冊太陽 実物大そば猪口事典」平凡社 2002年
- 大平茂 「近世丹波焼播鉢の形式分類とその編年」「下相野窯址」兵庫県教育委員会 1992年
- 小野正敏 「15・16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」「貿易陶磁研究」№2  
日本貿易陶磁研究会 1982年
- 尾上実 「南河内の瓦器椀」「藤澤一夫先生古希記念古文化論叢」1983年
- 川口宏海 「兵庫県伊丹郷町遺跡出土の煙管について」「大手前大学社会文化学部論集」第1号  
大手前大学 2001年
- 新宿区内藤町遺跡研究会 「内藤町遺跡」1992年
- 中世土器研究会編 「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社 1995年
- 坪内利弘 「図鑑瓦屋根」理工学社 1977年
- 東京都埋蔵文化財センター 「汐留遺跡Ⅰ」1997年
- 土岐市教育委員会他 「元屋敷陶器窯跡発掘調査報告書」2002年
- 徳島県教育委員会 「新蔵町1丁目遺跡 企業局総合管理センター(旧副知事公舎)地点」1998年
- 中島由美 「古伊万里 蕎麦猪口・酒器1000」講談社 2001年
- 植崎彰一・藤澤良祐他 「戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品」  
(シンポジウム・講演会「瀬戸大窯とその時代」資料集) 2001年
- 難波洋三 「徳川氏大坂城期の炮烙」「難波宮址の研究 第九」(財)大阪市文化財協会 1992年
- 日本貨幣商共同組合 「日本貨幣カタログ」1996年版 1995年
- 日本名所圖會刊行會編集 「攝津名所圖會」巻6 臨川書店 1979年
- 乗岡実 「備前焼播鉢の編年について」「第3回中近世備前焼研究会」2000年
- 長谷川眞 「近世丹波焼播鉢とその系譜関係」「関西近世考古学研究会Ⅶ」2000年
- 備前市教育委員会 「伊部南大窯跡周辺窯跡群確認調査報告書Ⅰ」2003年
- 姫路市教育委員会 「姫路の文化財 石造遺品銘文集」1995年
- 兵庫県教育委員会 「神戸市西区 玉津田中遺跡 第6分冊」1996年
- 福澤邦夫 「伊丹の中世石造美術-「伊丹市史」の補遺(3)-」「地域研究いたみ」第20号  
伊丹市立博物館 1991年
- 藤井直正他 「有岡城跡・伊丹郷町Ⅳ」大手前女子大学史学研究所 1995年
- 藤澤良祐 「瀬戸歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ」瀬戸市歴史民俗資料館 1986年
- 藤澤良祐 「瀬戸歴史民俗資料館研究紀要Ⅵ」瀬戸市歴史民俗資料館 1987年
- 法隆寺昭和資料根編集委員会 「法隆寺の至宝 第15巻 瓦」小学館 1992年
- 三輪茂雄 「石臼探訪」(株)産業技術センター 1978年
- 八木哲浩編 「伊丹古絵図集成」伊丹資料叢書6 伊丹市役所 1982年
- 和島恭仁雄 「古文書からみた旧岡田家住宅」『地域研究いたみ』第24号 伊丹市立博物館 1995年

## 目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
参考文献	

第1章 遺跡の概要	
第1節 市内の中世城館跡	1
第2節 伊丹城から有岡城へ	4
第3節 重要文化財旧岡田家酒蔵と調査地点	7
第2章 調査概要	
第1節 調査方法	9
第2節 調査経過	11
第3章 調査成果	
第1節 層序	13
第2節 遺構面と検出遺構	13
第3節 第1遺構面	21
第4節 第2遺構面	36
第5節 第3遺構面	47
第6節 第4遺構面	75
第4章 結語	93

## 挿 図 目 次

第1図 有岡城跡と市内の中世城館跡	1	第14図 礎石建物1平面図	22
第2図 有岡城惣構えと調査地点	4	第15図 溝6・地下室1平面・断面図、 溝6・7出土遺物	23
第3図 「寛文9年伊丹郷町絵図」解説図	5	第16図 地下室1平面・立面図	24
第4図 「天保15年伊丹郷町分間絵図」解説図	5	第17図 竈12・13・14平面・断面図、出土遺物	25
第5図 「明治19年酒造場絵図面届書写」	7	第18図 竈15平面・断面図、出土遺物(1)	26
第6図 酒蔵操業時の旧岡田家酒蔵建物配置図	8	第19図 竈15出土遺物(2)	27
第7図 調査区位置図	9	第20図 竈22・23平面・断面図	28
第8図 調査区設定図	10	第21図 井戸1・竈1~11・土坑1平面・ 断面図	28
第9図 調査区土層断面図	14	第22図 溝7・竈16~21平面図、出土遺物	29
第10図 第1遺構面全体図	17	第23図 土坑2出土遺物(1)	31
第11図 第2遺構面全体図	18		
第12図 第3遺構面全体図	19		
第13図 第4遺構面全体図	20		

第24図	土坑2(2)・4・18・35・164 出土遺物	32	第57図	土坑270・277・281・282・285・296・ 329・339・365・371・376・380・433 出土遺物	61
第25図	土坑268出土遺物	33	第58図	土坑398(1)・451・456出土遺物	62
第26図	土坑950出土遺物(1)	34	第59図	土坑398(2)出土遺物	63
第27図	土坑950出土遺物(2)	35	第60図	第3遺構面下層 礎石建物跡全体図 出土遺物検出地点	66
第28図	礎石列1平面・断面図、出土遺物	38	第61図	礎石建物5・礎石列5平面・断面図	67
第29図	礎石列2・溝3周辺平面図、 礎石列2断面図	38	第62図	第3遺構面下層出土遺物	68
第30図	柵列1平面・断面図	38	第63図	埤列建物1平面・立面図、 出土遺物	69
第31図	溝9・白屋1平面・断面図、 『攝津名所圖會』巻6(部分)	39	第64図	井戸5平面・断面図、出土遺物	70
第32図	溝9出土遺物	40	第65図	井戸6平面・断面図	71
第33図	焼土処理土坑1~8平面・断面図	41	第66図	竈34平面・断面図	71
第34図	焼土処理土坑1・2(1) 出土遺物	42	第67図	土器溜まり1平面・断面図、 出土遺物(1)	72
第35図	焼土処理土坑2(2)出土遺物	43	第68図	土器溜まり1出土遺物(2)	73
第36図	焼土処理土坑2(3)・5・6・ 8(1)出土遺物	44	第69図	土器溜まり1周辺出土遺物	74
第37図	焼土処理土坑8(2)出土遺物	45	第70図	土坑481・484・521・542 出土遺物	74
第38図	土坑75・78・112出土遺物	45	第71図	礎石列8平面・断面図	75
第39図	土坑133・182出土遺物	46	第72図	埋甕遺構1平面・断面図、 出土遺物	76
第40図	第3遺構面上層 礎石建物跡全体図、 出土遺物検出地点	49	第73図	埋甕遺構2平面・断面図	77
第41図	礎石建物2・3・礎石列4平面・ 断面図	50	第74図	炉1・2平面・断面図	77
第42図	第3遺構面上層出土遺物	51	第75図	土坑561・573・586・620・625 出土遺物	77
第43図	溝11・礎石列3平面・断面図	52	第76図	土坑626平面・断面図、出土遺物	78
第44図	井戸3平面図	53	第77図	土坑645平面・断面図、出土遺物、 土坑647・648・651出土遺物	79
第45図	井戸4平面・断面図	53	第78図	土坑655・701・709・723・732・744・ 807・823・825・864出土遺物	80
第46図	溝11・井戸4出土遺物	53	第79図	土坑910埋納銭出土状況、出土銭貨	82
第47図	竈24・27平面・断面・立面図、 竈24出土遺物	54	第80図	II・III区内弥生土器出土地点	84
第48図	竈27出土遺物	55	第81図	溝16平面(部分)・断面図	85
第49図	竈28・29平面・断面・立面図	56	第82図	溝16・土坑663出土遺物	85
第50図	竈28・29・井戸2出土遺物	57	第83図	第IV層・第V層・第VI層(1)出土遺物	88
第51図	竈30・31・井戸2平面・断面図	57	第84図	第VI層(2)・第VII層(1)出土遺物	89
第52図	竈32平面・断面図	58	第85図	第VII層(2)・第VIII層(1)出土遺物	90
第53図	竈35平面・断面図	58	第86図	第VIII層(2)出土遺物	91
第54図	竈25平面・断面図	59	第87図	「大正4年伊丹町地籍図」(部分)	93
第55図	竈26平面・断面図	59			
第56図	竈33周辺平面図、出土遺物	60			

## 図 版 目 次

- 巻頭図版1-1 調査区より旧岡田家店舗・  
                   釜屋・酒蔵を見る（東より）  
 巻頭図版1-2 調査区と旧岡田家店舗  
 巻頭図版2-1 調査区より産業道路及び周辺  
                   の町並みを見る（西より）  
 巻頭図版2-2 第1・2遺構面 調査区全景  
 巻頭図版3-1 第1遺構面 竈15出土遺物  
 巻頭図版3-2 第1遺構面 土坑2出土遺物  
 巻頭図版4-1 第3遺構面 井戸5出土遺物  
 巻頭図版4-2 第3遺構面 土器溜まり1出土遺物
- 図版1-1 旧岡田家酒蔵店舗南面(解体修理後)  
 図版1-2 旧岡田家酒蔵店舗南面(解体修理前)  
 図版2-1 旧岡田家酒蔵店舗・釜屋・酒蔵東面  
                   (解体修理後)  
 図版2-2 旧岡田家住宅店舗・釜屋・酒蔵東面  
                   (解体修理前)  
 図版3-1 旧岡田家酒蔵店舗・白屋南面  
 図版3-2 旧岡田家酒蔵倉庫・本宅東面  
 図版4-1 調査区より旧岡田家酒蔵店舗東面を  
                   見る  
 図版4-2 第1・2遺構面 調査区全景  
 図版5-1 第1・2遺構面 I区全景(北より)  
 図版5-2 第1・2遺構面 II・III区全景  
   (西より)  
 図版6-1 礎石建物1(西より)  
 図版6-2 「鹿し漕」銘根石  
 図版7-1 地下室1と溝6(南より)  
 図版7-2 地下室1(西より)  
 図版7-3 地下室1(北西より)  
 図版7-4 地下室1(北より)  
 図版7-5 地下室1(東より)  
 図版8-1 竈12・13・14(南より)  
 図版8-2 竈15(南西より)  
 図版8-3 竈22・23(南より)  
 図版9-1 井戸1と竈1～11(北より)  
 図版9-2 竈1～5(北より)  
 図版9-3 竈6～11(北より)  
 図版10-1 竈16～21と溝7(南より)  
 図版10-2 礎石列1と焼土処理土坑5～8(東より)  
 図版10-3 白屋1(西より)  
 図版11-1 礎石列2と溝3(西より)
- 図版11-2 土坑126(東より)  
 図版11-3 土坑249(西より)  
 図版11-4 土坑263(西より)  
 図版12-1 第3遺構面上層 I区全景(東より)  
 図版12-2 第3遺構面上層 II区全景(西より)  
 図版13-1 第3遺構面上層 III区全景(西より)  
 図版13-2 礎石列4と礎石建物2の北列  
                   (東より)  
 図版13-3 礎石列2と礎石建物2の南列  
                   (東より)  
 図版14-1 溝11(西より)  
 図版14-2 溝11(西より)  
 図版14-3 竈24・27(東より)  
 図版15-1 竈24焚口(北より)  
 図版15-2 竈28・29と礎石列3(東より)  
 図版15-3 竈30・31と井戸2(東より)  
 図版16-1 竈35(東より)  
 図版16-2 竈25(東より)  
 図版16-3 竈26(東より)  
 図版17-1 第3遺構面下層 I区全景(東より)  
 図版17-2 第3遺構面下層 II区全景(北より)  
 図版18-1 塼列建物1(北より)  
 図版18-2 塼列建物1北東隅(北東より)  
 図版18-3 塼列建物1北西隅(北より)  
 図版19-1 井戸5と井戸6(東より)  
 図版19-2 竈34(東より)  
 図版19-3 土器溜まり1(南より)  
 図版20-1 第4遺構面 I区全景(南より)  
 図版20-2 第4遺構面 II区全景(北より)  
 図版21-1 第4遺構面 III区全景(東より)  
 図版21-2 土坑645周辺(西より)  
 図版21-3 土坑910埋納銭出土状況(西より)  
 図版22-1 土坑663周辺 弥生土器出土地区  
                   (東より)  
 図版22-2 溝16周辺(北より)  
 図版22-3 溝16 弥生土器出土状況(東より)  
 図版23 出土遺物(1)  
 図版24 出土遺物(2)  
 図版25 出土遺物(3)  
 図版26 出土遺物(4)  
 図版27 出土遺物(5)  
 図版28 出土遺物(6)



図版29	出土遺物 (7)
図版30	出土遺物 (8)
図版31	出土遺物 (9)
図版32	出土遺物 (10)
図版33	出土遺物 (11)
図版34	出土遺物 (12)
図版35	出土遺物 (13)

図版36	出土遺物 (14)
図版37	出土遺物 (15)
図版38	出土遺物 (16)
図版39	出土遺物 (17)
図版40	出土遺物 (18)
図版41	出土遺物 (19)

## 表 目 次

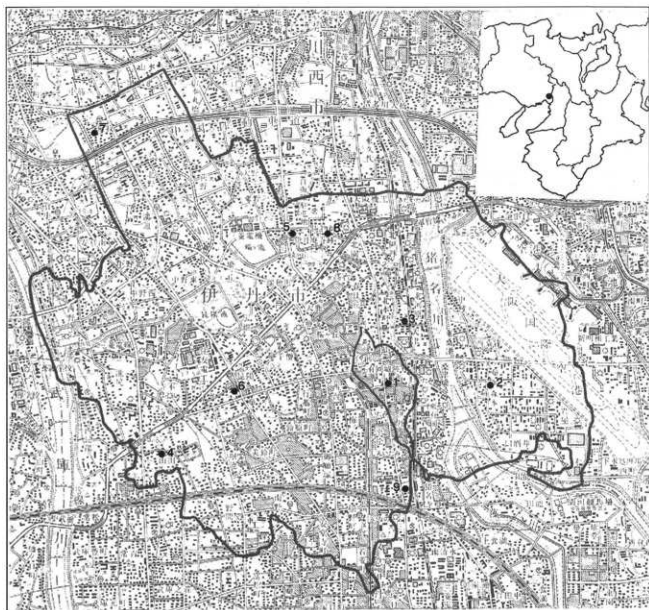
表1	調査中の遺構面と報告書の遺構面の関係 .....	13
表2	遺物観察表 (1).....	95
表3	遺物観察表 (2).....	96
表4	遺物観察表 (3).....	97
表5	遺物観察表 (4).....	98
表6	遺物観察表 (5).....	99
表7	遺物観察表 (6).....	100
表8	遺物観察表 (7).....	101
表9	遺物観察表 (8).....	102
表10	遺物観察表 (9).....	103
表11	遺物観察表 (10).....	104
表12	遺物観察表 (11).....	105
表13	遺物観察表 (12).....	106
表14	遺物観察表 (13).....	107
表15	遺物観察表 (14).....	108
表16	遺物観察表 (15).....	109
表17	遺物観察表 (16).....	110
表18	遺物観察表 (17).....	111
表19	遺物観察表 (18).....	112
表20	遺物観察表 (19).....	113
表21	遺物観察表 (20).....	114
表22	遺物観察表 (21).....	115
表23	遺物観察表 (22).....	116
表24	遺物観察表 (23).....	117

## 第1章 遺跡の概要

## 第1節 市内の中世城館跡

伊丹市域を地形的に見ると、東の猪名川流域、西の武庫川流域とその間の伊丹台地に分けられる。両河川とも北摂山地から南流し、尼崎市域を通過して瀬戸内海に注ぐ。伊丹台地も北摂山地に端を發し、宝塚市・川西市から伊丹市に向かって次第に高さを減じ、尼崎市に至って沖積地に没していく。市域の地形は全体的に低平で、伊丹台地も緩やかな傾斜を保っている。

市域を通る街道には、古代より都と西国を結ぶ旧山陽道（西国街道）が市域を横断するほか、大坂と北摂地域を結ぶ多田道、有馬道などが市内を縦断するなど、伊丹は早くから交通の要衝として発達



第1図 有岡城跡と市内の中世城館跡 (1/50,000「大阪西北部」平成14年)

1. 有岡城跡
2. 森本居館跡
3. 北河原氏居館推定地
4. 山田城推定地
5. 猿ヶ山城跡
6. 昆陽(小屋・古屋)城推定地
7. 荒牧上月氏居館推定地
8. 緑ヶ丘遺跡第12次調査地点
9. 南本町遺跡第3次調査地点

してきた。こうした地政的な重要性から市域には有岡城（伊丹城）をはじめ中世の城館が点在している。

この地域の拠点的な城館は有岡城で、鎌倉時代から天正年間まで続く摂津地域の有力城館であり、伊丹氏から荒木氏に引き継がれている。有岡城以外の城館は規模が小さいもので、伊丹氏の有力家臣の居館や天正6年から7年にかけての織田信長の有岡城攻めに使用された陣城、城主など城の詳細が不明ながら絵図や地名に残るものなどがある。また、最近の発掘調査で、堀跡が発見され城館跡の存在が初めて明らかになったものがある。

市内の中世城館は、市域の地形が低平な伊丹台地とその兩岸を流れる猪名川と武庫川という地形から、すべて平城形式である。現状は市街地化しており、山城のように全体の様子が分かるものではなく、古絵図や発掘調査によって調べるほか方法がない。しかし、調査も断片的で全体像が判るものは現状では有岡城をおいてほかにない。したがって、次に掲げる城館（第1図参照）も現状では推定の城を出ないものが多いことをご了承いただきたい。

### 有岡城跡（伊丹城）

伊丹台地の東端に立地する有岡城跡（1）は、南北1.7km、東西800mの規模で、伊丹台地の高台を巧みに利用した平城である。築城者は鎌倉幕府創設当初からの御家人伊丹氏で、文和2年（1353）には伊丹城の名が文献に初見される。築城当初は居館のような小規模のものであったと考えられているが、15世紀末から16世紀前半の伊丹城は管領細川家の内紛に巻き込まれ、度々歴史の舞台に登場し、「伊丹城ばかり堅固なり」と言わしめた堅城であった。その後、天正2年（1574）に池田城の荒木村重が入城し、城名を有岡城に改め、先に示した広大な規模の惣構えの城を築いている。

### 伊丹氏に関わる中世城館跡

伊丹氏を惣領家と仰ぐ庶子家森本氏は、猪名川河畔の伊丹市森本に居館（2）を築いて伊丹氏とともに各地を転戦している。居館の明確な場所や規模などはわかっていないが、森本氏とゆかりのある森厳庵（現称名寺の場所か）や高法寺跡（小字名）の位置関係から概ね現在の森本の集落辺りに推定されている。これまでの発掘調査では、高法寺の地名が残っていた場所から13世紀後半～16世紀にかけての条里に沿った溝跡などが発掘されているが、居館跡の中心部には調査がおよんでいない。

このほか、伊丹氏の家臣の城館跡を推測させる場所としては、猪名川右岸の北河原に居館跡（3）を思わせる地割が残っている。この北河原は伊丹氏の重臣北河原氏の拠点と考えられている場所で、「水府系纂」（註1）には「摂州伊丹郷北河原二住シテ氏トス」と記されている。現在の北河原地区にはそれらしい遺構は残っていないが、この場所が北河原氏の居館であった可能性がある。また、山田城主白井氏の系図（註2）には、白井市熊が天正年間に荒木村重との戦いに破れて落城し、一旦は三木に逃れるが文禄年間に帰郷し元の城跡を居住地としたと記されている。地名変更以前には「字東屋敷」、「字西屋敷」の地名が残っており、この辺りが白井氏の山田城跡（4）の推定地と考えられる。

### 絵図に描かれた城館跡

村絵図などに描かれた中世城館跡も市内に点在している。その一つ猿ヶ山城跡（5）は、この地域を描いた江戸前期の村絵図（註3）に「古城」と記された方形の区画が描かれている。同時期の別の絵図では鍵型に折れる虎口状の表現がされているものがあり（註4）、かなり信憑性が高い。昭和58年に行った付近の発掘調査（註5）では、箱堀状の遺構が2ヶ所で確認されている。発掘された堀跡は、第1トレンチでは幅3.45m、深さ1.2m、第2トレンチでは幅4.9m、深さ2mの規模で、2ヶ所の堀跡は直行する方向にあることから交点では直角に交わり、村絵図に描かれた方形プランの堀跡と一致する。堀跡から時期を特定する遺物は出土しなかったが、堀の形状は中世城館に通有の断面が逆台形である。城主などは伝わっていない。

小屋城跡（古屋野古城）（6）は、江戸後期の村絵図に「城の前」、「馬場口」、「北ノ口」という城館を

窺わせる地名が描かれた場所で、「細川両家記」(註6)によると、天文18年(1549)、細川晴元・政長方の伊丹親興が立て籠もる伊丹城を三好長慶方が対城を築き包囲したとき、小屋城に三好方の小川式部丞が入っている。また、天正6年(1578)から始まる織田信長の有岡城攻めの折には、織田方の滝川左近・武藤宗右衛門が「古屋野古城」に在陣したという記録(註7)があり、この古屋野古城が先の小屋城の可能性もある。昆陽の地は、京と西国を結ぶ西国街道と有岡城から西国街道に連絡する街道(昆陽道)、それに有馬・北摂に向かう有馬道が交差する交通の要衝でもあり、城が配置されて然るべき場所である。しかし、「細川両家記」では小屋城を伊丹城(有岡城)の乾(北西)の方向としているが、実際は伊丹城の西にあたり方向が異なっている。これをどう見るか今後の検討課題である。

市域の北部荒牧に、「城ノ前」、「土橋」、「黒丸」、「蔵垣」など城館跡を窺わせる地名が残っている(7)。城主や時代などはわからず、発掘調査などは行われていないため全く不明ではあるが、京都相国寺蔭涼軒主の季瓊真葉が記した「蔭涼軒日録」(註8)に登場する上月大和守入道の居館の可能性を指摘しておきたい。上月氏は播磨国上月荘の地名を苗字とする赤松氏の一族で、荒牧上月氏はその庶子家である。文正元年(1466)、季瓊真葉が有馬温泉に湯治に向かう途次、上月氏の館にて接待を受けている。館の近くに大和守の子息太郎次郎の館もあったという。荒牧にはここの他に該当する地名がないので、この場所が上月氏の城館の可能性があると考えられる。

#### 発掘調査で発見された城館跡

緑ヶ丘遺跡第12次調査(8)で、幅約4.96～5.56m、深さ1.43mの堀跡がL字形に曲がって発見された。堀の断面は逆台形状で、瓦質の羽笠、備前系播鉢、瓦片が出土している。堀の形状は中世の城館通有の形態であるので、新たな中世城館の可能性が高い(註9)。地名などには城館を裏付けするようなものはないが、この近辺には猿ヶ山城跡(5)も含め、江戸前期の村絵図に城館を窺わせるような表現が見受けられる。「信長記」(註10)には、織田方の有岡城包囲に各所に砦が築かれたことが記されているが、あるいは(8)の堀跡もこの一つかもしれない。これと関係するか明らかではないが、南本町3丁目目で発掘(註11)された陣城を推測させる堀跡(9)も有岡城南端の鶴塚砦と対峙する地点にある。この調査は兵庫県教育委員会が実施した南本町遺跡第3次調査で、古墳時代中期後半の円墳(径15～16m)の周囲に中世になって新たに堀が掘られたものである。中世の堀跡は幅2.5～3m、深さ1.6mで、中国製青磁碗や丹波焼片が出土している。墳丘は既に削平されているが、中世段階までは残っているこの高みを利用したと考えられる。有岡城の出城の可能性も考えられる。

註1.「水府系纂三十九」彰考館蔵(『伊丹中世史料』伊丹資料叢書2 伊丹市役所 1974年)

註2.「白井氏系図」(『荒木村重史料』伊丹資料叢書4 伊丹市役所 1978年)

註3.「寛文年間北村絵図」大鹿土地改良区蔵(『伊丹古絵図集成』伊丹資料叢書6 伊丹市役所 1982年)

註4.「寛文10年新田中野村・大鹿村堤相論裁許絵図」(前出『伊丹古絵図集成』)

註5.「猿ヶ山城跡・伊丹鹿寺跡(第14次調査)」(『兵庫埋蔵文化財調査年報』兵庫県教育委員会 1983年)

註6.「細川両家記」群書類従(前出『伊丹中世史料』)

註7.「信長記」池田家文庫本(前出『荒木村重史料』)

註8.「蔭涼軒日録」文正元年閏二月条 大日本仏教全書(前出『伊丹中世史料』)

註9.「緑ヶ丘遺跡第12次調査」(『年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1997年)

註10. 前掲書(註7)

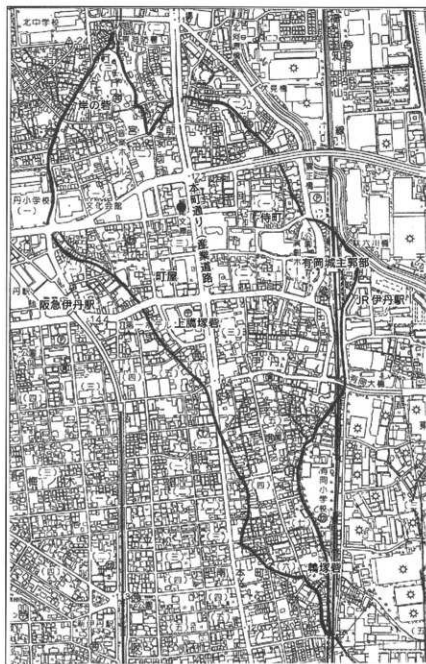
註11.「南本町遺跡第3次調査」(『年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1996年)

## 第2節 伊丹城から有岡城へ

鎌倉幕府創設当初からの御家人伊丹氏は、初め加藤姓を名のっていたが後に伊丹姓に改名し、西摂地域の有力御家人に成長する。南北朝の動乱期、建武以来足利方に属していた伊丹氏は、文和2年(1353)、南朝方の攻撃を受け「伊丹河原」で合戦におよんだ。この時、南朝方は伊丹城へ攻め寄せたが押し返したという記録(註1)が、伊丹城の関わるものとして最も古い。「伊丹河原」は、伊丹城の位置する伊丹台地東端から見下ろすことのできる猪名川の河川敷であったと思われる、伊丹城下まで南朝方が押し寄せたことになる。この当時の伊丹城の正確な位置については、これまでの発掘調査からみて現在の有岡城の場所であったと考えてよい。しかし、規模・構造については、主郭部の大半が明治以降の鉄道の敷設により壊されているため確かめようがないが、残っていた主郭部西側の発掘調査

(註2)では、この時期の土塁跡を確認している。

伊丹城および伊丹氏が再び歴史上に登場してくるのは、応仁の乱後におきた管領細川家の内紛に巻き込まれてからのことである。伊丹氏は早くから摂津守護細川家の被官の立場から、細川政元後の相継争いでは、高国方につき澄元方と対戦することになった。このような中、永正8年(1511)には、澄元方の播磨守護赤松義村に伊丹城は包囲された。この時は、高国方が山城の船岡山の戦いで勝利を得て伊丹城の包囲は解かれたが、続いて永正16年、阿波にいた澄元は勢力を整えて摂津に進行してきた。高国方は伊丹から尼崎にかけて陣を張り、伊丹兵庫守元扶も奮戦し手柄をあげているが、永正17年になって行われた澄元方の総攻撃の前に高国は各城を放棄し都に逃れ、孤立した伊丹城は落城している。この時、伊丹城にいた伊丹但馬守、野間豊前守の両名は城を放棄せず城に火をかけ自刃しているが、そのあたりの状況について「細川両家記」(註3)には「当城此数年の間、諸侍士民以下煩として



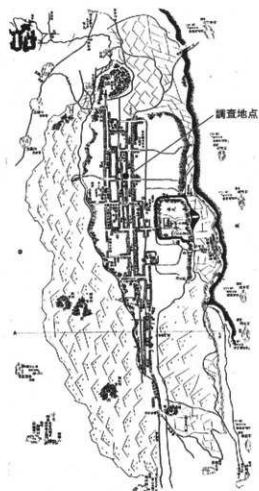
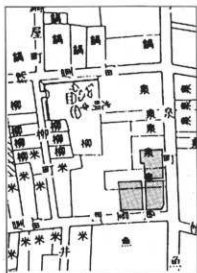
第2図 有岡城惣構えと調査地点 (1/10,000 平成10年)



こしらへたるそのしるしなく、のがれる事口おしきよ、我等二人は此城の中にて腹切らんと四方の城戸をさし、家々へ火をかけ天守にて腹切ぬ」と記述し、兩名の心情を伝えている。

この記述は、天守の存在を伝えるものとして有名であるが、当時の伊丹城の構造を示すものとしても貴重である。特に、四方に城戸（城門）を備えた構造であったこと、また永正17年（1520）の数十年前から家臣、町民を動員して城造りを行ったという記述は重要である。この頃は、畿内を中心に応仁の乱後の政情不安が続いており、伊丹城もこうした時代の必要性から城造りが本格的に進められていったものと考えられ、この時期を伊丹城が本格的な戦国時代の城郭として成立した第一段階と捉えることができる。

その後、伊丹城は一向一揆に攻められ落城寸前になるなど波乱は続いた。天文2年（1533）には一揆衆が伊丹城に迫り、1町（約100m）あまりの長さの「らうか」というものを二通りこしらえ、堀を埋め始めたという。この時は背後からの援軍により事なきを得ている。「らうか」とは廊下のことで、側面や上面を板などで囲って城内からの弓矢の攻撃を防ぐものである。これを用いて堀を埋める土を運んだものと考えられる。一揆衆によって埋め始められた堀が外堀なのか、あるいは内堀に相当するのかわからないが、急いで援軍を頼むほどの



第3図 「寛文9年伊丹郷町絵図」解説図  
『伊丹古絵図集成』より。一部加筆



第4図 「天保15年伊丹郷町分間絵図」解説図  
『伊丹古絵図集成』より。一部加筆

城内の混乱をみると、この段階では惣構えのような堅固な外構えの防御施設は整っていなかったと見られる。一揆衆の攻撃は3月5日に始まり、同月29日に木沢長政率いる京都の法華衆がかけつけ、一揆衆を攻撃したので伊丹城は事なきを得たという。

こうした一向一揆の攻撃やその後の細川晴元との関わりの中で伊丹城を取り巻く情勢は激しかった。晴元と対立した三好長慶によって、天文18年(1549)から翌年にかけて摂津一帯が兵火にさらされた。この時、晴元方の伊丹城は長慶軍に対し頑強に抵抗した。長慶方の伊丹城包囲は、東方は森本に池田衆、南は垣富・前田城に淡路国衆、西は御影塚に三好方衆、乾は小屋城に小川式部丞らが立て籠もり、伊丹城を遠巻きに兵糧攻めを狙ったものである。こうした長慶方の攻撃に対し、伊丹方は一歩も引かず、ついに翌年3月、長慶と親興は尼崎の本興寺で和睦する。「伊丹城計堅固也」と言わしめた堅城であった。おそらく、この頃の伊丹城には、外構えを含めかなりの防御施設と規模を有していたもので、後の有岡城惣構えに引き継がれていったと考えられる。

永禄11年(1568)、足利義昭を擁して入京をはたした織田信長は、わずかの内に山城・摂津一帯を制圧した。伊丹氏は松永久秀や三好三人衆との関係を絶ち、信長方について芥川城の和田惟政および池田城の池田勝正とともに、摂津の支配を任されていく。「摂津の三守護」と言われる時代であるが、それは長くは続かなかった。やがて、池田勝正の配下にあった荒木村重が頭角を現わし、和田惟政を打ち、さらに主家の池田勝正を追い落とすと、天正2年(1574)には伊丹城を攻めて伊丹氏を没落させている。伊丹城に入った村重は城名を有岡城に改め、ここを本拠に信長配下の武将として各地を転戦するが、その体制も短命であった。天正6年秋、村重は信長に反旗を翻したのである。同年11月、村重は足利義昭・毛利氏・本願寺と通じて信長への反旗が決定的になった後、信長の有岡城攻めが始まる。有岡城包囲網は徹底され、有岡城を取り巻くように陣城や砦を築いて援軍や兵糧を絶った。籠城10ヶ月が経った天正7年9月、村重はわずかな家臣を率いて嫡子村次のいる尼崎城に逃れた。同年11月、主を失った有岡城は、内通者が出て陥落した。「信長公記」(註4)によると、有岡城内には城と町の間に侍町が存在していたこと、周囲に上層塚砦・きしの砦・鶴塚砦が配置され、堅固な外構えが築かれていたことが記されている。有岡城段階で惣構えが成立していたことがわかる。

註1、「細川両家記」群書類従(前出「伊丹中世史料」)

註2、「有岡城跡・伊丹郷町遺跡第2次調査」(『伊丹城跡発掘調査報告書Ⅱ』伊丹市文化財保存協会 1977年)

註3、註1に同じ

註4、「信長記」池田家文庫本(前出「荒木村重史料」)

### 第3節 重要文化財旧岡田家酒蔵と調査地点

今回報告する第66次調査地点は、平成4年に重要文化財に指定された「旧岡田家住宅・酒蔵」の東側隣接地にあたる。この酒蔵は昭和58年4月まで酒の仕込みが続けられたが、昭和59年には廃業し、昭和61年に伊丹市に売却されたものである。伊丹市では、店舗、洗い場・釜屋、酒蔵の主要施設3棟を除いて他の建物を解体してその跡地の有効活用を図ることにした。今回の発掘調査はその一環として計画された工芸センター建設計画地である。

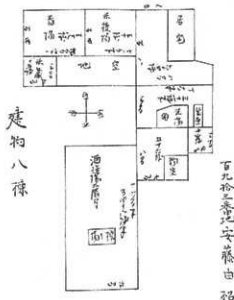
旧岡田家酒蔵の操業時の敷地と建物の配置状況（第6図）を見てみると、広い敷地に酒造工程に必要な数々の建物が建っていたことがわかる。「明治19年酒造場絵図面届書写」（第5図）でも同様に、居宅、洗い場・釜屋、酒造場、春場など8棟の建物が建っていた。今回の調査範囲は、明治19年の春場・米積場・米蔵の跡地と杜氏宿舎・岡田家旧宅・倉庫部分にあたる。

旧岡田家酒蔵の建築年代については、店舗から発見された棟札と建築史的調査により、正面の店舗は延宝2年（1674）の建築、奥の酒蔵はそれより遅れて18世紀に入って建築されたと推測されている。解体され残っていないが酒蔵の奥にあった大蔵（千石蔵）はさらに遅れて19世紀以降と考えられ、酒蔵が時代とともに次第に拡充されていった様子が窺われる。

旧岡田家酒蔵の所有者は古文書の調査により、延宝2年の店舗建築時は酒道家松屋と兵衛、その後松屋の家運が傾き、享保14年（1729）には大坂天満の出造り酒道家鹿島屋清右衛門に売却されている。しかし、明治9年には鹿島屋が廃業して同13年頃に安藤由松に譲渡され、さらに同33年には安藤から岡田正造に譲渡されるなど、明治期に目まぐるしく所有者が替わっていることがわかる。この酒蔵で醸造されていた主要銘柄は、松屋から鹿島屋段階は一貫して「松緑」、安藤由松段階は明らかではないが、岡田家に移っては「富貴長」、大手柄酒造北蔵になってからは「大手柄」である。

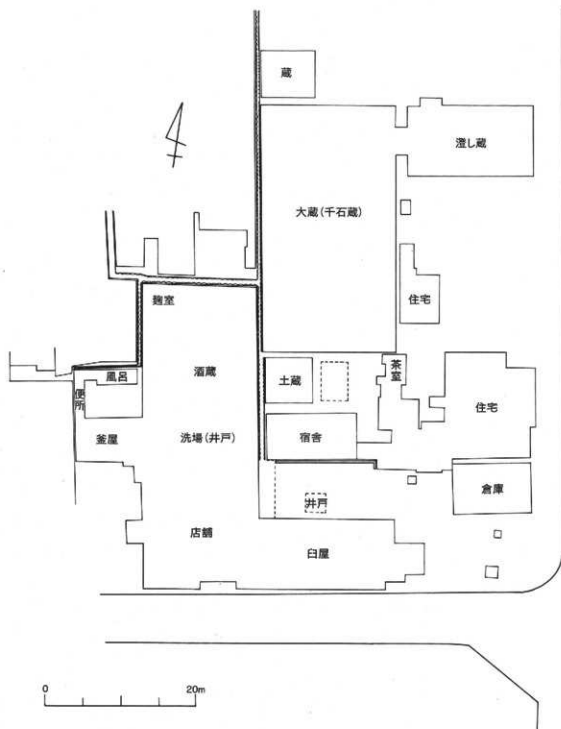
平成7年1月17日の阪神・淡路大震災では、店舗が大きく西へ傾き、店舗と酒蔵の屋根が崩落するなど壊滅的な被害があり、同年より4か年をかけて全面解体修理工事が行われた。また、この工事に合わせ、酒蔵内部の発掘調査が実施されている。この発掘調査では、延宝2年建築の店舗下層からも酒造用の大型甕が発見され、延宝2年以前からの場所で酒造が行われていたことがわかったほか、酒蔵の礎石（根石）に「松屋」の墨書があり、奥の酒蔵も松屋段階（延宝2年～享保14年）の建築であることも明らかになった。

今回の第66次調査で明らかになった旧岡田家酒蔵との関係は、Ⅲ区の第1遺構面で検出された礎石建物1である。この建物跡の場所は溝6の南側にあたり、もと白屋の建っていた場所にあたるが、白屋の規模より梁行が長く同じ建物ではなく、白屋以前の酒蔵の建物であったと考えられる。礎石建物の礎石は取り払われていたが、その下に大きな根石が残っていた。その根石の一つに鹿島屋清右衛門を表わす「鹿し清」銘と酒銘「松緑」の商標「三つ鱗」が墨書（図版6-2）されていたことから、礎石建物が旧岡田家酒蔵の施設であったことが明らかになったほか、鹿島屋が旧岡田家酒蔵を取得した享保14年（1729）以降に建築さ



第5図 「明治19年酒造場絵図面届書写」  
(伊丹酒造組合文書)

れたこともわかった。礎石建物の機能は明らかではないが、店舗、洗い場・釜屋、酒蔵以外の建物であったと考えられ、酒造工程からみると酒造米を精米する白屋や米蔵の可能性が最も高い。



第6図 酒蔵操作時の旧岡田家酒蔵建物配置図 (1/500)  
 (『有岡城跡発掘調査報告書Ⅶ』より転載)

## 第2章 調査概要

### 第1節 調査方法

「旧岡田家住宅・酒蔵」に隣接する一帯に俳諧コレクションを収蔵・展示する柿衛文庫、近代絵画を収蔵・展示する美術館などを建設し、「文化ゾーン」を建設する計画に従い、昭和63年、新たに工芸品の製作・展示を目的とする工芸センターの建設が計画された。この度の発掘調査は、この工芸センター建設に伴う発掘調査である。工芸センターは地下構造（地下2階）とし、旧岡田家酒蔵への眺望に配慮する工法がとられた。また、既存施設の美術館の展示・収蔵スペースの確保と観覧者の導線の確保を目的として、地下の工芸センターから美術館への通路も合わせて建設されることになった。調査対象範囲は、南北に延びる本町通り（現産業道路）と産業道路から西に入る昆陽口通りに面した角地857㎡である。

#### 調査計画

今回の調査前に、文化ゾーン敷地では美術館建設に伴う第29次調査（昭和61年度）、美術館庭園建設に伴う第44次調査（昭和62年）を実施しており、この辺りの遺跡の状況はある程度理解できていたため確認調査は行わなかった。当初の計画は、そうした隣接地の過去の調査データから、地表面から最終遺構面（地山面）までの間に3面の遺構面が存在すると予測し、攪乱された表土のみ重機を用いて掘削し、それ以下は人力で掘り下げる方法をとった。

発掘調査に際して調査区を3区（Ⅰ区～Ⅲ区）に分け、その間に土層観察用の畦を設けた。この土層観察用畦は、調査範囲全体の土層の堆積を観察するために、発掘調査の最後までこれを残すことにした。調査記録については、遺構平面図はアドバルーンを用いた空中写真撮影による図化を行い、遺構断面図や土層断面図などは調査補助員の手測りによって実測することとした。また、遺構平面図は国土座標を用い、遺構断面図などは水準点の標高を基準とした。

#### 調査計画の変更

調査を開始すると、とくに北側にあるⅠ区では当初考えていた遺構面に加え、さらに時期の異なる何面かの遺構面が存在することがわかってきた。結局、Ⅰ区では7面の遺構面が確認され、Ⅱ区においてもそれに相当する遺構面が存在していることがわかった。Ⅲ区では近代の攪乱が著しくⅠ・Ⅱ区ほど良い状態の土層堆積は確認できなかったものの、Ⅰ・Ⅱ区に準じて調査を行うことにした。これにより、調査の作業量と記録量が飛躍的に増大したため、調査補助員を急遽増員して対応するこ



第7図 調査区位置図 (1/2,500 平成10年測量)

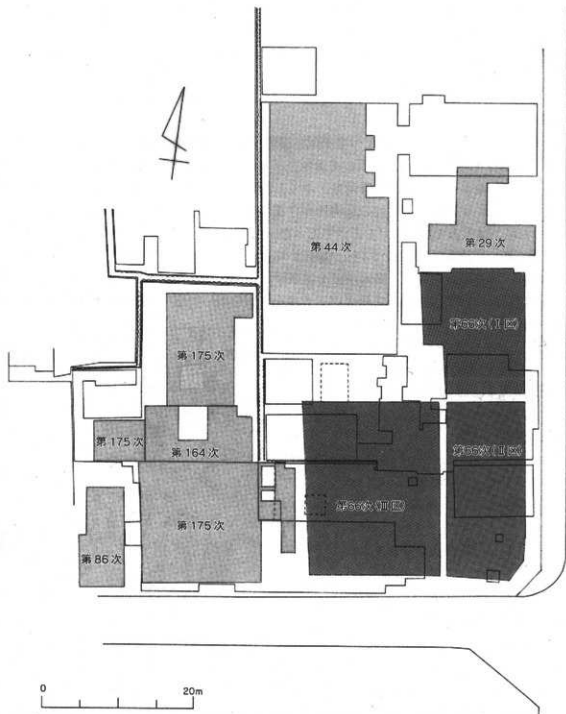


とにした。調査期間は、当初9月下旬までを現地調査、その後10月末までを整理期間としていたが、以上の理由により現地調査が10月上旬まで延長されることとなった。

調査記録は、遺構平面図はすべて空中写真撮影による図化を行うこととしていたが、記録が必要な遺構面数が倍以上となったため、最初の遺構面のみ空中撮影により図化を行い、それ以後の遺構面については調査補助員の手測りによって実測することとした。

#### 調査中の遺構面の設定

調査中は、第1～7遺構面を設定して調査を行ったが、広い調査区を通して必ずしも同一の遺構面が広がっていたわけではない。I区とⅢ区には第1・2遺構面が確認できたが、Ⅱ区では近代の捜乱



第8図 調査区設定図 (1/500) (『有岡城跡発掘調査報告書Ⅶ』より。転載・加筆・修正)

が著しく繋がりがわからなかった。全体を通して存在する遺構面は第3遺構面であり、概ね元禄大火（元禄元年・12年・15年の3回の何れか）を下限とする。従って第1・2遺構面はそれ以降の時期となる。また、第3～5遺構面は概ね江戸時代前期（17世紀代）に相当し、さらに第6・7遺構面は古く、Ⅱ・Ⅲ区で見つかった弥生時代中期の時期から17世紀初頭までの間である。

### 報告書記載の遺構面

報告書作成にあたっては、各区共通の遺構面を整理する関係から、調査中の遺構面をこの報告書では第1～4遺構面に整理統合した。その詳細については次章（第3章第1節）にて説明する。

## 第2節 調査経過

調査日誌の抄録を示して調査経過に代えたい。

昭和63年

- 7月 26日 現地にて調査対象範囲を設定する。
- 27日 重機の搬入。柿衛文庫ゆかりの柿木を保護するため、Ⅰ区西側の調査範囲を変更する。調査区内に散乱していた庭石などを移動し、Ⅰ区から重機掘削を開始する。午後より残土の搬出を行う。
- 8月 1日 重機掘削を完了する。
- 2日 Ⅰ区にて13基連なる竈が発見される。
- 3日 Ⅱ区北壁にて上下2枚の焼土層が存在することが確認される。表土直下の整地面を第1遺構面、上位の焼土層直下の整地面を第2遺構面、下位の焼土層直下の整地面を第3遺構面とする。
- 5日 Ⅱ・Ⅲ区の近現代の攪乱坑の掘削を始める。
- 6日 Ⅲ区の遺構検出に全力を傾注するため、大勢の作業員を投入する。
- 7日 先行していた宮ノ前市街地再開発事業に伴う第54次調査が本日で完了し、当方の事務所に合流し整理作業を始める。
- 9日 第1～3遺構面の遺構調査を始める。
- 30日 アドバルーンを用いて第3遺構面の空中写真撮影を行う。
- 9月 8日 Ⅰ・Ⅲ区の遺構面掘り下げを始める。Ⅰ区にて五輪塔を多用する礎石建物と同一の遺構面から古寛永通宝や志野焼などが出土する。
- 10日 Ⅰ区平面実測を始める。Ⅲ区にて新たに五輪塔と宝篋印塔を用いた礎石建物が存在することが明らかになる。
- 11日 作業の進捗が遅れているため、日曜日にも作業を進める。Ⅱ区の遺構面掘り下げ、遺構検出作業を始める。
- 12日 Ⅰ区第4遺構面の平面実測を始める。村川調査団長、藤井直正大手前女子大学教授、前川要氏来訪。
- 14日 Ⅰ区第4遺構面平面実測を完了する。Ⅲ区第4（第5）遺構面の遺構掘削作業をほぼ完了する。
- 15日 Ⅰ区第4遺構面全景写真撮影を完了する。Ⅲ区では明日予定の全景写真の準備を完了する。Ⅱ区第4遺構面直上から唐津焼皿・土師皿が出土する。
- 16日 Ⅱ区写真撮影を完了する。Ⅰ区第4遺構面の掘り下げを始める。

- 17日 II区全景写真撮影。III区第4遺構面の平面実測を始める。I区第5遺構面の遺構検出を始め、石仏が発見される。
- 19日 I区第5遺構面検出作業を始め、石仏・五輪塔を礎石に転用した建物跡が見つかる。I区第5遺構面から胎土目の唐津焼皿のほか、青花や天目碗など多数の遺物が出土する。
- 21日 市役所記者クラブにて調査成果および24日に予定する現地説明会について記者発表を行う。
- 22日 I区第5遺構面平面実測を完了する。II区第5遺構面検出を完了する。III区第6・7遺構面（地山面）まで掘り下げを開始する。新聞に発掘調査の成果と現地説明会の案内が掲載される。
- 23日 I・II区にて第5遺構面の精査を行う。
- 24日 現地説明会を開催するが、朝からの雨天のため隣接の旧岡田家酒蔵内で出土遺物の展示および解説を行う。
- 27日 I・II区第5遺構面の全景写真撮影を行う。III区を地山面まで掘り下げたところ、新たに五輪塔が出土する。III区出土の礎石（根石）に墨書されていた「三つ鱗」の文様と「鹿し清」の文字が、江戸時代中期の伊丹の酒造家鹿島屋清右衛門と関係があることがわかる。
- 29日 I区第6遺構面の遺構検出をほぼ完了する。II区第6遺構面まで掘り下げを始める。III区第6・7遺構面の遺構掘削を始める。III区にて五輪塔を転用する礎石建物跡が見つかる。
- 10月 2日 I区第6遺構面平面実測を始める。II区第7遺構面まで掘り下げを始める。III区第6遺構面（地山面）から弥生土器が出土する。
- 3日 村川調査団長来訪。
- 4日 遺跡の取扱い協議のため、兵庫県教育委員会種定淳介氏来訪。
- 5日 秋雨前線の影響で無情の雨。調査遅れる。
- 7日 各区とも最終遺構面の遺構掘削を終わり、土層の実測を行う。I区土層剥ぎ取りを準備する。
- 8日 村川調査団長に発掘調査の完了を報告する。調査事務所撤去を行う。
- 11日 I区東壁の土層剥ぎ取り作業のため、種定氏の指導を受ける。

### 第3章 調査成果

#### 第1節 層序

##### 鍵層の認識（第9図）

調査区全域にわたって存在する層はないが、比較的広い範囲に認められる層が数層あり、この層を手がかりに遺構面の検出作業を行った。比較的広範囲に存在する層は、焼土層、オリブ色系土、地山（黄褐色粘質土）である。

焼土層は、Ⅲ区北壁では上下2層存在し、Ⅰ区からⅡ区にかけての東壁では厚みのある焼土層1層が確認された。焼土層の標高を見ると、Ⅰ区からⅡ区東壁の焼土層はⅡ区北壁の下位の焼土層とつながる。調査に際してはこの焼土層を鍵層とし、焼土の堆積が無いか薄い場所では同等の標高に合わせて遺構面を検出した。焼土層の下位で比較的広い範囲に認められる層としては、Ⅰ区東壁の第42層・第56層（ともにオリブ褐色粘質土）、Ⅱ区東壁の第86層（オリブ色粘質土）、第113層（オリブ褐色粘質土）などがあり、それらの層上面を遺構面として認識することができた。また、最下の遺構面は所謂地山面（黄褐色粘質土）を基準とした。

##### 調査中設定の遺構面

調査中には焼土層直下の整地地面を第3遺構面、それより上位の2枚の整地地面を第1遺構面、第2遺構面とした。第1遺構面は土層断面で確認したものであり、調査中は第2遺構面まで掘り下げて両遺構面の調査を同時に行った。

第3遺構面は、焼土層の広がりや焼土を埋土に含む遺構の存在などによって認識できたため、Ⅰ～Ⅲ区のすべてで検出された。とくにⅠ・Ⅱ区では、赤く焼けた土間が見つかっている。

第4遺構面と第5遺構面は、オリブ色系の土層の上面を第4遺構面、その直下にある黄褐色あるいは明褐色の土層上面を第5遺構面とした。

第6遺構面は、第5遺構面と地山（黄褐色粘質土）の間に存在する遺構面として認識した。第6遺構面は調査区全域で認識できたわけではなく、Ⅲ区では第6遺構面が存在せず、第6遺構面相当時代の遺構は第7遺構面（地山面）の遺構と合わせて調査を行った。

##### 報告書記載の遺構面

広い調査区では必ずしも同一の土層の堆積が見られず、遺構面の繋がりも明らかではないことが多かった。調査中は第1～7遺構面に分けて調査記録を作成したが、整理作業を始めてみると各区の遺構面の時期が若干異なっていたり、遺構の時期にも幅があることがわかってきた。このことは、江戸時代の調査範囲が、「天保15年伊丹郷町間絵図」（第4図）に明らかかなように何筆にも分かれて別

調査中の遺構面	報告書の遺構面	時 期
第1遺構面 第2遺構面	第1遺構面	18世紀後半～19世紀後半
第3遺構面	第2遺構面	18世紀前半
第4遺構面 第5遺構面	第3遺構面	17世紀前半～後半
第6遺構面 第7遺構面	第4遺構面	～17世紀初頭

表1 調査中の遺構面と報告書の遺構面の関係





人の所有であったことと関係があると考えられる。江戸時代前期の状況は明らかではないが、おそらく細分化された土地において、それぞれに整地や普請が行われていたことから、同一の遺構面として捉えることが困難になったものであろう。

以上の理由により、報告書作成にあたっては遺構面を整理して報告することにした。調査中の遺構面と報告書の遺構面の関係は概ね表1のようになる。

## 第2節 遺構面と検出遺構

前節で説明したように報告書では、調査中に設定した遺構面を整理し第1～4遺構面に分けて遺構全体図を作成した。各区の特徴的な遺構や地割溝などの主要な遺構を説明し、遺構面と検出遺構を概観してみたい。

### 第1遺構面（第10図）

屋敷境に設けられた溝としては、Ⅰ区に溝8、Ⅱ区に溝7、Ⅲ区に溝6がある。溝7と溝6は形状が異なるが、同じ方向性をもっているので一連の屋敷境とみられる。「天保15年伊丹郷町分間絵図」（第4図）に描かれた屋敷地の境は溝8と溝6・7と考えられる。そうだとすれば、第1遺構面の屋敷割は、溝8より北側と溝8と溝6・7の間、溝6・7より南側の3筆に分けることができる。

溝8より北側の屋敷には、11基の小型竈が連なった竈1～11、3基の竈が一組になった竈12・13・14、1基単独の竈15や、井戸1などがある。これらの遺構は同時に存在したのではなく、ある程度長期にわたり台所として使用されていたことを窺わせる。竈の規模や数から見て一般の町屋というより、酒蔵の一部か商家の可能性が高い。

溝6・7より南側の土地は、近年まで重要文化財旧岡田家酒蔵の敷地として利用されていたもので、調査で見つかった礎石建物1も蔵の一部の建物である。溝8と溝6・7の間の屋敷地では、竈16～21と地下室1が検出されている。この屋敷地には明治以降に旧岡田家酒蔵を取得した岡田利兵衛氏の住宅が建っていた。

### 第2遺構面（第11図）

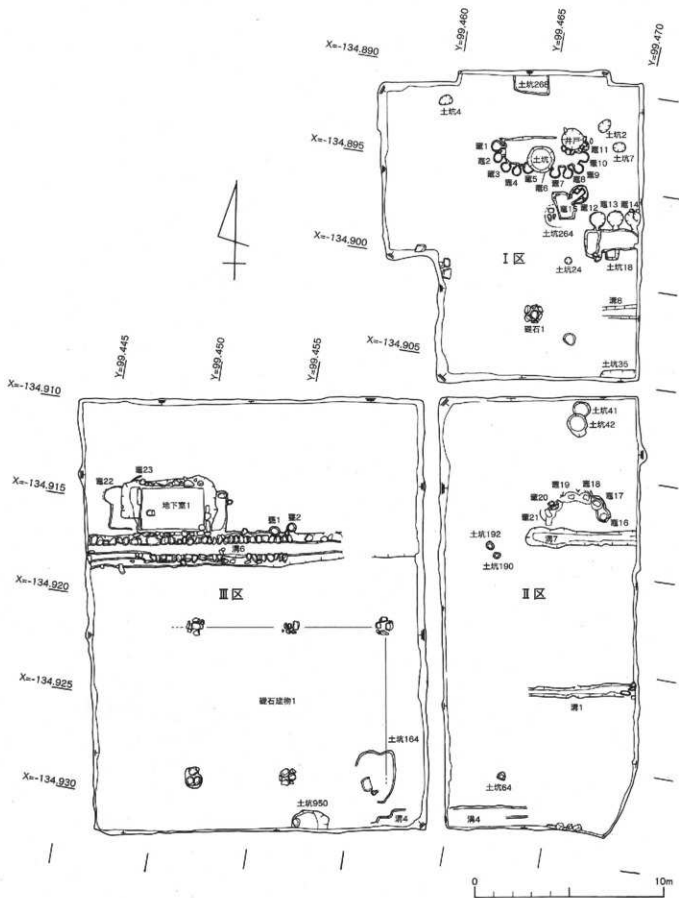
この遺構面には明確な屋敷境を示す溝は確認できなかったが、Ⅰ区の礎石列1辺りに屋敷境があった可能性が高い。Ⅱ・Ⅲ区に東西方向の溝が見られるが長くは繋がってこない。特徴的な遺構には、Ⅰ区に焼土処理土坑群、Ⅱ区北側に唐白6基以上を連ねた跡（白屋1）が見つまっている。

### 第3遺構面（第12図）

この遺構面の屋敷境に関係する遺構は、Ⅰ区の溝12、Ⅲ区の溝11、それと同じ方向性をもつⅡ区の礎石列がある。この屋敷境は第2遺構面では不明確であったが、第1遺構面とほぼ一致している。主要な遺構には、Ⅰ区の礎石建物2・3・5、Ⅱ区の大型の竈（竈28・29、竈30・31）がある。礎石建物は各区から見つまっているが、この時期の礎石には五輪塔などを転用するものが多い。大型の竈はⅠ区からも発見されており、酒造に関わるものと考えられる。

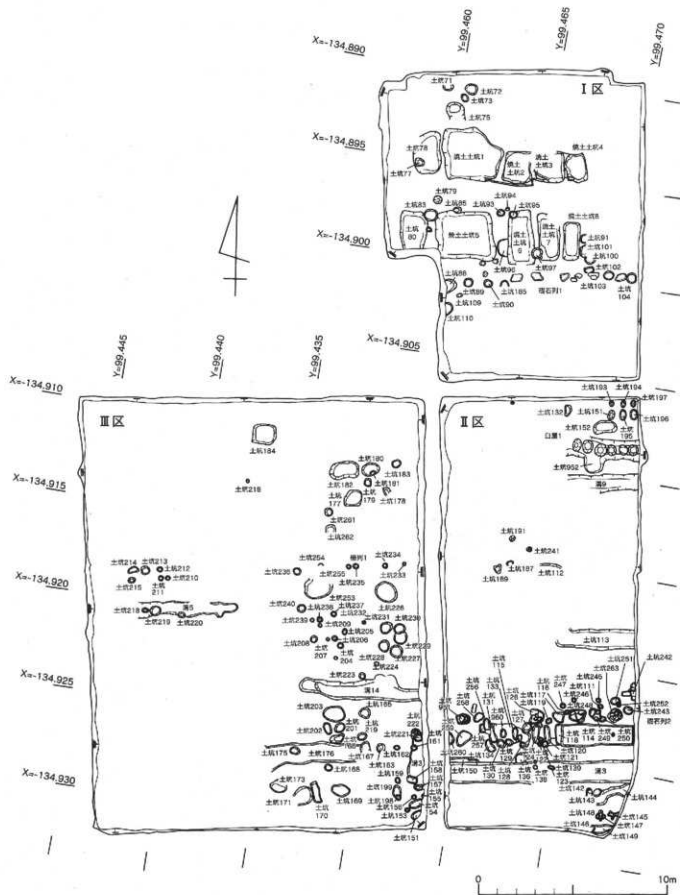
### 第4遺構面（第13図）

この遺構面の時期は、出土遺物から見ると概ね16世紀後半～17世紀初頭頃と考えられるが、Ⅱ区とⅢ区では溝16や周辺の土坑から弥生時代中期の壺形土器の完形品が出土するなど、時期幅が広い。Ⅲ区には渡米銭を埋納した土坑910がある。



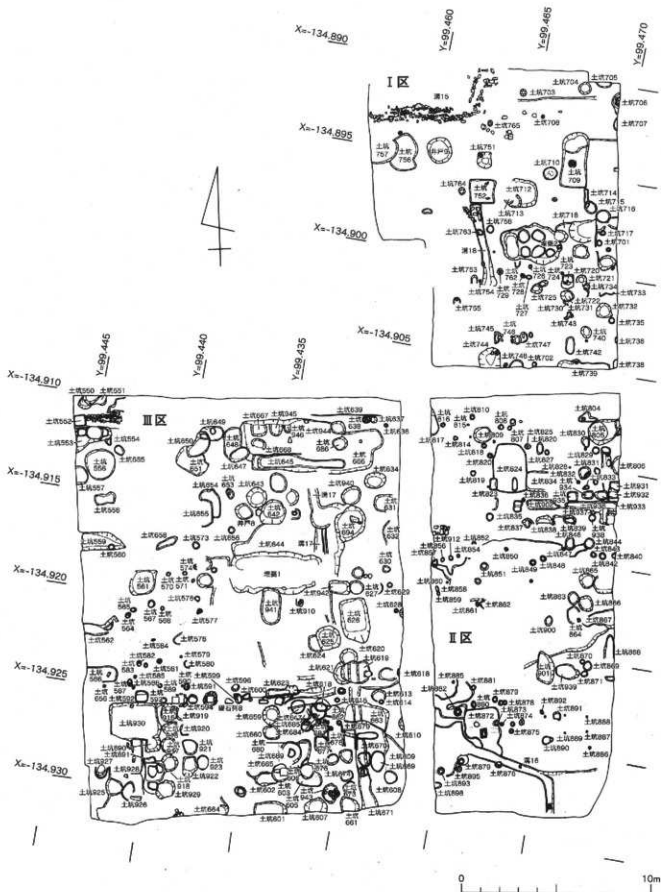
第10図 第1遺構面全体図





第11图 第2遺構面全体图





第13图 第4遺構面全体图

### 第3節 第1遺構面

第1遺構面(第10図)は、調査中は上下層に分け、上層を第1遺構面、下層を第2遺構面として調査したものである。しかし、広範囲にわたる調査のため、細かな遺構面を整合させることがむしろ煩雑になるため、本書では合わせて第1遺構面として報告した。第1遺構面の時期は、概ね18世紀後半から19世紀後半にあたる。この時期は、旧岡田家酒蔵が最も拡張される時期に相当し、Ⅲ区の礎石建物1は酒蔵の2代目の所有者鹿島屋清右衛門が建てたことが根石の墨書から判明した。

#### 建物跡

##### 礎石建物1(第14図 図版6)

Ⅲ区中央部に位置する。礎石はすべて取り払われ残っていないが、礎石直下の根石によって建物跡の存在が確認された。残っていた根石は6ヶ所あるが、南東隅の1ヶ所は土坑164に切られていた。根石は桁行(東西)2間、梁行(南北)1間で、根石間は桁行が5mの間隔、梁行は7.9mの間隔である。根石から正確な柱間距離を求めることは難しいが、試みに尺に換算(1尺=30.3cm)すると桁行が16.5尺、梁行が26.1尺となる。根石は、90cm四方の掘り方に概ね30~70cm大の川原石を一段に3~6個、それを数段積み上げた構造である。この建物跡は、溝6を越えて北側には延びず、東側にも続かないと考えられるが、西側、つまり旧岡田家酒蔵の方向に続いていた可能性がある。また、南側は昆陽口通りを面していたと推測される。

根石の一つには「三つ鱗」の文様と「鹿し清」の文字が墨書きされていた(図版6-2)。「三つ鱗」は旧岡田家酒蔵の施主松屋と兵衛が醸造していた酒の銘柄「松緑」の商標のことで、酒蔵を松屋から引き継いだ鹿島屋も同銘柄を使用していた。このことから「鹿し清」は鹿島屋清右衛門をさすと考えられ、鹿島屋が酒蔵を取得した享保14年(1729)以降の建築であることもわかった。

これらの根石の掘り方から時代を裏付ける遺物は出土しなかった。

#### 溝跡

##### 溝6(第15図 図版5・7・23)

Ⅲ区で検出した東西方向の地割溝である。検出長13.6m、幅40~60cm、深さ14~30cmを測る。溝は西から東へ傾いている。溝の縁石は一段組で、石の短辺を内側に向けて配置している。溝のすぐ北には地下室1が控えていることから、北側の縁石上には建物の壁が築かれていたと考えられるが、南側に関しては礎石建物1に伴う壁が乗っていたのか、あるいは縁石のままだったのかは分からない。

出土遺物は軟質施釉陶器皿(1)、肥前白磁染付皿(2)・碗(3)などがある。1はロクロ成形により薄手でシャープな器形を呈す。口縁部に煤の付着がみられ、灯明皿として使用されていたものである。18世紀前半頃の所産である。

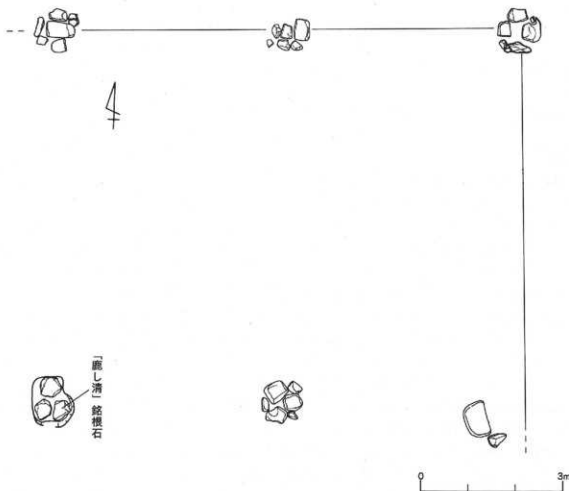
##### 溝7(第15・22図 図版10)

Ⅱ区で検出した東西方向の地割溝で、調査区外へ延びる。検出長5.7m、幅0.7~1.1m、深さ1mを測り、断面長方形を呈す。瓦片・焼土を含むオリーブ黄色粘質土を埋土とする。溝6に比べ、掘り方はかなり深く、縁石を伴わないなど形状は違うが方向性は同じであるため、一連の地割溝と思われる。

出土遺物は16世紀後半頃の青花碗(4)で、混入品である。

##### 溝8

Ⅰ区南側で検出した東西方向の地割溝である。検出長2m、幅70cm、深さ90cmを測り、断面長方形を呈す。にぶい黄橙色砂礫を埋土とする。出土遺物はないが、溝7と規模・形状がほぼ同じであるこ



第14図 礎石建物1平面図

とから、同時期の遺構と考えられる。溝6・7と溝8は調査区内を3筆（第4図参照）に分けている地割溝に相当すると推測できる。

#### 溝4

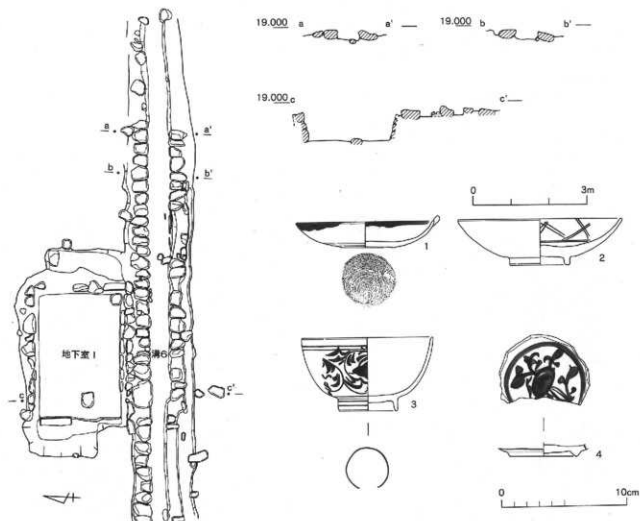
Ⅱ・Ⅲ区の南端で検出した溝である。東端で北へ屈曲して調査区外へ延びる。検出長13.3m、幅60～65cm、深さ30cmを測り、断面V字形を呈する。溝の上層にはオリーブ褐色砂質土が、下層にはオリーブ褐色粘質土が堆積する。

肥前白磁染付丸文碗、施釉陶器片、京焼系鍋・碗、堺焼播鉢、平瓦などが出土している。18世紀後半頃の所産である。

#### 地下室跡

##### 地下室1（第15・16図 図版5・7）

Ⅲ区の北側に位置する。南側には溝6が隣接する。平面形は長方形で、底面はほぼ平坦である。規模は長さ5m、幅3m、深さ80cmを測る。三方に石組があり、20～50cm程度の花崗岩が3～4段残り、その内側に方面をもち、石組の内法の規模は長さ3.3m、幅2.2mを測る。西側には石組はなく、北寄りの底面に長さ85cm、幅20cm以上、高さ20cmの切石が置かれ、壁がなだらかに立ち上がることから、



第15図 溝6・地下室1平面・断面図、溝6・7出土遺物

石段があったのではないかと考えられる。また西壁面の南寄りには粘土と瓦を詰め込んである。このような石組のある地下室は伊丹郷町では検出例があまりない。

年代を想定できる遺物は出土しなかった。出土したのは唐津焼皿であるが、混入品と考えられる。

## 井戸跡

### 井戸1 (第21図 図版5・9)

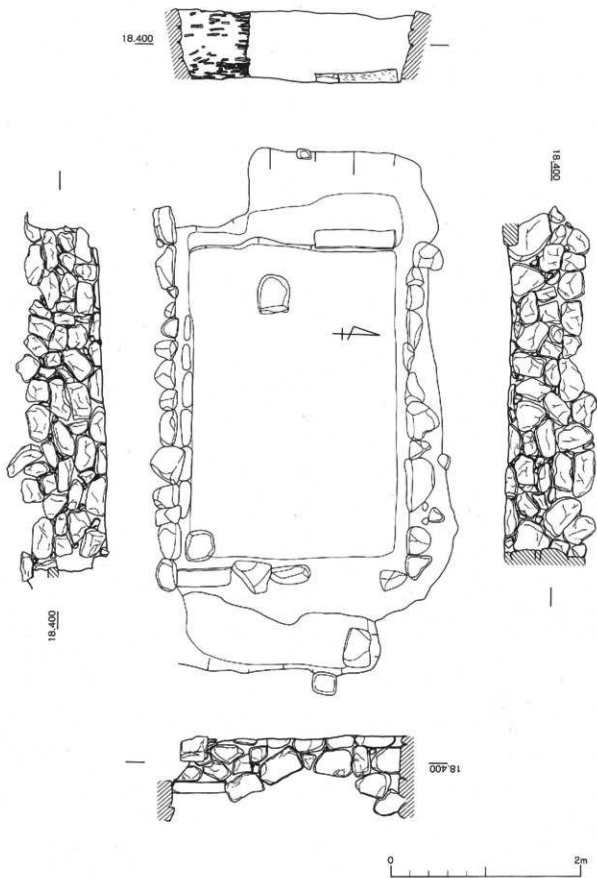
I区の北側に位置する。竈10・竈11を切っている。平面形は円形である。規模は直径1.1mを測り、深さは検出面より約90cmまで掘削したが、底は未検出である。掘り方の上面の周囲には20~30cmの花崗岩を巡らしている。内部上方の壁には瓦を埋め込んだ井戸側構造をもち、下方は素掘りの井戸である。

図示できる遺物は無かったが、丹波焼甕体部片や肥前系陶器碗、肥前白磁皿・染付皿、瀬戸白磁染付碗等が出土している。19世紀後半と考えられる。

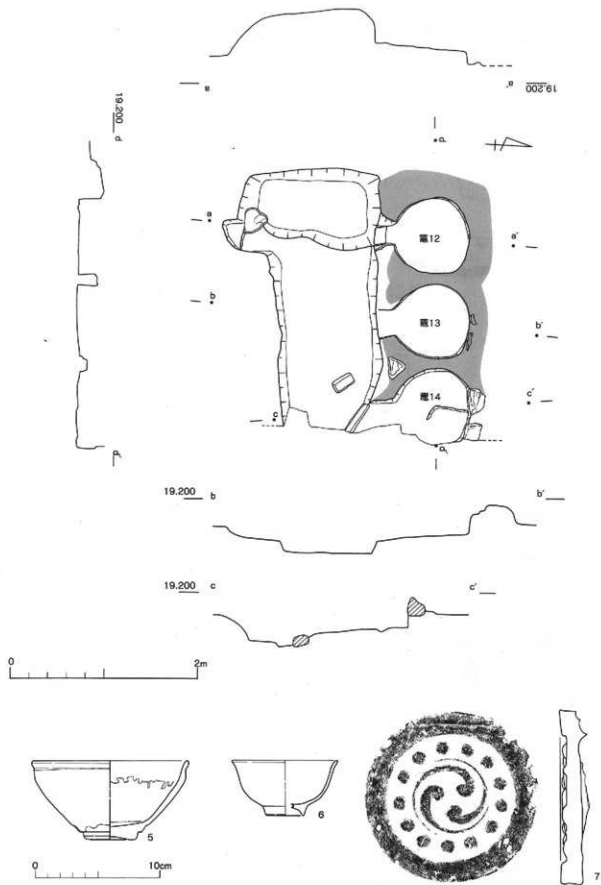
## 竈跡

### 竈12・13・14 (第17図 図版8・23)

この竈は、I区の東壁際に検出した3連の半地下式の竈である。3基の竈が東西方向に直線的に並

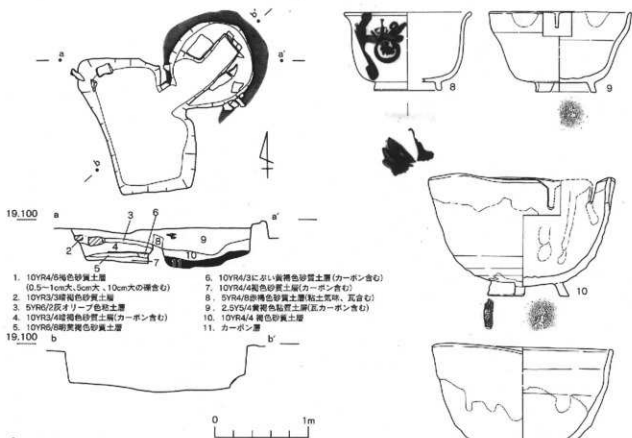


第16图 地下室1平面·立面图



第17圖 竈12・13・14平面・断面図、出土遺物

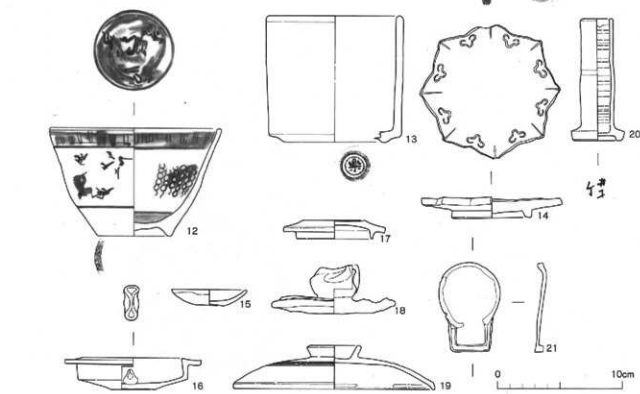




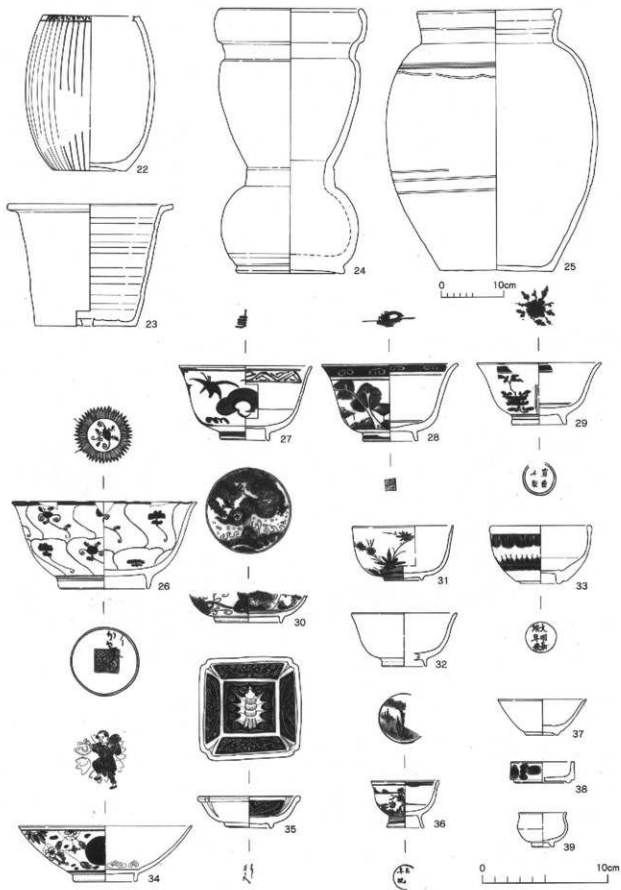
19.100

- 1. 10YR4/5褐色砂質土層 (0.5-1cm大、5cm大、10cm大の礫含む)
- 2. 10YR3/3暗褐色砂質土層
- 3. 5YR2/2灰カリーア色砂土層
- 4. 10YR3/4暗褐色砂質土層(カーボン含む)
- 5. 10YR6/8暗褐色砂質土層
- 6. 10YR4/3にがれ褐色砂質土層(カーボン含む)
- 7. 5YR4/4暗褐色砂質土層(カーボン含む)
- 8. 5YR4/6暗褐色砂質土層(粘土気味、瓦含む)
- 9. 2.5Y5/4黄褐色粘質土層(瓦カーボン含む)
- 10. 10YR4/4 褐色砂質土層
- 11. カーボン層

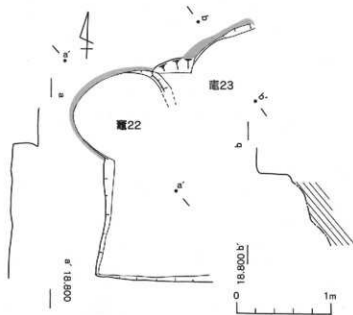
19.100



第18図 竈15平面・断面図、出土遺物(1)



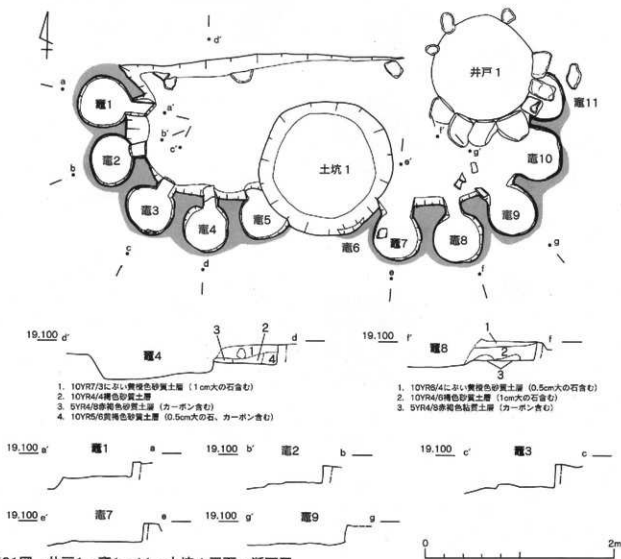
第19図 甕15出土遺物(2)



第20図 竈22・23平面・断面図

び、その手前に長方形の焚口部が設けられている。3基のうち東側の1基は東壁にかかっており全体形は明らかではないが、調査区と敷地との関係を見ると4連は考えがたい。

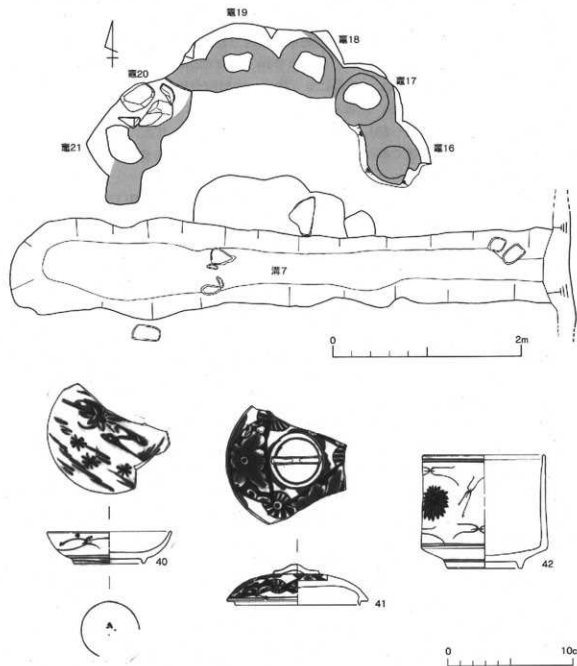
竈の径は80cmで、同規模の竈が連なっている。構築方法は竈1～11と違い、掘り方内部に石を並べて芯にし、その間を粘土で充填して構築し、表面は壁土状の粘土を貼って仕上げている。3基とも竈の底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。焚口には長方形の凝灰岩の切石を横渡しているが、これは燃料の薪を並べる用途で置かれたものであろう。焚口部は竈底より一段下がっている。竈の壁面の高さは30cm程度と浅かったが、これは遺構を掘り下げて検出したことによるもので本来はもっと深かったと考えられる。



第21図 井戸1・竈1～11・土坑1平面・断面図

1. 10YR7/3に多い黄褐色砂質土層 (1cm大の石含む)
2. 10YR4/4褐色砂質土層
3. 5YR4/8赤褐色砂質土層 (カーボン含む)
4. 10YR5/6黄褐色砂質土層 (0.5cm大の石、カーボン含む)

1. 10YR8/4に多い黄褐色砂質土層 (0.5cm大の石含む)
2. 10YR4/6褐色砂質土層 (1cm大の石含む)
3. 5YR4/8赤褐色粘質土層 (カーボン含む)



第22図 溝7・竈16～21平面図、出土遺物

6は瀬戸白磁小杯である。この他に、肥前白磁染付皿(蛇の目凹型高台)や京焼系陶器土瓶・土鍋類の体部片(イチチン掛け)・底部片等が出土している。5は瀬戸・美濃焼天目碗である。概ね19世紀前半から後半と考えられる。

#### 竈15 (第18・19図 図版8・23・24)

I区の竈1～11と竈12・13・14の間に位置し、焚口を南西方向に向けている。竈は単独1基で、それに長方形の焚口部が設けられている。普通は竈の主軸と焚口部の主軸と一致するのであるが、この竈の場合は、長方形の焚口部の隅に斜めに竈が取り付けられている。竈は半地下式構造で、掘り方の内側に平瓦片と粘土を交互に積んだ上、表面に壁土状の粘土を貼って構築している。竈の規模は、径90cm、深さ48cm、焚口部の規模は長さ1.45m、幅90cm、深さ35cmである。竈底の中央にある長方形

の灰掻き出し溝は、その両側に凝灰岩の切石を並べて壁を築いている。灰掻き出し溝の規模は幅28cm、長さ75cm、深さ10cmである。竈の廃棄後に多量の陶磁器が廃棄されていた。

遺物の出土量はコンテナ2箱分である。8は京焼系鉄絵碗で乾山焼の写しである。9～11は明石焼である。高台内中央に「明石」の刻印を持つ。この中で10・11は刻印のほかに高台付に「耕山」の刻印が見られる。同じく京焼系碗(12)の台付にも「耕山」の刻印が見られる。「明石」の刻印は持たないが、明石焼の可能性も考えられる。13は京焼系碗で楽焼写しである。高台内に「楽」の刻印を持つ。磁器は端反りのものが多く(26～29)、小振りな碗(31～33)も見られる。32と35は同じタイプのものが数点出土していて、何枚か組であったと考えられる。19世紀中頃から後半と考えられる。

#### 竈22・23(第20図 図版8)

Ⅲ区北東部に位置し、地下室1に竈焚口部を切られている。焚口が南側に開口する2基連基型の半地下式竈である。向かって右側の竈(竈23)は、竈奥壁の一部を残して壊されていたが、左側の竈(竈22)は焚口部まで残っていた。それによると、竈底には灰掻き出し溝はなく平坦で、焚口部の底面までほぼ同じ深さであった。焚口部は残っていた西壁と南壁をみると平面は長方形で、壁面に石組みなどは見当たらない。規模は、左側の竈が径約1m、深さ26cm、右側の竈の正確な径はわからないが、左の竈より大きかったと考えられる。深さは35cm以上ある。

図示できる遺物はなかったが、焙烙E類(難波編年)の口縁部片、肥前白磁染付碗・筒形碗・青磁染付碗蓋等が竈22から出土している。18世紀中頃から後半と考えられる。竈23から遺物は出土していない。

#### 竈1～11(第21図 図版9)

Ⅰ区中央部において小型の竈が扇形に並んだ状態で検出された。確認された竈は11基であるが、中央部分を土坑1、北東隅を井戸1に切られている。竈は地面を掘りくぼめて構築する半地下式構造で、径50～55cmの同規模の竈が焚口を北に向けて並んでいる。竈の主軸方向をみると、土坑1を境にそれぞれ東側と西側に分かれるように見受けられる。伊丹郷町では、小型の竈が並ぶ例は多いが普通は5～6基であるので、東の一群(竈6～11)と西の一群(竈1～5)はどちらが古いか不明であるが、造り替えが行われた可能性が高い。

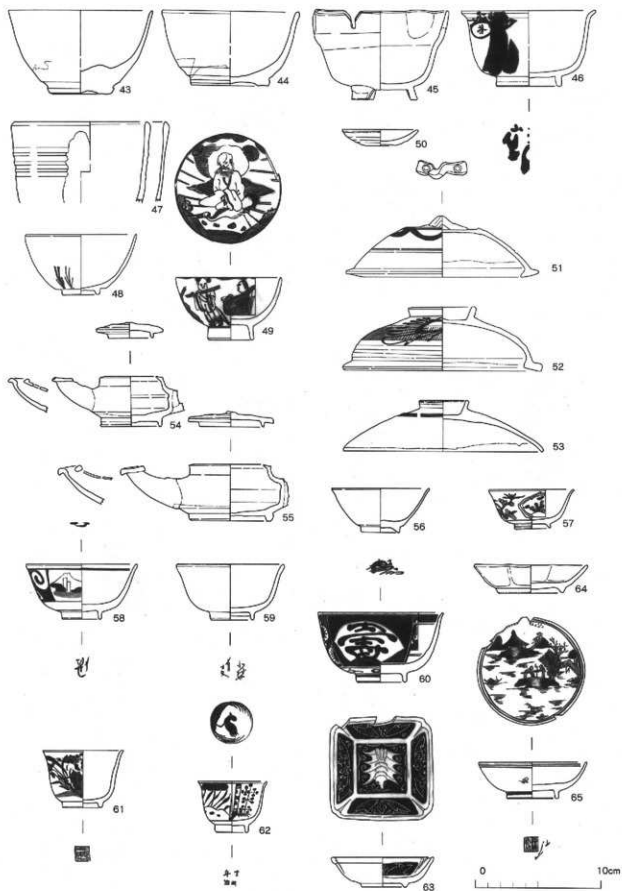
竈の構築にあたっては、竈より一回り大きい掘り方を設け、その内部に瓦片と粘土を交互に挟んで積み上げ、その表面に粘土を貼って仕上げている。竈の現高は20cmであるが、全体を掘り下げて検出したため、もとはこれに倍する深さがあったと考えられる。

図示できる遺物は無かった。これらの遺構を切っている土坑1からは、肥前系陶器刷毛目碗片や、京焼系陶器土瓶・土鍋類の体部片と底部片、白磁陽刻文皿が出土している。これらの遺物から土坑1は19世紀中頃から後半と考えられ、竈1～11はそれ以前と考えられる。

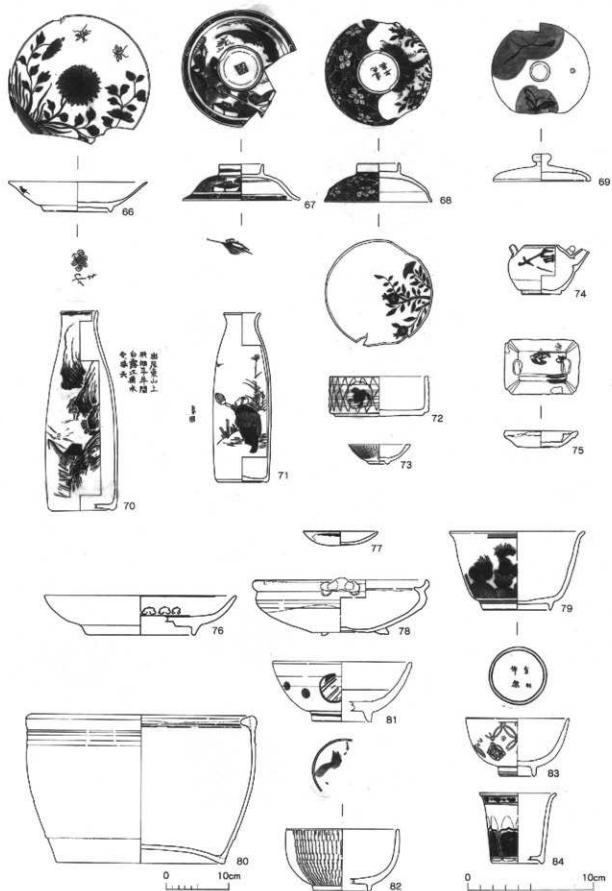
#### 竈16～21(第22図 図版10・24・25)

Ⅱ区の北部、溝7の北側に位置する。竈の上部構造は破壊されており、粘土が丸い範囲で赤く焼けていたことから竈跡と判断した。赤く焼けた範囲は等間隔に6ヶ所あり、それが半円形に並んでいる。丸く焼けた範囲は径50cmほどで一定していることから、竈1～11のような同規模の竈が連なる構造であったと考えられる。そうであれば、焚口部は南側であったと考えられるが、焚口部に相当する範囲は竈底から20cmほど緩やかに下がるだけで範囲は明らかではない。この竈をもつ建物は、南側の溝7の手前が壁通りと考えられるので、竈は建物の南隅に位置していたことになる。

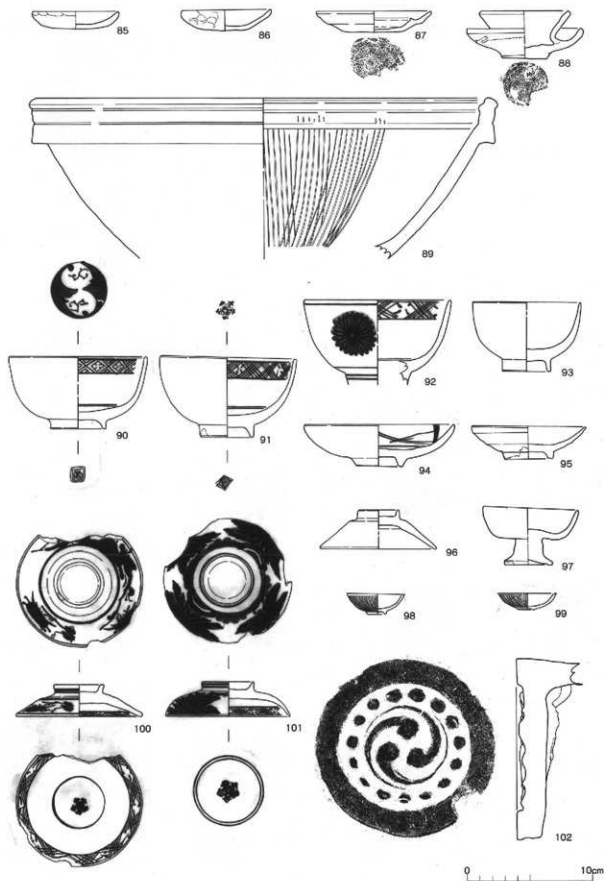
出土遺物の量はコンテナ1箱分弱であるが、遺物の残りは悪いので、図示できるものは少ない。40は肥前白磁染付皿である。41・42は肥前白磁染付蓋物である。この他に堺・明石焼鉢、肥前青磁筒形碗、軒棧瓦等が出土している。18世紀後半と考えられる。



第23圖 土坑2出土遺物(1)

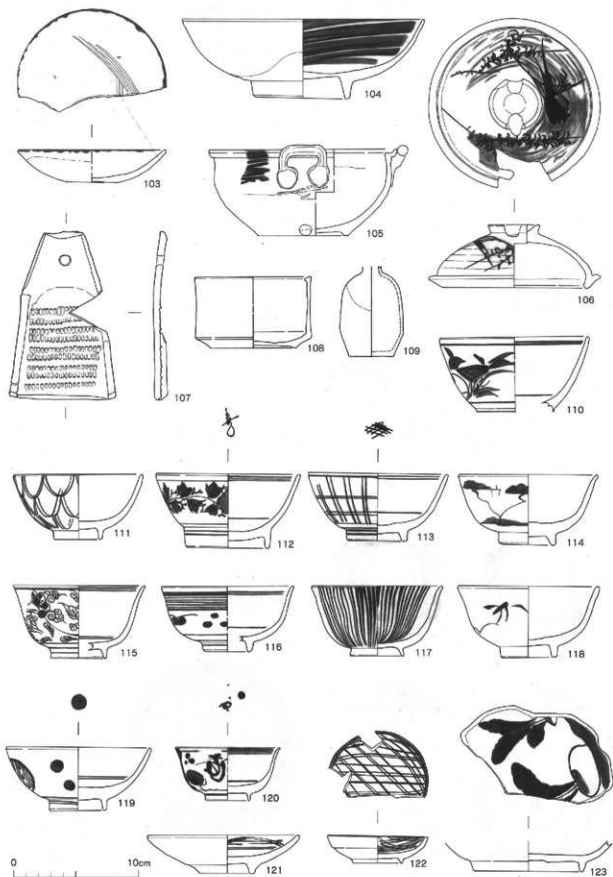


第24图 土坑2(2)·4·18·35·164出土遗物

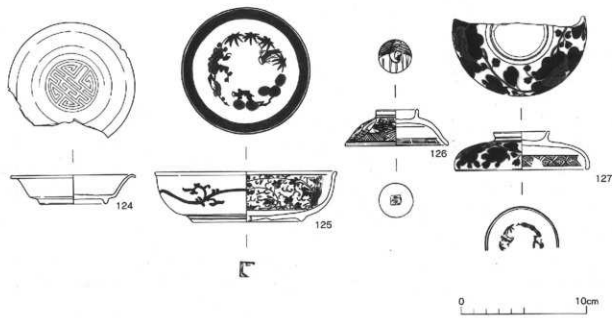


第25圖 土坑268出土遺物





第26图 土坑950出土遗物(1)



第27図 土坑950出土遺物(2)

### 土坑

#### 土坑2 (第23・24図 図版25・26)

I区北側から検出された。平面が楕円形の土坑で、土坑内部から多数の陶磁器が出土した。規模は、長さ68cm、幅50cmである。

出土遺物の量はコンテナ約1箱分弱である。43や44の唐津焼碗のように少し古手のものも含まれていた。45は明石焼である。46は乾山写しである。49は三田焼の小杯で、内面は仙人を描いている。51～53は鍋類の蓋であるがそれぞれ形が違う。また遺物の中で45・46・58・59・63・65は竈15でも同タイプのもので出土している。竈15と同様に端反り碗が多く見られる。また61・62は小杯で、内面に絵付けをした薄手の盃や爛徳利(70・71)等の酒器も出土している。19世紀後半と考えられる。

#### 土坑4 (第24図 図版26)

I区北端から検出された。平面が不整形の土坑である。規模は、長さ70cm、幅33cmである。

76は肥前青磁皿である。この他に遺物は出土していない。

#### 土坑18 (第24図 図版26)

I区東端から検出された。竈12・13・14の焚口部に切られている。規模は、東西方向が1.3m、南北方向は遺構の北側が竈12・13・14の焚口部に切られており不明。検出長は約1mである。深さは9～14cmである。

77は京焼系灯明皿、78は土鍋である。この他に京焼系碗や土瓶体部片、肥前白磁染付小杯などが出土している。これらの遺物から19世紀前半から後半と考えられる。

#### 土坑35 (第24図)

I区の南東隅から検出され、土坑の南側はII区との境にある土層観察用畦、東側は調査区外となり未調査である。検出した範囲は東西1.7m、南北23cmである。

79は肥前白磁染付碗である。この他に柿釉灯明皿、京焼系色絵碗体部片、肥前陶胎染付皿、肥前白磁染付筒形碗等が出土している。これらの遺物から18世紀中頃と考えられる。

#### 土坑164 (第24図 図版26)

III区南東隅に位置し、礎石建物1を切っている。土坑の規模は、東西1.95m、南北2.45m、深さ

48cmである。平面は不整形を呈する。

80は陶器甕である。胎土は白黄色を呈している。81は肥前白磁染付碗である。82・83・84はおそらく関西系磁器であろう。19世紀後半と考えられる。

#### 土坑268（第25図 図版27）

I区北壁際に位置し、土坑の北側が調査区から外れているため全形は不明である。検出した範囲は東西1.35m、南北は0.8～1mで、深さ56cmである。

遺物出土量はコンテナ1箱弱である。85・86は土師皿である。87は柿油灯明受皿で口縁部に白色の付着物が見られる。88は陶器灯明受台である。89は堺・明石焼播鉢である。90・91は肥前青磁染付碗である。100・101は肥前白磁染付碗蓋である。これ以外に、京焼系鉄軸土瓶や土鍋、肥前筒形碗や蓋物が出土している。18世紀後半と考えられる。

#### 土坑950（第26・27図 図版27・28）

III区の南壁際に位置する。遺構の南側は調査区から外れていたが、多数の陶磁器が出土したため、調査終了前にその付近を南側に拡張して追跡調査を行った。調査区内での遺構検出範囲は、東西2.1m、南北1.05mである。

遺物出土量はコンテナ1箱強である。103は京焼系灯明皿である。105と106はセットになる京焼系陶器鍋と蓋である。おろし板（107）も出土している。磁器は肥前と瀬戸の製品が出土している。この遺構では磁器碗の出土量が多く、若干の文様の違いはあるが、119の肥前白磁染付丸文碗が約19点、113の格子文碗が6点、この他に図示はしていないが、端反りの折れ松葉文碗が4点出土している。19世紀中頃から後半と考えられる。

## 第4節 第2遺構面

第2遺構面（第11図）は、調査中は第3遺構面として調査を行った。I区から検出した焼土処理土坑1～8に見られるように、火災に遭っている。I区とII区の北側において、当時の生活面が赤く焼けた状態で見られたが、III区では確認できなかった。元禄15年（1702）に伊丹郷町の中少路村より出火し、439軒が消失した大火の痕跡とも考えられる。旧岡田家店舗（延宝2年：1674）は、この火災では焼け残っている。

### 建物跡

#### 礎石列1（第28図 図版10）

I区で検出した東西方向の礎石列である。検出長は6.7m。石の長軸を東西方向に向けて並べている。礎石は一段の平置きであるが、右から2個目の礎石は高さを揃える為に二段組になっている。土坑103・104は礎石抜き取り痕である。18世紀初頭の焼土層（第10・21層）下で確認した建物跡で、礎石列の南側からII区で検出した溝9の間には土間が続いており、建物は南側に建っていたことが分かる。建物内では白屋遺構を検出しており、元禄15年の大火で焼失した白屋1の建物跡であると考えている。礎石列の北側には火災で焼けた瓦・陶磁器類を埋めた焼土処理土坑が整然と並んでいる。

肥前白磁染付碗（128）が出土している。外面には呉須で草花文を描き、見込みの蛇ノ目釉剥ぎにアルミナ砂を塗布している。18世紀初頭頃の所産である。

#### 礎石列2（第29図 図版11）

II区で検出した東西方向の礎石列である。検出長は8.6m。礎石には60～80×60～80cmの不定形の掘

り方内に2～6個の石を据えているものと、50～60×40～50cmの掘り方内に1個の石を据えるものがある。並び方には前者を3個並べた間に礎石を1個並べるような規則性があるようだが、未検出の箇所があるため断定できない。遺物は出土していない。

## 柵列跡

### 柵列1 (第30図)

Ⅲ区で検出した東西方向の柵列である。検出長は4.3mで、5個の柱穴を確認している。柱穴は直径20～30cm、深さ14～20cmを測り、オリーブ褐色土を埋土とする。柱穴の間隔は一定ではない。遺物は出土していない。

## 溝跡

### 溝3 (第29図 図版11)

Ⅱ・Ⅲ区の南端で検出した東西方向の溝で、東は調査区外へ伸びているが、西はⅢ区東壁際で終わっている。検出長11.5m、幅1.1m、深さ17～30cmを測り、断面長方形の掘り方を持つ。埋土は炭・焼土を含んだオリーブ褐色砂質土である。平瓦・肥前白磁染付碗・土師皿・鉄瓶状の鉄製品などが出土しているが、何れも小片のため図示できなかった。

### 溝9 (第31・32図 図版28)

Ⅱ区の北側で検出した東西方向の溝で、調査区外に延びる。検出長3.8m、幅90cm、深さ20～30cmを測る。炭・焼土を含むオリーブ黄色粘質土を埋土とする。溝は18世紀初頭の火災層下で検出しており、溝の北側には土間面と白屋遺構を検出していることから、白屋建物に伴う溝と思われる。

溝からは肥前白磁染付碗・皿、京焼系碗、土師皿、瓦などが出土している。129は肥前白磁染付碗である。内面見込みにコンニャク印判の五弁花を配し、高台内に「大明年製」銘を描く。口径14.2cm、器高7.6cmを測る深手の碗である。130は左巻き三巴文軒丸瓦である。巴頭がわずかに尖り、尾が短い。内・外区を分かつ圏線があり、珠文は小粒で12個である。瓦当面に雲母粉が残っている。131は煙管の雁首、132は吸口である。いずれも銅製。18世紀初頭頃の所産である。

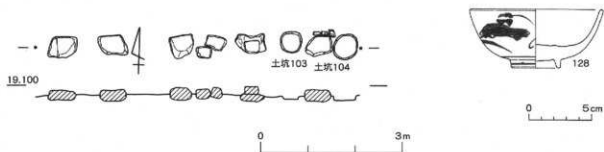
## 白屋跡

### 白屋1 (第31図 図版10)

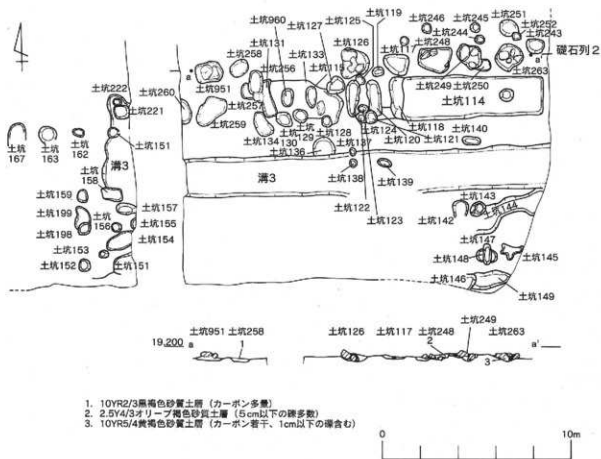
Ⅱ区北側の土間面で白屋の遺構を確認している。白屋とは酒蔵内にある精米工程を行う施設のことで、唐白を用いた足踏み精米を行っていた。今回の調査では、検出長4m、幅1m、深さ40cmの溝内に6個並んで据えられた唐白の堀り方を検出している。径は50～60×40～55cmを測る。

土坑151・195・196は、先端に米を撞く杵を装着した足踏み用の角材(棹)を支える支点を置いた穴である。土坑は径30～40×50cm、深さ10cmの楕円形を呈す。足踏み作業は一段上に渡された板の上に乗って行っていたが、その板は土坑193・194・197上に設けられていたようである。土坑は径30×25cm、深さ5～15cmの楕円形を呈す。

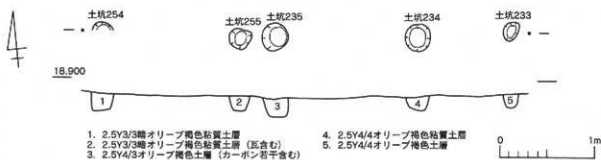
土坑132は建物の柱跡である。その柱に作業する時に掴まる横木が通されていた(『攝津名所圖會』参照)。掘り方は径40×60cm、深さ19cmの楕円形を呈す。土坑132より西側に遺構がないため、白屋は東側に広がっていると考えられる。出土遺物はないが、溝9と同時期の火災層下で検出された遺構であることから、18世紀初頭までの酒蔵内の施設であると思われる。



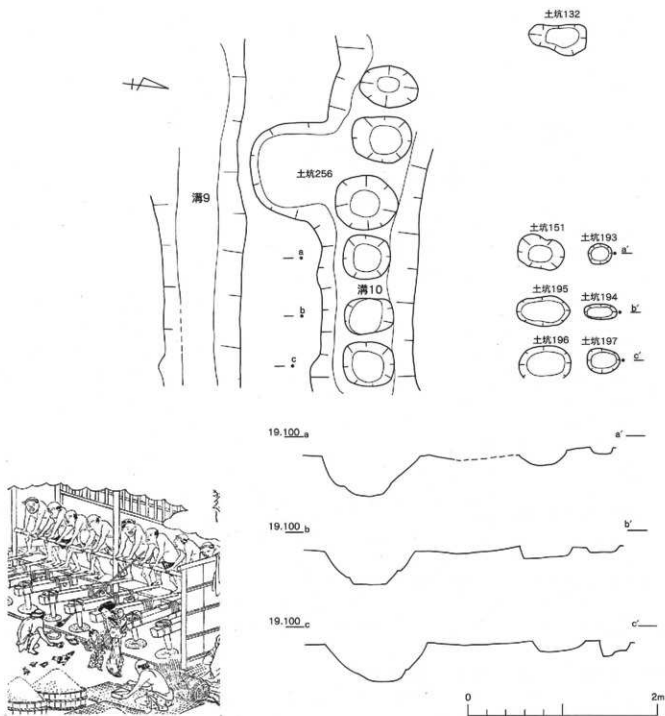
第28図 礎石列1平面・断面図、出土遺物



第29図 礎石列2・溝3周辺平面図、礎石列2断面図



第30図 構列1平面・断面図



第31図 溝9・白屋1平面・断面図、『攝津名所圖會』巻6（部分）

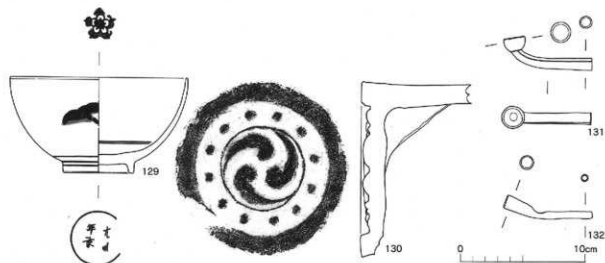
### 焼土処理土坑

I区に広がる焼土面を少しずつ掘り下げていくと、礎石列1の北側で土坑が東西に並んで4基ずつ2列検出された。平面形は長方形または方形に近い形で、底面はほぼ平坦である。

#### 焼土処理土坑1（第33・34図 図版28・29）

規模は長さ3.2m、幅2.8m、深さ80cmを測る。埋土は底の方に瓦を多量に含み、焼土・炭・漆喰の壁土を全体に含む。

133・134は土師皿である。135は瓦質播鉢である。136・137は肥前磁器である。138・139は軒丸瓦である。この他に京焼風陶器碗片や肥前陶胎染付碗片が出土している。瓦を含め二次焼成を受けてい



第32図 溝9出土遺物

るものがある。また隣の焼土処理土坑2と接合できる資料があった(136・137等)。

**焼土処理土坑2 (第33・34・35・36図 図版29)**

遺構の北東隅を上面の土坑1に切られている。規模は長さ1.6m、幅1.5m、深さ30cmを測る。埋土は焼土と炭のほかに瓦を多量に含む。

ここからは瓦が主に出土している。これらの瓦も何点か二次焼成を受けている。

**焼土処理土坑3 (第33図)**

上面の土坑1に切られている。規模は長さ1.65m、幅1.15m、深さ30cmを測る。埋土は焼土と炭で瓦は含まない。ここからは遺物は出土していない。

**焼土処理土坑4 (第33図)**

規模は長さ1.5m、幅1.15m、深さ23cmを測る。埋土は焼土と炭で瓦は含まない。ここからは遺物は出土していない。

**焼土処理土坑5 (第33・36図 図版10・29・30)**

規模は長さ2.9m、幅2.6m、深さ76cmを測る。埋土は焼土と炭のほかに瓦を多量に含む。

155は瀬戸・美濃焼皿である。156は肥前陶器皿である。この他に肥前白磁染付小碗・水滴等が出土している。

**焼土処理土坑6 (第33・36図 図版10・30)**

規模は長さ2.85m、幅1.3m、深さ55cmを測る。北西隅を土坑95、南東を土坑97に切られている。埋土は焼土と炭のほかに瓦を多量に含む。

160は肥前白磁染付碗である。162・163は軒丸瓦である。

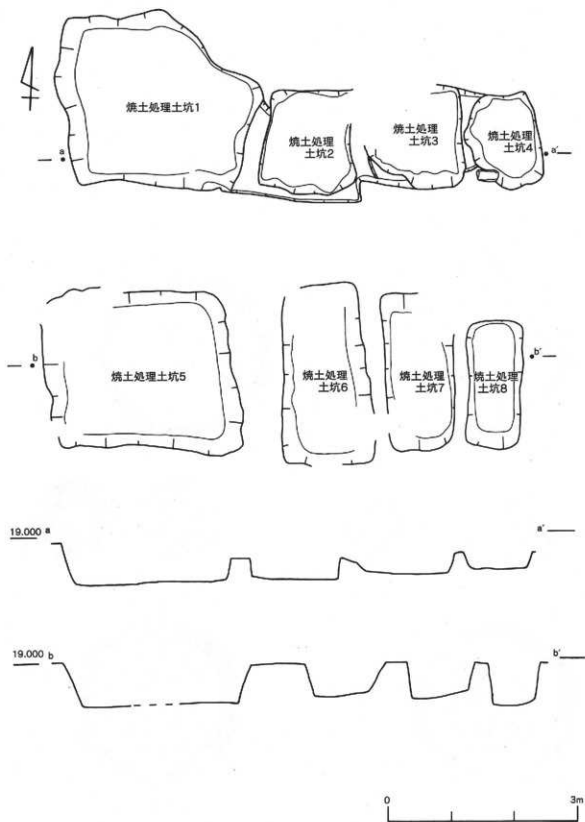
**焼土処理土坑7 (第33図 図版10)**

遺構の南西を土坑97に切られている。規模は長さ2.5m、幅1.1m、深さ50cmを測る。埋土は下層には瓦・焼土・炭を多量に含み、上層の約25cmには瓦を含まず、多量の炭、少量の焼土を含む褐色砂質土である。

上面の遺構との切りあいがあり、混入遺物が多数含まれていたため、この遺構の出土遺物として図示できる遺物はなかった。

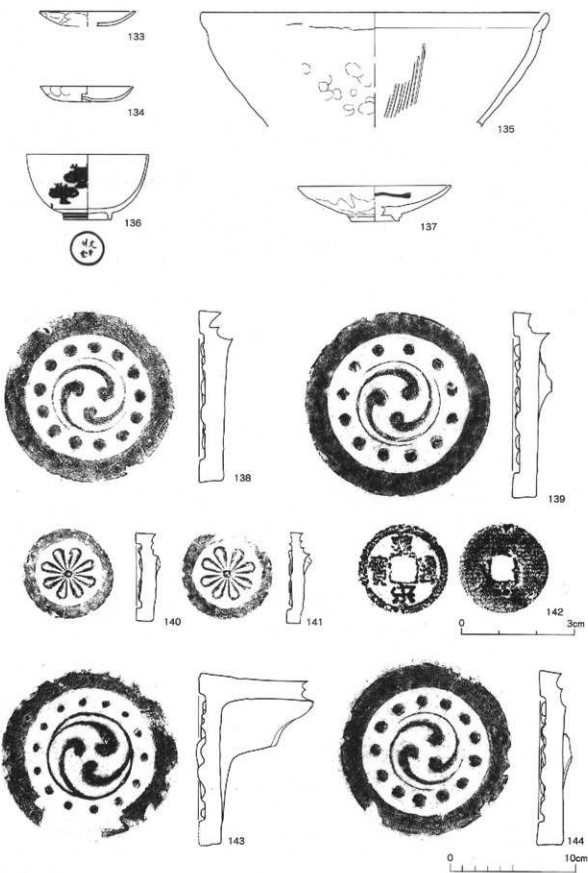
**焼土処理土坑8 (第33・36図 図版10・30)**

規模は長さ2m、幅87cm、深さ65cmを測る。埋土は下層の瓦・焼土・炭を多量に含み、上層の約

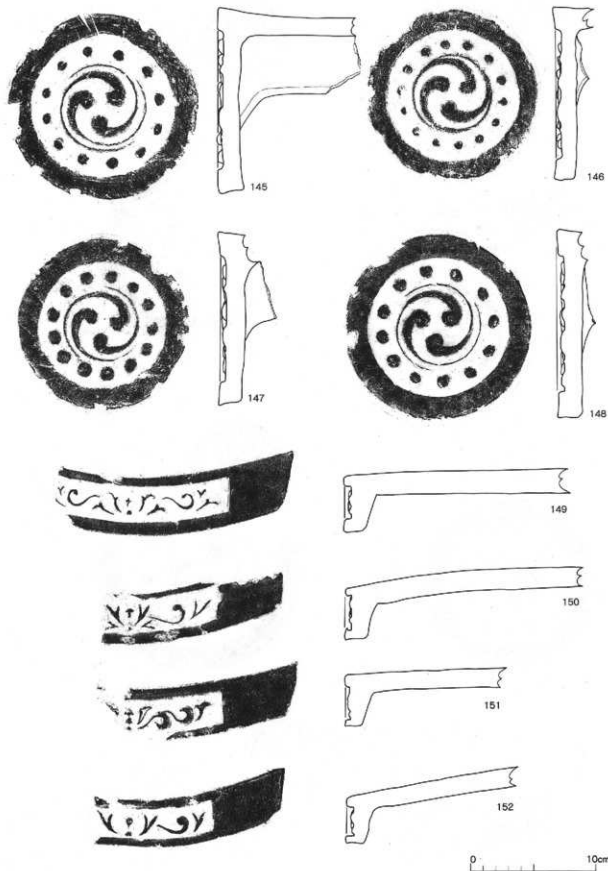


第33圖 燒土處理土坑 1~8 平面·断面圖

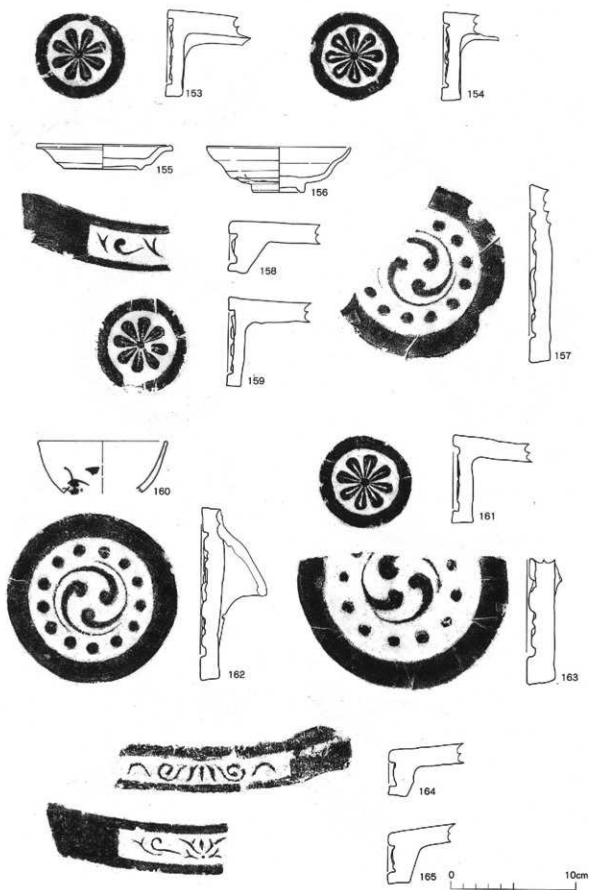




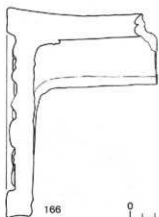
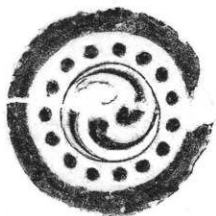
第34圖 焼土処理土坑1・2(1)出土遺物



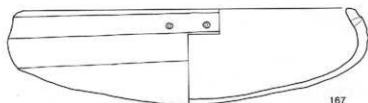
第35圖 焼土処理土坑2(2)出土遺物



第36图 烧土处理土坑2(3)·5·6·8(1)出土遗物



第37圖 焼土処理土坑8(2)出土遺物



167



169



168



170



171



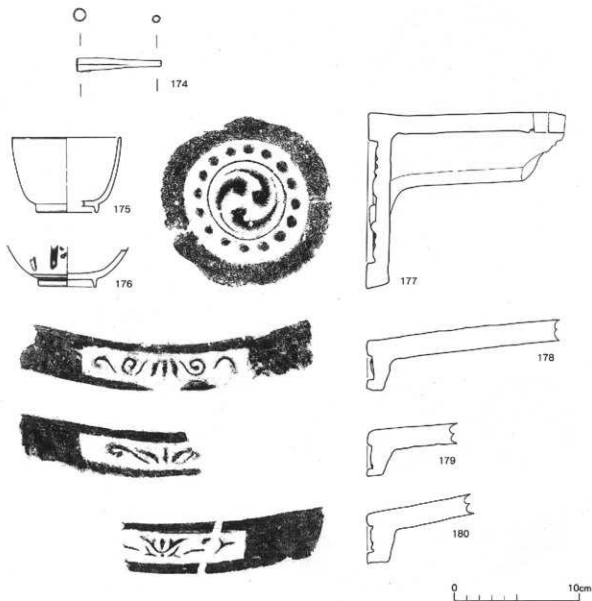
173



172



第38圖 土坑75・78・112出土遺物



第39図 土坑133・182出土遺物

20cmには瓦を含まず、炭・焼土・漆喰の壁土を含む褐色土である。

上面の遺構との切りあいがあり、陶磁器は混入遺物が多数含まれていた。164・165は軒平瓦で、166は軒丸瓦である。

焼土処理土坑1～8は出土遺物から元禄時代に起きた大火の後始末をするために掘られたと考えられる。瓦を多量に含むもの（焼土処理土坑1・2・5・6）、瓦を含まないもの（焼土処理土坑3・4）、下層には瓦を含むが上層は瓦を含まないもの（焼土処理土坑7・8）の3例がある。また、これらの西側の土坑78・土坑80も埋土や形状から焼土処理土坑であると考えられる。

## 土坑

### 土坑75（第38図 図版30）

I区から検出された。径90cm程度の円形の土坑。断面形は皿状で、最も深い中央部で、深さ12cmを測る。埋土は拳大の礫を多数含み、焼土も多く含んでいる。

167の焙烙は相対するところに2つずつ孔を穿つが、貫通しない。168は肥前青磁鉢である。他に

「大明」銘を持つ肥前白磁染付碗が出土している。17世紀後半から18世紀初頭と考えられる。

#### 土坑78 (第38図 図版30)

I区から検出された。遺構の規模は、長さ2.2m、幅1.2m、深さは35cmである。土坑の埋土から焼土や炭とともに多量の瓦が出土した。土坑78の東側には、焼土処理土坑1～4が並んで検出されており、この土坑も焼土処理土坑と考えられる。

遺物は2点図示した。170は軒平瓦で、171は軒丸瓦である。

#### 土坑112 (第38図 図版30)

II区から検出された。この土坑は、近代の攪乱によって大きく壊されており、規模などは明らかではない。埋土から若干の遺物が出土している。

172は陶器蓋である。

#### 土坑133 (第39図 図版30)

II区から検出された。規模は、長さ2m、幅1mの範囲で確認されるが、多くの遺構に切られているため、正確な規模は明らかではない。この土坑を切っている遺構は土坑128～131である。

174は煙管の吸口である。この他にコンニャク印判と染付を併用した肥前白磁染付碗が出土している。17世紀末から18世紀前半と考えられる。

#### 土坑182 (第39図 図版30・31)

III区の北部から検出された。規模は、長さ1.5m、幅85cmで、深さは50cmである。土坑の形状は楕円形を呈し、底面は平坦である。埋土上層には少量の焼土を含み、下層から焼土とともに多数の瓦や陶磁器が出土した。

175・176は肥前磁器碗である。この他に丹波焼播鉢体部片やコンニャク印判と型紙摺りを併用した肥前白磁染付碗等が出土している。17世紀末から18世紀前半と考えられる。

## 第5節 第3遺構面

第3遺構面(第12図)は、調査中に第4遺構面・第5遺構面として調査したものである。本書では、I～III区の遺構面を整合させるため第3遺構面として統一したが、各遺構に時期の違いや切り合い関係が認められるため、上層・下層に分けて説明する。この遺構面の時期は、概ね17世紀代に相当し、下層はその前半に、上層は後半に時期の中心がある。特徴的な遺構は、II区で検出された酒造用の竈で、この時期から本格的な酒造りが行われるようになったと考えられる。

### 1) 上層

#### 建物跡

##### 礎石建物2 (第40・41図 図版12・13)

I区では礎石建物跡が良好に残っていた。礎石建物跡はI区全域にわたって広がっており、さらに北側に続く様相を見せているが、その中心は礎石建物2である。礎石建物3とは南側で接しているが、別の建物なのか、礎石建物2に続く一連の建物なのか、その関係は明らかではない。礎石建物2は、小型の自然石と割石、一部に一石五輪塔を礎石とするもので、東西方向の3列(北礎石列、中央礎石列、南礎石列)の礎石列が建物範囲と考えられる。この3列は約3.9mの等間隔であるため、建物の間口は約7.8mとなる。奥行については、敷地境まで調査が及んでいないため明らかではないが、調査区の東

壁から西礎石列までは10.4mであるので、奥行規模はこれ以上となる。

礎石間の距離は、北礎石列では概ね半間の間隔（約1m）で並んでいることがわかる。またこれに  
応じて中央礎石列も半間間隔となっているが、南礎石列の西側では礎石が移動したのか、等間隔を示  
していない。伊丹郷町の現存する江戸時代の建物には、片側に通り土間をもつものが多い。礎石建物  
2もこの一例ではないかと見られる。この建物の場合、中央礎石列と南礎石列の間に井戸6や竈25が  
あることから、通り土間は中央列より南側と考えられる。

この建物には、五輪塔などの転用礎石が7ヶ所で確認された。こうした石仏転用礎石は、伊丹郷町  
では江戸時代前期までの建物には多く見られるが、それ以降は使われなくなっていく。

礎石の掘り方と考えられる土坑283から土師皿や丹波焼播鉢底部片、備前焼甕体部片、肥前陶器緑釉  
碗等の遺物が出土している。

#### 礎石建物3（第40・41図）

この建物跡は、礎石建物2の南側に並ぶ礎石からその存在を推測するもので、規模は明らかではない。  
礎石には自然石を用い、平坦面を上にして設置されている。礎石の抜き取り穴も含めて礎石6個  
が礎形に並んでいるが、礎石間の距離はそれぞれ違っており、北側の礎石建物2のように規則性はな  
い。この遺構に伴う遺物は出土していない。

#### 礎石建物4（第40・42図 図版13）

Ⅲ区から礎石が並んで検出された。Ⅲ区は近代の攪乱が著しく、全体に遺構の遺存状態が悪いので、  
礎石は所々に残る程度である。礎石建物とみられる礎石並びは、直行する南北方向と東西方向の礎石  
列で、自然石の他に五輪塔の地輪や請花を浮き彫りした五輪塔の台座などが並んでいる。礎石の間隔  
は半間（約1m）が基準になっている。列を成さないが、付近から文安3年（1446）銘の砂岩製一石  
五輪塔の地輪（183）が出土した。この建物は、位置的にみて昆陽口通りに面した建物であったと考え  
られる。遺物は出土していない。

#### 礎石列3（第40・43図 図版15）

Ⅱ区で東西方向に並ぶ礎石列を、9.5mの長さで検出した。石は30cm間隔で置かれており、東側から  
3個目までの石の間にはそれぞれ1個ずつ石が置かれていたと思われる。礎石は40～60×30～45cmの  
楕円・長方形の自然石で、長軸を東西方向に向けて並べられている。竈28・29に伴う建物の礎石列の  
可能性が考えられる。この礎石列は溝7に切られている（第10図）。遺構の時期を示す遺物の出土はな  
かった。

#### 礎石列4（第40・41図 図版13）

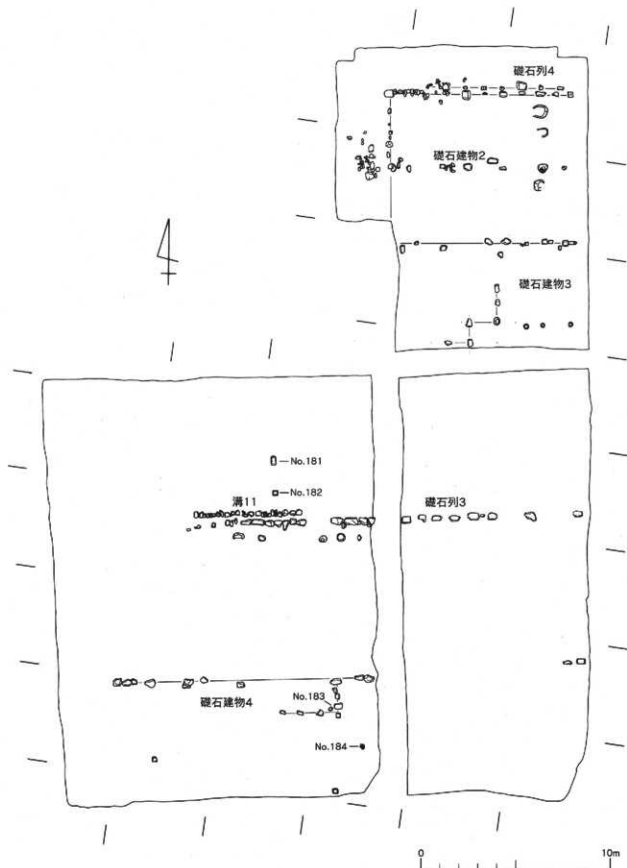
礎石列4は、Ⅰ区北側に位置し、礎石建物2の北礎石列に並行する。検出された8個の礎石は、半  
間（約1m）の等間隔で、平坦面を上にして設置されていたので、調査区外に続く礎石建物と考えら  
れる。礎石建物2の北礎石列との間には30cmほどの間隔しかなく余りにも近い。壁の厚みや表側の軒  
の出を考えると、同時に存在したとは考えがたい。礎石列には2ヶ所で五輪塔の転用石が使用されて  
いた。遺物は出土していない。

#### 第3遺構面上層出土遺物（第42図 図版31）

181は板碑で、花崗岩製である。礎石に転用され、表面は削られている。182は無縁塔の基礎部で花  
崗岩製である。183は一石五輪塔の地輪で、砂岩製である。184は瀬戸・美濃焼大皿である。

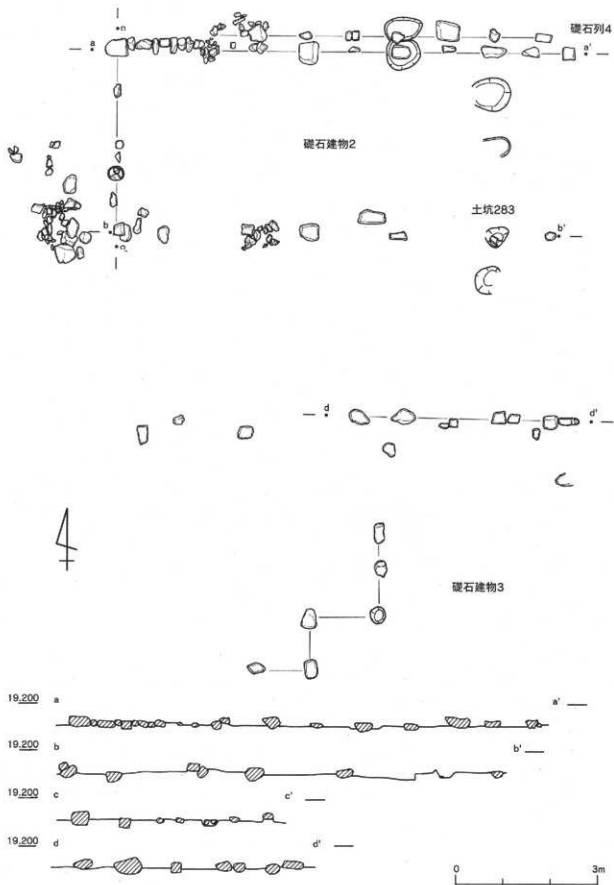
#### 溝跡

#### 溝11（第43・46図 図版14・31）

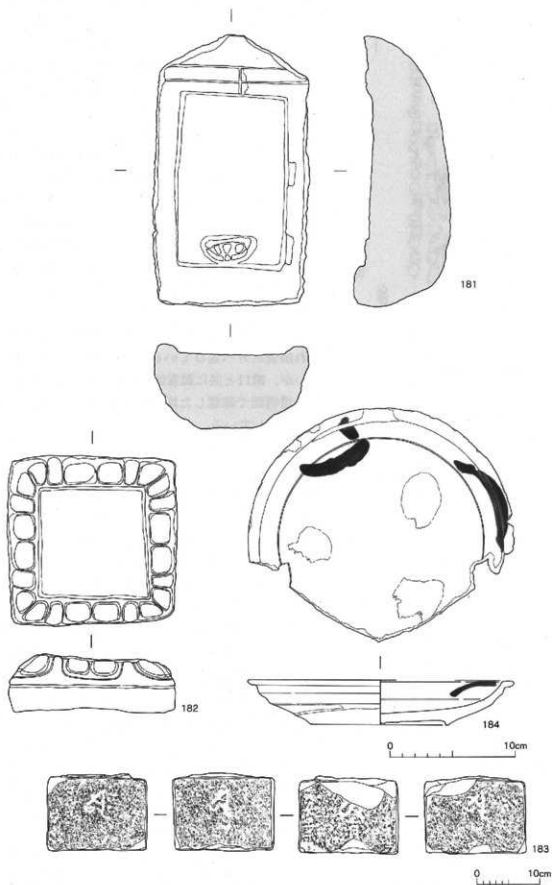


第40図 第3遺構面上層 礎石建物跡全体図、出土遺物検出地点

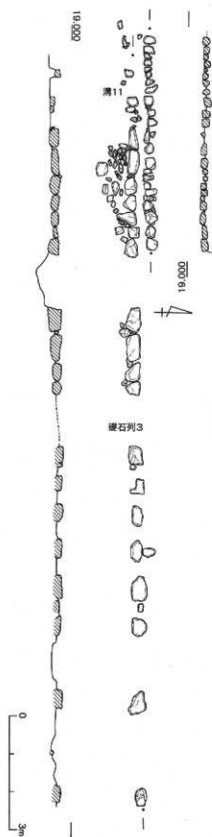




第41圖 礮石建物2・3・礮石列4平面・断面圖



第42図 第3遺構面上層出土遺物（石造物はS=1/6）



第43図 溝11・礎石列3平面・断面図

Ⅲ区中央付近で検出した東西方向の地割溝である。検出長9.9m、幅20～30cm、深さ10cmを測る。溝の縁石には南側では比較的大型の石を用い、石の長辺をなるべく東西方向に向けて並べている。北側は南側に比べて小振りな石や一石五輪塔を並べている。縁石が見えるか、見えないかによって石を選択して並べていたようである。北側は一石五輪塔から北に礎石が並んでいることにより、建物の壁が縁石上に構築されて縁石は隠され、反対に南側には溝と平行して礎石列と礎石の抜き取り痕が残っていることから、縁石上に構築物が無く縁石が露出していたと考えられる。

遺物には唐津焼砂目積み皿(185)、肥前陶器碗(186)、肥前白磁染付碗(187・188)、土師器灯明皿などがある。古手の遺物(185・187)も見られるが、186・188が出現する17世紀後半頃を溝の下限とする。

#### 溝12

Ⅰ区で検出した東西方向の地割溝である。東端で鍵型に折れ調査区外へ延びている。時期を示す遺物は出土していないが、溝11と共に調査区を3筆に分ける溝と考えられる。第1遺構面で確認した地割溝(溝6～8)はこれらの溝をほぼ踏襲している。

#### 井戸跡

##### 井戸2(第50・51図 図版15・32)

Ⅱ区の西側に位置する。竈30を切っている。平面形は楕円形で、素掘りの井戸である。規模は107×92cmを測り、深さは検出面より約1mまで掘削したが、底は未検出である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

211は唐津焼皿である。212は肥前白磁染付碗である。この他に焙烙E類(難波編年)口縁部、肥前陶器皿、肥前白磁染付碗、肥前白磁赤絵碗底部片等が出土している。竈30から出土した遺物と共通するものがあり、混入の可能性も捨てきれない。

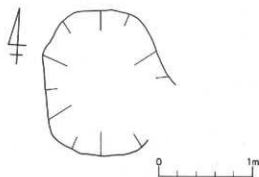
##### 井戸3(第44図)

Ⅲ区の中央やや南側に位置する。遺構の南東隅が上面遺構の溝14に切られている。平面形は楕円形で、素掘りの井戸である。規模は1.5×1.2mを測る。

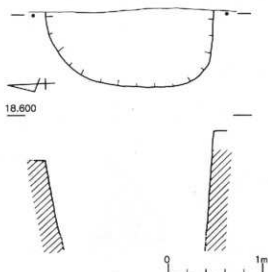
遺物は図示できなかったが、絵唐津皿が出土している。第Ⅶ層出土の421(第84図)と同じタイプである。

##### 井戸4(第45・46図 図版31)

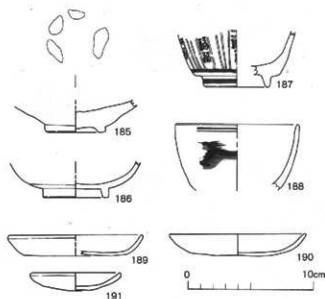
Ⅲ区の東壁際に位置し、遺構の東側は調査区外となる。平面形は半円を検出し、素掘りの井戸である。規模は検出長1.1m、検出幅83cmを測り、深さは検出面より約1.1mま



第44図 井戸3平面図



第45図 井戸4平面・断面図



第46図 溝11・井戸4出土遺物

で掘削したが、底は未検出である。壁は下方に行くほど少しずつ狭くなる。

土師皿は189・190のように径約11cmと、191のように径7cm前後の2タイプが出土している。この他に焙烙や丹波焼播鉢体部片、肥前白磁染付碗（コンニャク印判手等）が出土している。17世紀末から18世紀前半と考えられる。

#### 井戸7（第12図）

Ⅲ区の南東側に位置する。平面形は円形で、素掘りの井戸である。規模は直径約90cmを測り、深さは検出面より約80cmまで掘削したが、底は未検出である。埋土は褐色粘質土である。

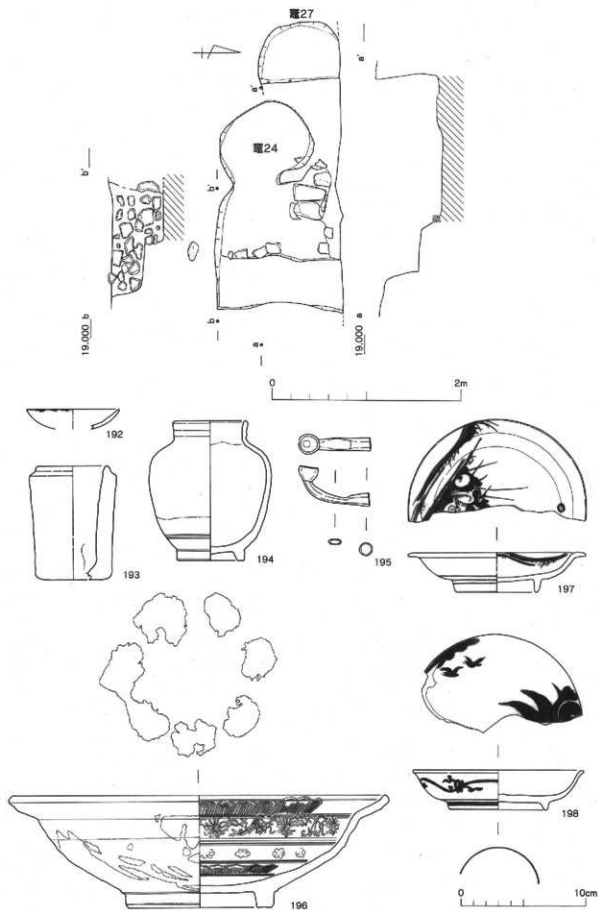
図示はできなかったが、肥前陶器鉄釉鉢や肥前陶胎染付碗が出土している。17世紀末から18世紀前半と考えられる。

#### 竈跡

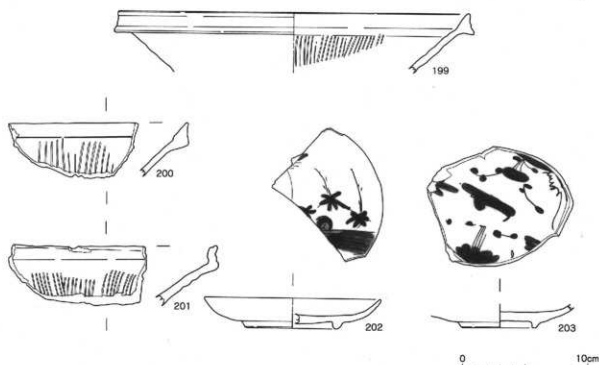
##### 竈24（第47図 図版14・31）

この竈はⅠ区の北壁際から検出され、竈の北側が調査区外に続いているため、1基単独の竈なのか、2基以上が並ぶ連基式なのか明らかではないが、北壁際の状況を見てみると1基単独の可能性が高い。竈は東西方向に主軸があり東側が開口して焚口となっている。竈は地面を掘りくぼめて造る半地下式の構造で、東側に方形の焚口部が取り付けられている。焚口は手前（東側）が一段高くなり階段を意識した造りとなっている。規模は、竈が径95cm、深さ65cm、焚口部が東西1.25m、南北1.2m以上である。焚口部の壁面は、小型の石（10～20cm大）を粘土で固定しながら積み上げる方法で丁寧に仕上げられている。また、竈内面は粘土を貼って仕上げ、竈の底面には灰の掻き出し溝がなく平坦で、焚口に向かって下がっている。

192は土師皿である。193は焼塩壺である。194の陶器壺は、福岡県にある上野焼の可能性もある。196の三島手鉢は内面の刻印がまだはっきりしていて、高台内の削りこみは高



第47圖 竈24・27平面・断面・立面図、竈24出土遺物



第48図 竈27出土遺物

台脇と同じ位の高さである。肥前磁器は197・198の皿の他に碗や小碗も出土した。二次焼成を受けているものもある。17世紀後半と考えられる。

#### 竈27 (第47・48図 図版14・31・32)

竈24に焚口部を切られている。竈24とほぼ同規模の竈であることから、この竈を廃棄した後、場所を少し東に移動し、竈24に造り替えたものと考えられる。竈の径は0.9～1m、深さは47cmである。竈底は平坦で赤く焼けていた。

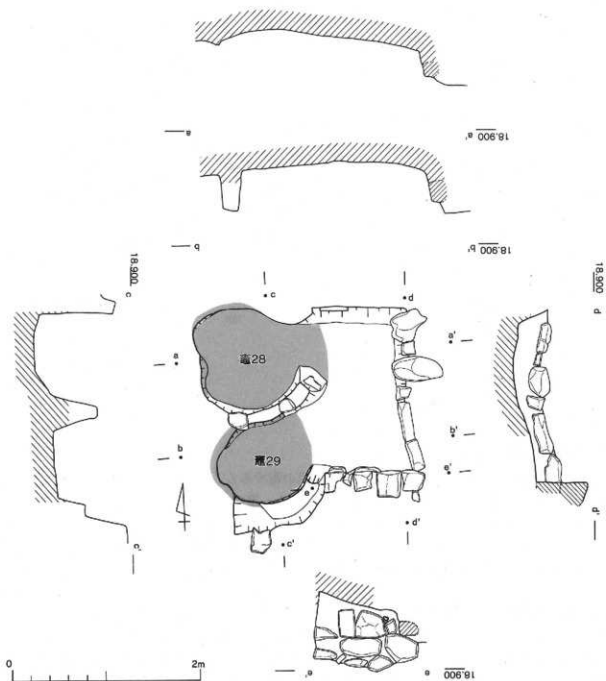
199～201は丹波焼播鉢で口縁のタイプが若干違う。202・203は肥前白磁染付皿である。この他に瀬戸・美濃焼天目碗や京焼風陶器破片、肥前白磁型打ち皿・陽刻文皿が出土している。17世紀後半と考えられる。

#### 竈28・29 (第49・50図 図版15・32)

Ⅱ区。敷地境の溝11より北側の区画に位置する。焚口を東に向けた2基連基型の半地下式の竈である。竈の手前には長方形の焚口部が設けられている。竈は、向かって右側(竈28)が左側の竈(竈29)より大きく造られている。規模は右側の竈が径1.2m、深さ98cm、左側の竈が径90cm、深さ77cmである。右側の竈は、径が大きだけでなく、深さも左側より深い。竈の底面は平坦で、灰の掻き出し溝は設けられていない。竈底と壁面は赤く焼け、硬化している。竈は15～20cm大の石を芯にして黄褐色粘土を充填して構築し、焚口部の南壁と東壁は20～40cm大の自然石を石垣状に組み、目地を粘土で埋めている。焚口部の規模は、東西90cm、南北1.75m、深さ80cmである。

竈が2基一組で、一方の竈が大きく造られているという構造は、伊丹郷町の江戸時代の酒造用竈に通有の特徴である。時代が下るほど竈の規模が大きくなる傾向が見られるが、この時期の竈としては一般的な規模である。

204～207は竈28から出土した。204・205は土師皿である。206は肥前陶器鉢である。208～210は竈29から出土した。208・209は唐津焼である。210は肥前白磁染付碗である。17世紀後半から18世紀初頭と考えられる。



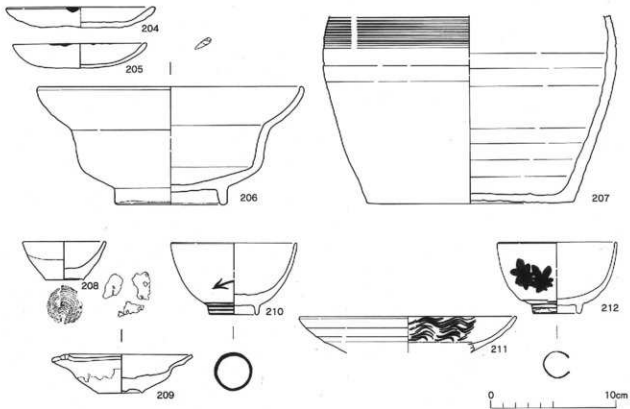
第49図 竈28・29平面・断面・立面図

竈30・31 (第51図 図版15)

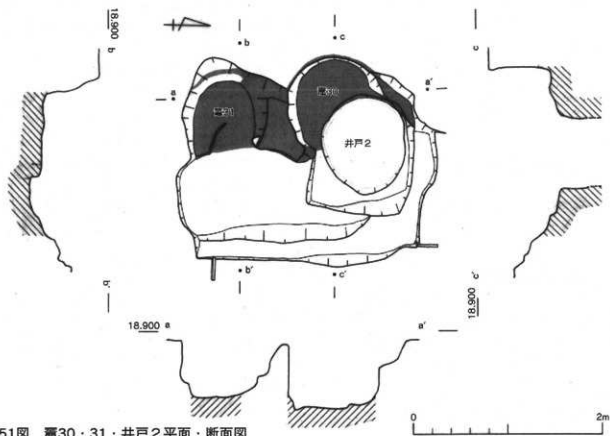
Ⅱ区の南側に位置する。焚口を東側に向けた2基連基型の半地下式の竈である。向かって右側の竈(竈30)が左側の竈(竈31)よりやや大きく、深く造られている。規模は右側が径1m、深さ72cm、左側が径90cm、深さ60cmである。竈の底は平坦で、焚口部はそれより一段下がっている。右側の竈の中央を壊して井戸2が築かれている。焚口部の壁面には石組みは認められなかったが、東壁と南壁は大きく壊されていたため、最初から造られなかったかは明らかではない。

図示できなかったが、竈30からは土師皿、丹波焼甕体部片、肥前陶器刷毛目皿、肥前白磁染付碗片が出土している。竈31から遺物は出土しなかった。17世紀末から18世紀初頭と考えられる。

竈32 (第52図)

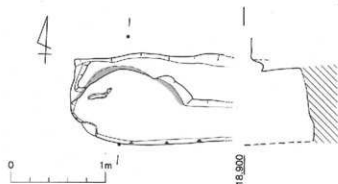


第50図 甕28・29・井戸2出土遺物

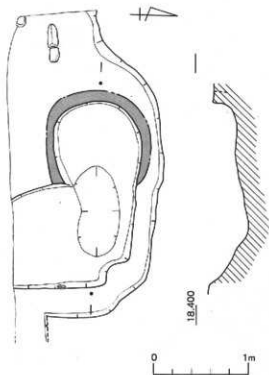


第51図 甕30・31・井戸2平面・断面図





第52図 竈32平面・断面図



第53図 竈35平面・断面図

は馬蹄形を呈している。竈の内法は、奥行・幅とも36cmである。竈は灰色粘土を積み上げる方法で構築されている。

図示できなかったが、土師皿片や唐津焼鉄釉碗が出土している。17世紀後半と考えられる。

**竈26 (第55図 図版16)**

I区の南側に位置する。焚口を東側に開口する1基単独の竈である。竈は地面を掘り下げて構築する半地下式であるが、人が降りて焚くことができないほど焚口部が小さい。竈の規模は、奥行60cm、幅50cm、深さ22cmである。焚口部は、主軸方向に30cm、幅47cm、深さ22cmである。調査時には焚口に大きな石(28×40cm)が横たわっていた。

図示できなかったが、土師皿、焙烙口縁部片、肥前青磁掛分け碗、白磁染付碗が出土している。17世紀後半から18世紀前半と考えられる。

**竈33と周辺遺物 (第56図 図版32)**

II区南西隅に位置する。遺構の大半が調査対象範囲外になり、竈と焚口部の一部を調査した。焚口を東側に開口した半地下式の竈で、方形の焚口部が続く。1基単独であるのか、2基以上が連なるのかは不明。竈の規模は大きく、径は1.2m以上になると推測され、深さも65cmある。焚口部は東西方向に90cm以上の規模で、深さは47cmである。ここからは遺物は出土していない。

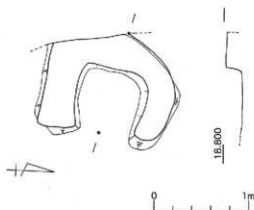
**竈35 (第53図 図版16)**

II区の南壁際から検出された。焚口部の南側は調査対象範囲外のため一部未調査となっている。1基単独の半地下式の竈で、平面が長方形の焚口部が敷設されている。竈の底は平坦で、壁面は垂直に立ち上がる。焚口部は平坦であるが、焚口付近のみ緩やかに下がっている。竈の規模は、径90～92cm、深さ22cm、焚口部は、東西1.1m、南北は1.25m以上である。竈の構築にあたっては、掘り方内側に10cmほどの厚みの粘土を貼っており、全面にわたって赤く焼けていた。

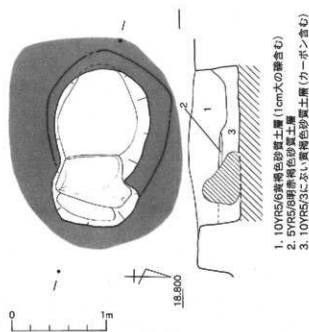
図示はできなかったが、土師皿、焙烙片、肥前白磁染付網目文碗、色絵碗片が出土している。17世紀後半と考えられる。

**竈25 (第54図 図版16)**

I区の中央に位置する。礎石建物2に関係する竈と考えられる。竈の位置は、礎石建物2の中央礎石列と南礎石列の間にあり、東側に焚口を設ける地上式の竈である。竈の規模は奥行77cm、幅63cm、高さ5cmで、平面形



第54図 竈25平面・断面図



第55図 竈26平面・断面図

いる。17世紀前半から中頃と考えられる。

#### 土坑281 (第57図 図版32)

I区東側に位置する。土坑の東側は調査区外となっている。規模は、南北60cm、東西検出長45cm、深さ35cmである。

222は丹波焼插鉢である。大平編年A類である。他に土師皿が出土している。17世紀前半と考えられる。

#### 土坑282 (第57図 図版32)

I区東側に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は、長さ1m、幅70cm、深さ9cmの浅い土坑である。

223は土師皿である。正円形でなく、若干楕円形に作られている。17世紀代と考えられる。

#### 土坑285 (第57図 図版32・33)

I区南側に位置する。遺構の大半を近代の攪乱に切られ、規模は不明である。残っている範囲で見ると、平面形は円形に近い。

224から226は焙烙である。難波編年A類と考えられる。227は唐津焼皿である。228は肥前白磁染付

II区の南西側に位置する。東西1.13m、南北1.03mの範囲に粘土が堆積し、その中央部分が赤く焼け、炭化物の堆積が認められた。粘土の厚みは5cm程度で、浅い皿状に堆積していた。竈である確証はないが、竈であるとするれば半地下式ではなく一般的な地上に盛り上げて造るタイプである。炉跡の可能性もあろう。この竈跡周辺から土師皿や唐津焼砂目積み皿が出土しており、遺構の年代の手掛かりとなる。

土師皿は径が7cm前後のもの(213~215)と、15cm弱のものが見られる(216・217)。218は唐津焼皿である。17世紀前半と考えられる。

### 土坑

#### 土坑270 (第57図 図版32)

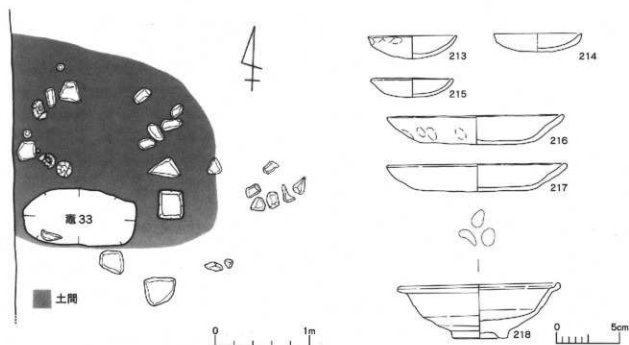
I区北壁近くに位置する。平面形が楕円形の土坑で、規模は長さ40cm、幅28cmである。

219は土師皿である。220は肥前白磁鉢である。17世紀後半と考えられる。

#### 土坑277 (第57図 図版32)

I区東側に位置する。平面形は不整形。規模は、長さ55cm、幅37cm、深さ20cmである。

221は肥前青磁碗である。全体的に厚みがあり、高台内は高台縁より深く削り込み兜巾状を呈している。この他に土師皿片や丹波焼插鉢(ヘラ描き)、唐津焼皿や鉢が出土して



第56図 竈33周辺平面図、出土遺物

碗である。

**土坑296 (第57図 図版32)**

I区中央やや北側、礎石建物2の北礎石列の南側に位置する。平面形が楕円形の土坑で、規模は長さ57cm、幅49cm、深さ11cmである。

229は唐津焼皿である。17世紀前半と考えられる。

**土坑329 (第57図 図版33)**

Ⅲ区の南側に位置する。北側を土坑330・土坑359に、東側は土坑328に切られている。規模は検出長1.3m、幅1.1m、深さ15～22cmを測る。埋土は炭化物を多く含むオリブ褐色粘質土である。

230～233は土師皿である。この他に約5枚分の破片が出土している。234は唐津焼皿である。この他に肥前白磁染付碗や備前大甕体部片が出土している。17世紀前半から中頃と考えられる。

**土坑339 (第57図 図版33)**

Ⅲ区の東側に位置する。平面形は円形で、直径は検出面の上場より掘削後の下場の方が広がっている。底面は平坦である。規模は上場の直径が75cm、下場の直径が90cm、深さは10cmを測る。

235は唐津焼皿である。この他に丹波焼甕体部片と備前大甕体部・底部片が出土している。17世紀前半と考えられる。

**土坑365 (第57図 図版33)**

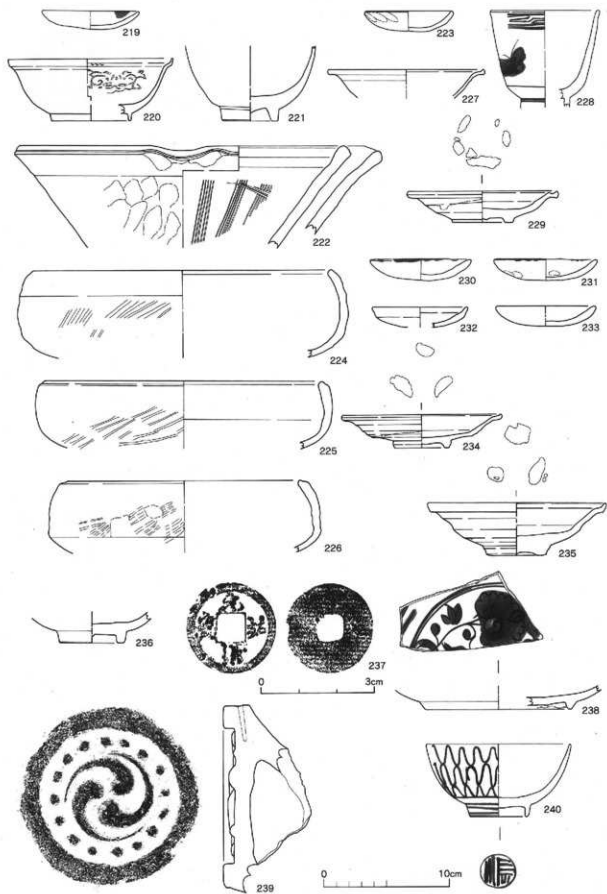
Ⅲ区の中央やや東側に位置する。平面形は五角形に近い形である。規模は長さ85cm、幅70cm、深さ15cmを測る。埋土には拳大の礫を含む。

236は瀬戸・美濃焼灰釉碗である。この他に備前焼甕体部片が出土している。

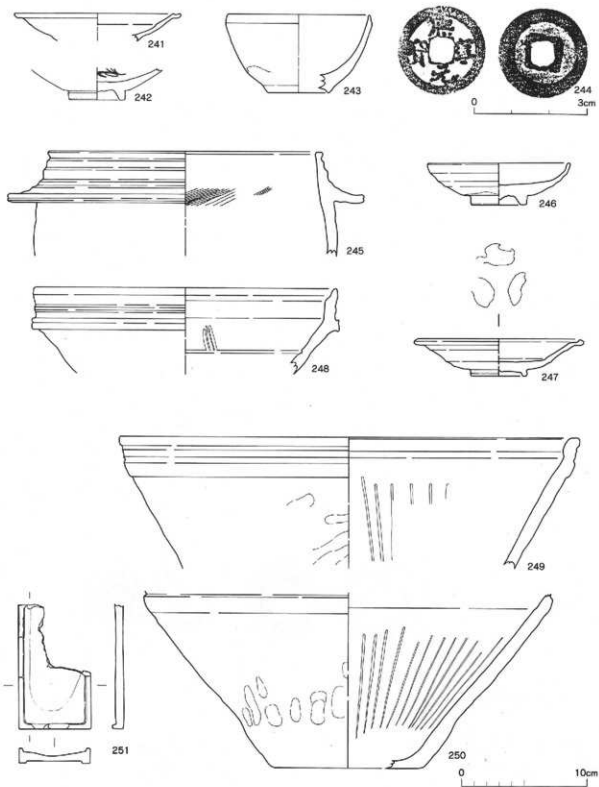
**土坑371 (第57図 図版33)**

Ⅲ区の中央に位置する。平面形は不整形で、遺構の西側を土坑372に切られている。規模は検出長2.7m、幅1.7m、深さ34cmを測る。

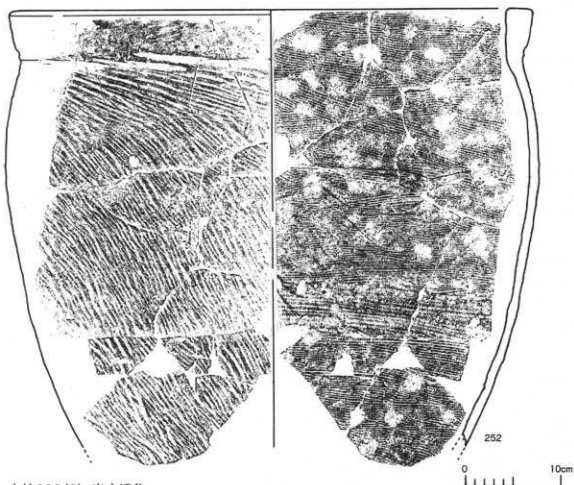
238は青花皿である。



第57圖 土坑270・277・281・282・285・296・329・339・365・371・376・380・433出土遺物



第58圖 土坑398(1)·451·456出土遺物



第59図 土坑398(2) 出土遺物

**土坑376 (第57図 図版33)**

Ⅲ区の西側に位置する。平面形はほぼ円形で、平坦な底面から挿鉢状に開きながら立ち上がる。規模は直径1m、深さ50cmを測る。埋土は5cm以下の礫・炭化物を若干含むオリブ褐色粘質土である。

237は元祐通寶である。他に遺物は出土していない。

**土坑380 (第57図 図版33)**

Ⅲ区の南西に位置する。平面形はほぼ円形で、底面は平坦である。規模は直径1.2m、深さ20cmを測る。埋土は拳大の礫・瓦を多く含み、炭化物を若干含むオリブ褐色粘質土である。壁はやや開き気味にほぼ垂直に立ち上がり、遺構の形状から見ると埋桶遺構ではないかと考えられる。

239は鳥衾瓦である。木範の跡がよく残っている。

**土坑398 (第58・59図 図版33・34)**

Ⅲ区の北壁際に位置する。遺構の北側は調査区外となり、遺構の西側は擾乱によって切られている。平面形は長方形で、平坦な底面から東側で20cm程度立ち上がり、段を形成する。規模は検出長4.7m、検出幅1.5m、深さ34～53cmを測る。埋土は褐灰色土である。

246は唐津焼皿である。灰釉が灰緑色に発色し、露胎部は赤褐色を呈している。248は備前焼挿鉢で承岡編年近世1期である。249・250は丹波焼挿鉢である。249は内面口縁部下に強いナデで施された段を持ち、外面口縁部は緑帯をうかがわせる段を有する。250は口縁端部を欠損しているが、若干上方部に拡張される。ともに摺り目はヘラ描きである。クシ目を持つ体部片も出土している。252は澳焼甕である。口縁断面は台形状を呈している。外面はタタキ調整が施され、内面は刷毛目である。17世紀前半と考えられる。

### 土坑433 (第57図 図版33)

Ⅲ区の北東壁際に位置し、遺構の北側と東側は調査区外となる。規模は検出長1.7m、検出幅1.4m、深さ40cmを測る。

240は肥前白磁染付碗である。この他に丹波焼播鉢大平編年B類、肥前白磁小杯が出土している。17世紀中頃から後半と考えられる。

### 土坑451 (第58図 図版33)

Ⅱ区の北側に位置する。平面形は長方形である。底面は平坦である。規模は長さ1.58m、幅1.4m、深さ70cmを測る。

241は唐津焼皿である。242は肥前白磁染付皿である。この他に丹波焼火入れ、肥前青磁皿(型打ち成形)・白磁染付小碗などが出土している。17世紀後半と考えられる。

### 土坑456 (第58図 図版33)

Ⅱ区の北東に位置する。遺構の東側は調査区外となり、西側は土坑518に切られている。平面形は東西方向に長辺をもつ溝状遺構である。規模は検出長2.45m、幅63cm、深さ20cmを測る。

243は唐津焼碗である。胎土は灰色で露胎部は赤褐色を呈している。この他に丹波焼甕体部片、肥前白磁染付碗片等碗が出土している。17世紀前半から中頃と考えられる。

## 2) 下層

### 建物跡

#### 礎石建物5 (第60・61図 図版17)

I区からⅡ区の第3遺構面下層に礎石建物跡および礎石の並びが多数存在するが、礎石建物5は、中でも礎石が比較的良く残っている。建物の位置は、第3遺構面上層から検出された礎石建物2とはほぼ同じで、規模も一致している。この建物の礎石は北礎石列、中央礎石列、南礎石列、西礎石列の4列確認された。北礎石列は西側で礎石が並ぶが東側はほとんどなく、中央礎石列も礎石の間隔が広い。南礎石列は2列存在するが、2列のうち北側の列をこの建物の礎石列とし、南側の列は礎石列5として別の建物と考えた。西礎石列は建物の奥の壁通りで、列の北側では礎石が半間間隔に並んでいる。建物の規模は、間口7.8m、奥行は11m以上になる。建物の周辺には、礎石に使用されたと思われる石や一石五輪塔などが散乱した状態で検出されている。この建物からは年代を想定できる遺物は出土しなかった。

#### 礎石建物6 (第60・62図 図版17・34)

Ⅱ区南側には、礎石と思われる平坦面を上にした石が散乱した状態で検出された。この内、東西方向に1.5m間隔で並ぶ1列とこれに関係するとみられる礎石がある。1.5m間隔の礎石列は、礎石4個が直線的に並んでいる。さらに西側には五輪塔の火輪を逆にした礎石2個があるが、その間の礎石は元位置から移動し、繋がりがわからない。

253は下白である。礎石に転用されている。この建物からは年代を想定できる遺物は出土しなかった。

#### 礎石列7 (第60・62図 図版17・34)

礎石建物6と礎石列6の間に、それらと併行する礎石列7が認められた。礎石列7は5個の礎石が直線的に並ぶ。その間隔は東から西へ2m、3m、2mで、西端の礎石の手前40cmに礎石が一つ並ぶ。礎石列の南側に石仏転用礎石を含めて5～6個の礎石があるが、元位置を移動したのか繋がりがわからない。

254は石仏である。礎石に転用されている。ここからは年代を想定できる遺物は出土しなかった。

**礎石列5・6 (第60・61図 図版17)**

礎石列5はI区南側に位置する。礎石建物5の南礎石列に接するようにこの礎石列がある。一石五輪塔1点を含め5個の礎石が並ぶ。礎石の大きさは揃わず、一辺30cmの方形の石もあれば、20cm大の石も使われている。礎石の間は一定せず、半間から1間の間隔をもっている。この礎石列が建物の壁通りと考えた場合、対応する一方の礎石列として礎石列6の可能性もある。

礎石列6はII区北側に位置し、礎石列5と併行する。礎石列6に関わる礎石は5個で、僅かに移動したものがあがるが、ほぼ直線的に並ぶ。礎石列5と6の間隔は7.7~7.8mで、礎石建物5の間口規模に近似している。この建物からは年代を想定できる遺物は出土しなかった。

**塼列建物1 (第60・63図 図版18・34)**

II区中央部から地中に塼を並べた遺構が検出された。塼は黒灰色の瓦質で、平均すると縦28cm、横22cmの大きさである。この塼を、東西4.55m、南北3.2mの長方形に並べていた。北列と南列は、別の遺構などによって壊されており遺存状態が悪い。塼を並べるにあたり幅20~28cm、深さ30cmの掘り方を長方形に巡らし、その掘り方の内壁に沿わせて塼を2段積みしていた。ほとんどの場所では1段分しか残っていなかったが、東列の北端部では2段目が15cmの高さで残っていた。このことから、当初は2段積みで、2段目の中ほどまでが地中に埋まり、それより上は地上に出ていた可能性が高い。東列の南東隅から1mの範囲は掘り方内に塼が積みまれている。当初から塼は無く、ここに入出口が存在していたと想定できる。

255は青花皿である。256は塼である。大きさは28.5×22.7cmで、厚みは3.0cmである。この塼は上記の遺構の中に並べられていた1枚で、他に出土している塼もほぼ同寸である。16世紀後半から17世紀初頭と考えられる。

**井戸跡****井戸5 (第64図 図版19・34・35)**

I区の西壁際に位置する。平面形は円形に近い楕円形で、素掘りの井戸である。規模は長さ1.34m、幅1.2mを測る。深さは検出面より約1.8mまで掘削したが、底は未検出である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。土師皿や唐津焼砂目積み皿、丹波焼陶器、中国製の磁器等が出土した。その中には焼けているものもあり、17世紀前半の火災で焼けたものを廃棄したと考えられる。

土師皿は、264のヘソ皿や、259・261・263のような胎土が橙色と、269のような白色がある。258・260~264には煤の付着は見られないが、259・265~267・269は煤の付着が見られる。唐津焼皿は、270・271は胎土目積みで、273・274は砂目積みである。275・276は丹波焼である。277は肥前白磁染付皿である。高台内は兜巾状に削られている。278は青花皿である。17世紀前半と考えられる。

**井戸6 (第65図 図版19)**

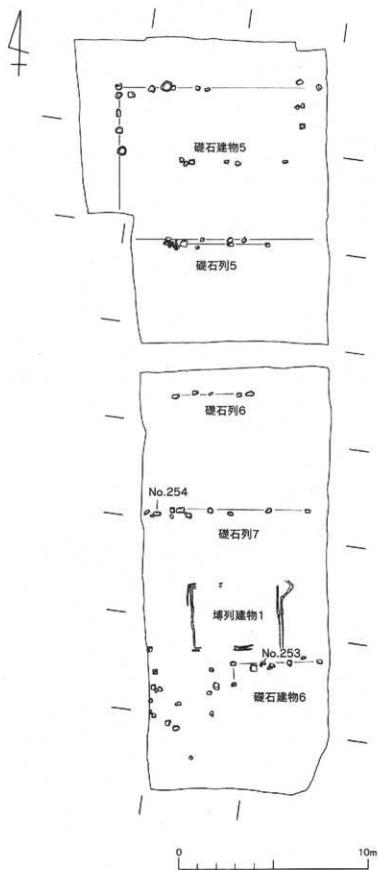
I区の西側に位置する。平面形は円形で、素掘りの井戸である。規模は上面の直径は95cm、下方に行くほど狭くなり、下方の直径は70cmを測る。深さは検出面より約1.8mの深さまで掘削したが、底は未検出である。埋土には焼土が混じり、焼けた瓦等が出土したので、この焼土は井戸5と同様に17世紀前半の火災時のものと考えられる。

図示できなかったが、備前焼大甕底部片、軒丸瓦、丸瓦、平瓦片等が出土している。

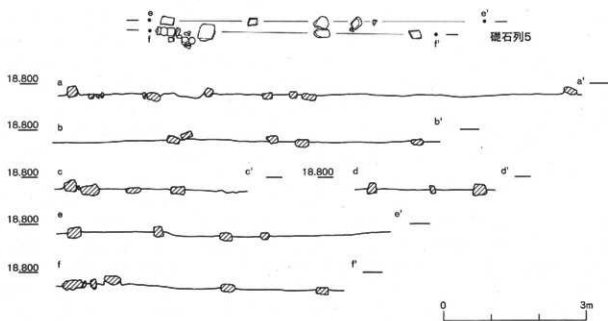
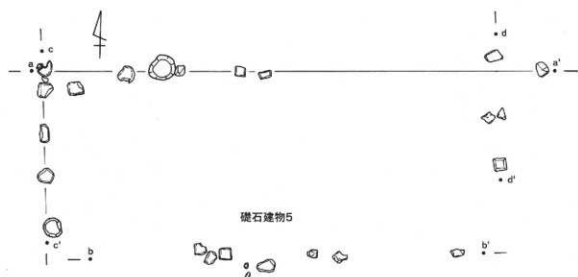
**竈跡****竈34 (第66図 図版19)**

II区中央で検出された。溝7に焚口部を破壊されているため全体形は不明。南側に焚口が開く





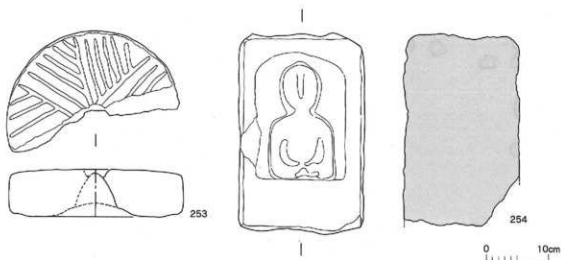
第60圖 第3遺構面下層 礎石建物跡全体圖、出土遺物檢出地点



第61図 礎石建物5・礎石列5平面・断面図

半地下式の竈で、2基連基式と考えられるが、向かって左側の竈は壊れていて本来の規模はわからない。左側の竈は、竈底から壁面にかけて赤く焼けていた。竈の規模は、左側の竈が径90cm、深さ18cm、右側は奥行90cm、幅80cmの範囲が25cmの深さで窪んでいるが、底面と壁面とも焼けていない。両側の竈の間から25cm大の石が並んで出土したが、これは左右両竈の境に積まれていたものと考えられる。

図示できなかったが、土師皿、唐津焼溝緑皿・碗などが出土している。17世紀前半と考えられる。



第62図 第3遺構面下層出土遺物

### 土器溜まり跡

#### 土器溜まり1 (第67・68図 図版19・35・36)

I区の北壁際に位置する。遺構の北側は調査区外となり、中央は上面の土坑268、西側は土坑269・竈24に切られている。規模は検出長5.9m、検出幅2.1m、深さ22~32cmを測る。埋土は炭や焼土が混じり、10~30cm程度の角礫を多く含む。また遺構の周辺にも15~30cm程度の角礫が広がり、石製品もある。遺物には土師皿や砂目積みの唐津焼皿、丹波焼播鉢(播り目へラ描き)等の17世紀前半の陶磁器が出土し、埋土に炭や焼土が混じり焼けた遺物が出土したことから、17世紀前半に火災時の後始末のために掘られた土坑と考えられる。同時期の焼土を含むものに井戸5・6がある。また当地点周辺の第86次(旧岡田家駐車場)・第100次(光明寺)・第132次(光明寺南側)・第175次(旧岡田家酒蔵)調査でも同時期の火災層や焼土処理土坑が発見されており、17世紀前半にこのあたりで火災があったことが伺える。

土師皿は口径が9cm前後のもの、7.5cm前後のものに大きく分けられる。287・291は胎土が灰色である。出土した土師皿に煤の付着は見られなかった。唐津焼は碗・皿ともに灰釉が多い。295は胎土が赤褐色で、白泥を用いて象嵌文様を施している。皿は図示したものはすべて砂目積みで、溝縁皿が多い。若干胎土目のものも見られる。302・303は丹波焼播鉢である。口縁部内面に沈線を持たないもの(302)と沈線をもつもの(303)で播り目はへら描きである。この他に大平編年A類で播り目がクシ描きのものが出土している。肥前磁器は304や305の他に筒形碗や青磁碗が出土している。17世紀前半と考えられる。

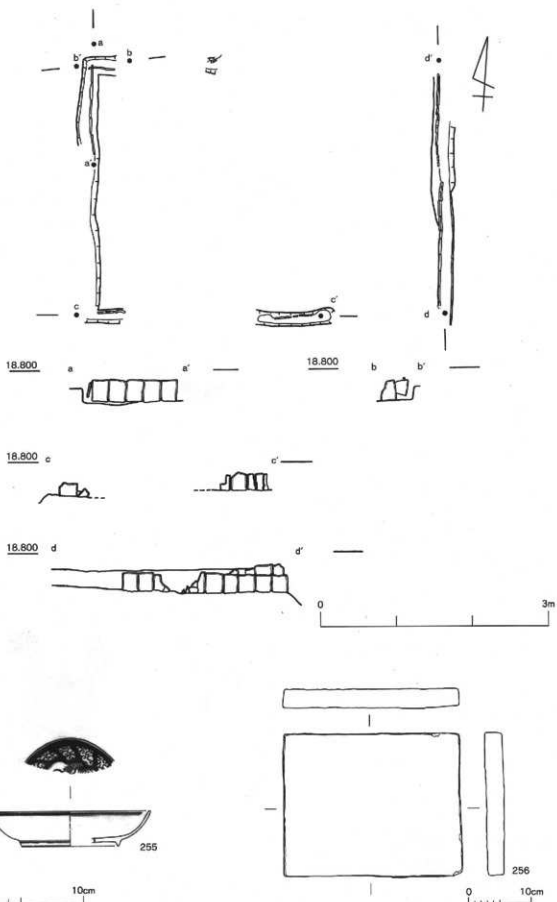
#### 土器溜まり1周辺出土遺物(第69図 図版36)

306は上白で、花崗岩製である。307は板碑で、花崗岩製である。礎石に転用されていたのか、表面は削られている。

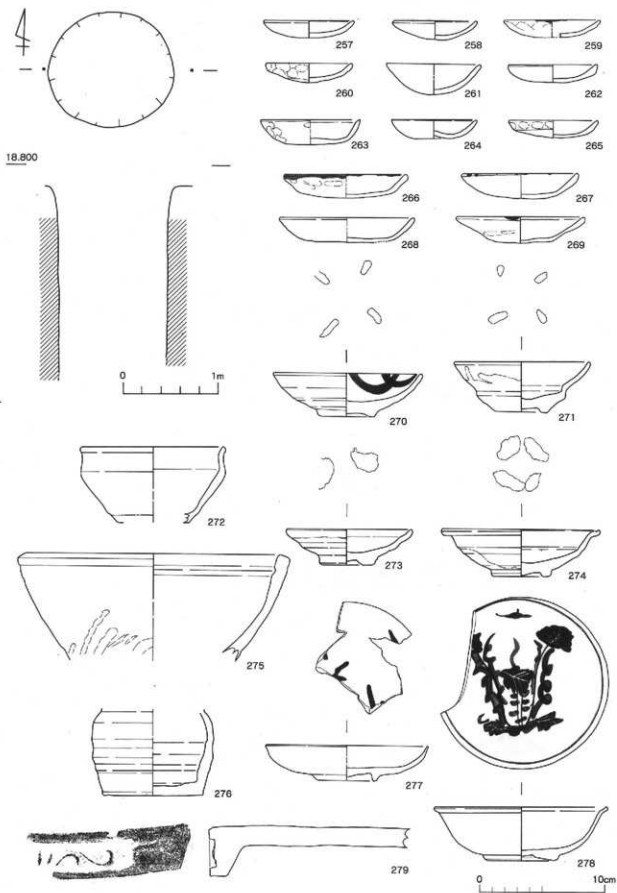
### 土坑

#### 土坑481(第70図 図版36)

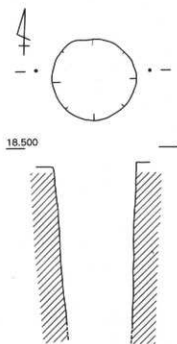
I区の北側に位置する。遺構の北側を竈24・竈27に切られている。規模は検出長1.5m、検出幅60cm、深さ10cmを測る。



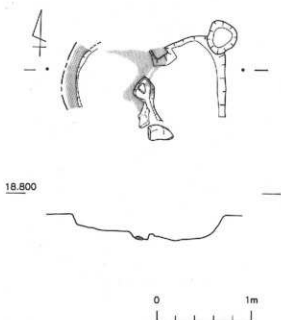
第63圖 埤列建物1平面・立面圖、出土遺物



第64図 井戸5平面・断面図、出土遺物



第65図 井戸6平面・断面図



第66図 竈34平面・断面図

308は肥前白磁染付碗である。この他に二彩唐津鉢体部片、肥前青磁掛け分け碗等が出土している。17世紀後半である。

#### 土坑484 (第70図 図版36)

I区の北側に位置する。遺構の南側は焼土処理土坑1に切れ、遺構の北東隅には礎石が乗っている。平面形は方形である。規模は検出長60cm、検出幅55cm、深さ10cmを測る。

309は唐津焼皿である。胎土目積みである。口縁部に煤が付着している。16世紀末から17世紀初頭と考えられる。

#### 土坑521 (第70図 図版36)

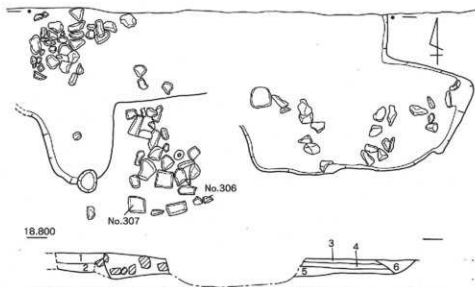
II区の中央に位置する。土坑468・土坑470・土坑471の下から検出された遺構である。平面形は長方形である。規模は検出長70cm、幅53cm、深さ10cmを測る。

310は丹波焼播鉢である。播り目はヘラ描きである。16世紀末から17世紀初頭である。

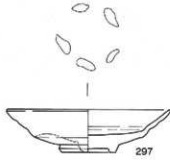
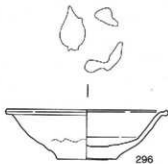
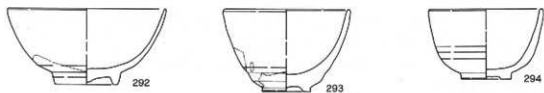
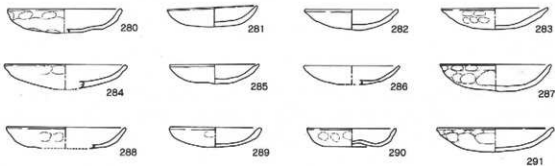
#### 土坑542 (第70図 図版36)

I区の南側に位置する。平面形は小型の円形である。規模は直径30cm、深さ10cmを測る。一直線上に土坑508・土坑509も並び、底の深さがほぼ一定である。これらの遺構は形状から礎石の抜き取り穴と考えられる。

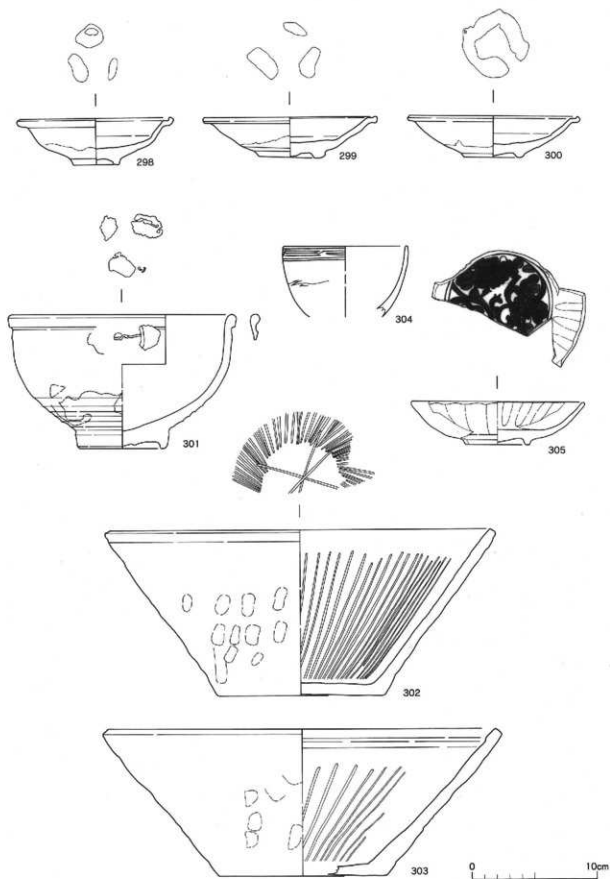
311は瓦質土器鉢である。外面は横方向のミガキで丁寧に磨かれ、光沢を持っている。



1. 10YR5/4 に2L 黄褐色粘質土層 (カーボン若干含む)
2. 10YR3/3 暗褐色粘質土層 (カーボン若干含む)
3. 10YR5/6 黄褐色土層 (カーボン若干含む)
4. 10YR4/4 褐色砂質土層 (カーボン・粘土を若干含む)
5. 10YR3/3 暗褐色砂質土層 (カーボン多く含む)
6. 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質土層 (カーボン・粘土を多量に含む、粘土含む)

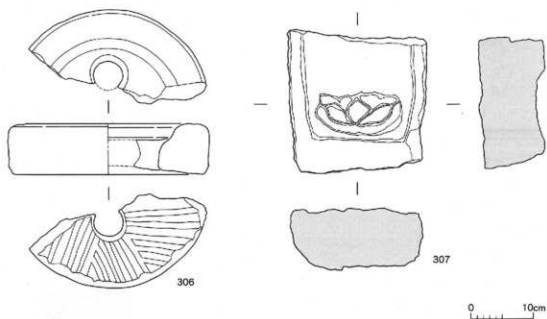


第67図 土器溜まり1平面・断面図、出土遺物(1)

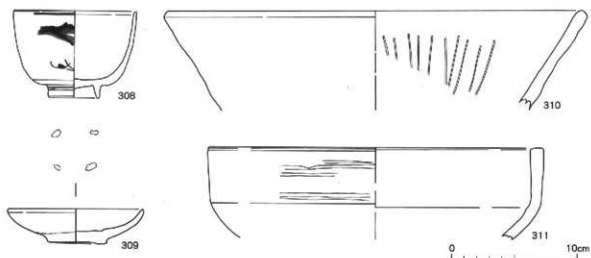


第68図 土器溜まり1出土遺物(2)





第69図 土器溜まり1周辺出土遺物



第70図 土坑481・484・521・542出土遺物

## 第6節 第4遺構面

第4遺構面（第13図）は、調査中に第6遺構面・第7遺構面として調査したものである。各区ともに多数の遺構が検出されたが、性格が明らかな遺構は少ない。遺構の時期は、概ね16世紀後半から17世紀初頭に中心があり、伊丹城期から有岡城期、初期伊丹郷町期にあたる。しかし、下層からは渡米銭を大量に埋納した土坑910、完形の弥生土器を出土した溝16、土坑663など中世や弥生時代の遺構も検出されており、時代の幅が広い。

### 建物跡

#### 礎石列8（第71図）

Ⅲ区中央南寄りで検出した東西方向に並ぶ礎石列である。検出長7.8m。礎石は自然石を地面に平置きするものと、掘り方をもつものが規則的に並んでいる。柱の役割によって下部構造が異なっていたものと考えられる。左端の礎石は径56×65cm、深さ40cmの掘り方内に据えられている。右端の礎石は上層遺構によって既に掘り方を失っているが、石の検出レベルからも左端の礎石と同じ構造をしていたようである。平置き礎石上の柱に対し、地中に埋め込まれた礎石上の柱はより強度を求められるものとなる。したがって、この左右の礎石は、南北方向の建物の南西・南東角に位置すると考えられる。中央に位置する礎石は径80×70cm、深さ10cmの掘り方内に、地輪を転用して礎石としている。周りに拳大の石を入れて強固に作られていることや礎石の並び位置から、建物の梁を支える柱が乗っていたと思われる。土坑594から備前焼壺体部片、土坑599から平瓦片が出土しており、礎石代わりに利用したとも考えられる。

### 井戸跡

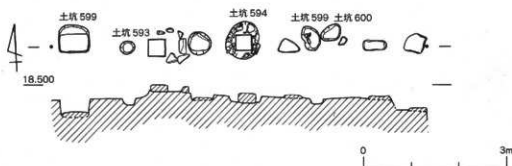
#### 井戸8（第13図）

Ⅲ区の中央北側に位置する。平面形は楕円形で、素掘りの井戸である。規模は95×80cm、深さは検出面から約1mまで掘削したが、底は未検出である。埋土は褐色粘質土である。

図示できる遺物はなかったが、土師皿片や瓦質土器片、丹波焼壺体部片が出土している。

#### 井戸9（第13図）

Ⅰ区の北西に位置する。平面形は円形で、素掘りの井戸である。規模は直径約1.3mを測る。深さは検出面から約80cmまで掘削したが、底は未検出である。上方が広くなっていて、下方に行くほど狭くなり直径90cmとなる。埋土はオリブ褐色粘土である。ここからは遺物は出土していない。



第71図 礎石列8平面・断面図

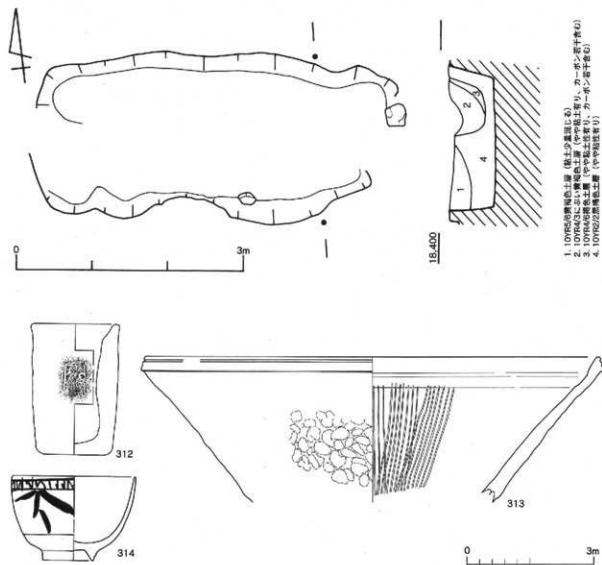
## 埋甕遺構

調査区内で4ヶ所（Ⅰ区で1ヶ所、Ⅲ区で3ヶ所）確認している。その中で比較的残りのよいものについて説明したい。

### 埋甕遺構1（土坑622）（第72図 図版21・37）

Ⅲ区中央で検出した土坑である。長さ4.9m、幅2.2m、深さ60cmを測る。埋甕の掘り方を平面では確認できなかったが、遺構の土層断面で埋甕を抜き取った後に掘り方内に堆積した埋土（1～3層）を確認することができた。埋甕は径75cm程の大きさで、土坑内には12個のおそらく備前焼甕が据えられていたと考えられる。

遺物としては備前焼甕・陶磁器類が少量出土している。312は焼塩壺である。コップ形を呈し、口縁部内面が外反して尖る。輪積み成形。体部に「天下一云々」の刻印を持つ。314は外面に笹文を描いた肥前白磁染付碗、313は丹波焼播鉢である。口縁部内面に凹線を施し、外面は指頭圧痕が目立つ。17世紀中頃の所産である。



第72図 埋甕遺構1平面・断面図、出土遺物

## 埋竈遺構2 (土坑719) (第73図)

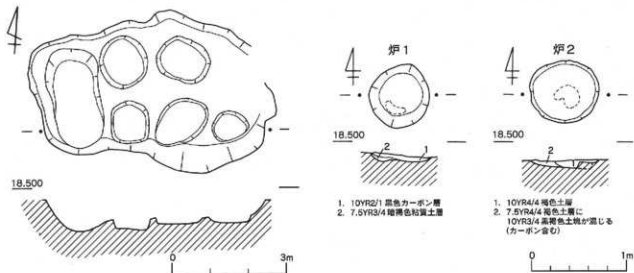
I区中央で検出した土坑である。長さ3.2m、幅1.6~2.2m、深さ30~40cmを測り、不定形を呈する。土坑内に6個の埋竈の掘り方を確認しているが、検出状況からはおそらく8個の竈が据えられていたと考えられる。土坑の周りでは溝や柱穴を数基検出しているが、埋竈遺構に伴う建物を復元するには至っていない。

出土遺物として土師皿、備前焼捕鉢・甕、唐津焼鉄絵片口などが出土しているが、何れも小片のため図示できなかった。16世紀末から17世紀初頭ごろの所産である。

## 炉跡

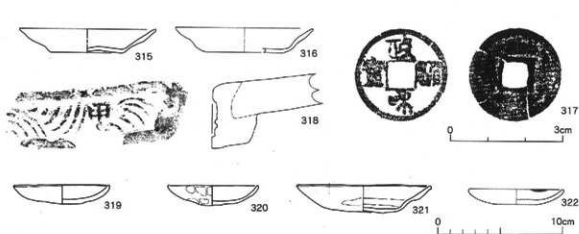
## 炉1 (土坑704) (第74図)

I区北東隅に位置する円形の土坑である。規模は、径は64cm、深さ8cmの浅い土坑で、底面に焼土



第73図 埋竈遺構2平面・断面図

第74図 炉1・2平面・断面図



第75図 土坑561・573・586・620・625出土遺物

の堆積が認められた。ここからは遺物は出土していない。

#### 炉2 (土坑710) (第74図)

Ⅰ区中央部に位置する。規模は、東西74cm、南北64cm、深さ8cmである。ここからは遺物は出土していない。

#### 土坑

第4遺構面では353基の土坑を検出している。その中で主な土坑について説明する。

#### 土坑561 (第75図)

Ⅲ区の中央西側に位置する。平面形はほぼ方形である。規模は長さ・幅共に1.3m、深さ30cmを測る。埋土は炭化物を多く含む灰黄褐色砂質土である。

315・316は土師皿である。他に丹波焼播鉢体部片(ヘラ描き)が出土している。16世紀末から17世紀初頭と考えられる。

#### 土坑573 (第75図 図版37)

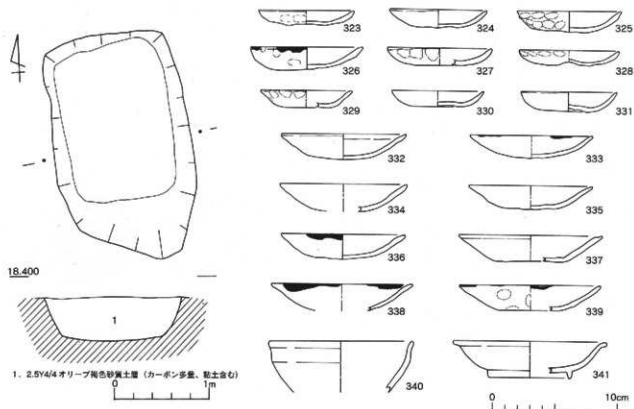
Ⅲ区の中央に位置する。平面形は小型の円形である。規模は直径35cm、深さ30cmを測る。埋土は褐色砂質土である。

317は政和通寶である。この他に遺物は出土していない。

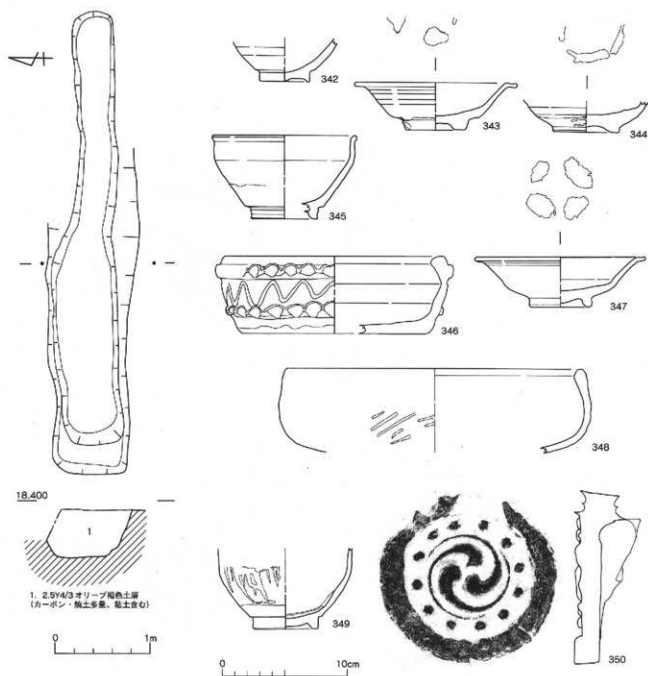
#### 土坑586 (第75図 図版37)

Ⅲ区西壁東寄りで検出した土坑である。西側調査区外に延びており、溝の可能性もある。検出長1.1m、幅80cm、深さ10cmを測る。

土坑内から軒平瓦(318)が出土している。瓦当は半截青海波文を中心飾りとし、左右に交互に波状



第76図 土坑626平面・断面図、出土遺物



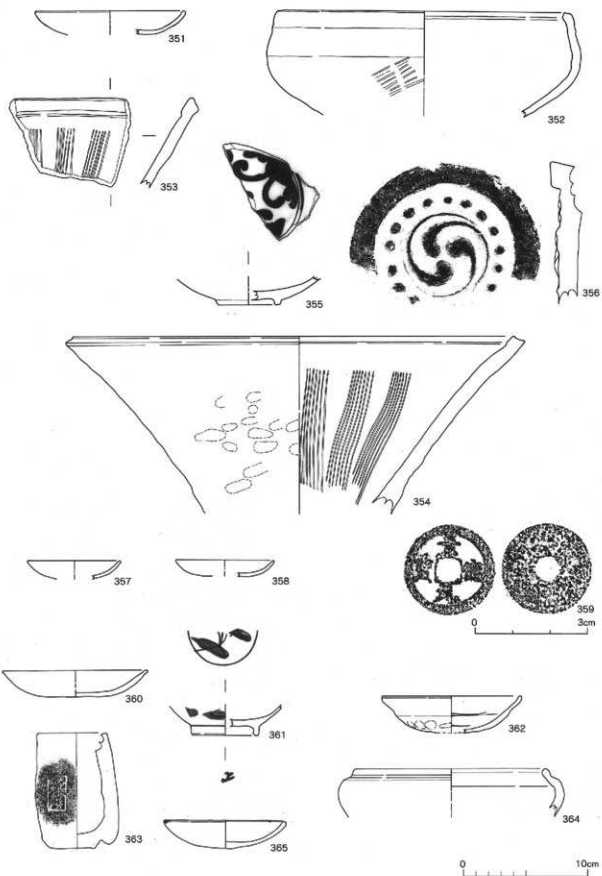
第77図 土坑645平面・断面図、出土遺物、土坑647・648・651出土遺物

を繰り返す半載青海波文と「甲」銘を配す。瓦当貼り付け式段頸である。頸後縁以外の面取りはなし。凹面に煤の付着が見られる。同タイプの瓦が四天王寺、姫路城から出土している。他に備前焼播鉢、丹波焼甕片が出土している。16世紀中葉から後半のものである。

#### 土坑620 (第75図 図版37)

Ⅲ区中央南寄りで検出した土坑である。径88cmの円形を呈し、深さは16cmである。褐色粘質土を埋土とする。

遺物では土師皿が出土している。319・320は手捏ねの小皿で、外面には指頭圧痕がそのまま残っている。灯明皿としての使用痕は見られない。321は口縁部に2段の指オサエを加えて大きく外反させている。にぶい黄橙色を呈し、僅かに雲母、クサリ礫を含む精良な胎土である。15世紀中葉から後半頃



第78図 土坑655・701・709・723・732・744・807・823・825・864出土遺物

の所産である。

#### 土坑625 (第75図 図版37)

土坑620の北側に位置する土坑である。径1.2×1.2mの隅丸方形を呈し、深さは34cmである。にぶい黄褐色粘質土を埋土とする。

遺物では瓦、土師皿が出土している。322は土師皿である。土坑620の小皿に比べ器高が低い。口縁端部に煤の付着が見られ、灯明皿に使用されている。浅黄色を呈し、胎土は精良である。

#### 土坑626 (第76図 図版37)

土坑625の東側に位置する土坑である。2.34×1.2mの砲弾形を呈している。深さは40cmである。オリーブ褐色砂質土を埋土とする。土坑内から多量の土師皿が出土しているが、遺構の性格を推測できない。

口縁が内湾気味に立ち上がる小皿(324~328)は口径7.8~9.0cm、器高1.4~1.8cmを測る。329~331は口径7.4~7.7cm、器高1.2~1.6cmで、底部中央をへソ皿状に凹ませている。前者に比べて器壁は薄い。何れもにぶい黄褐色あるいは灰黄色を呈し、胎土は精良である。灯明皿として使用されているのは326だけである。口縁が大きく外反する皿(332~339)には口径9.8~10cm、器高1.8~2.1cmの小皿(332~336)と口径11.4~11.8cm、器高2cmの中皿(337~339)がある。京都系土師皿の器形を模倣したものである。灰白色あるいは浅黄色を呈し、胎土は精良である。337・338は内底面に圈線が廻る。シャープで丁寧な作りで、胎土もより精良であることから、搬入品と思われる。この器形の6割が灯明皿に使用されている。土師皿の食膳具から調度具への分化がすでに現れてきており、それは大・中皿から先に進んで行くように思われる。

340は瀬戸・美濃焼天目碗である。341は中国製白磁皿で、胎土は精良である。16世紀後半から末頃の一括遺物である。

#### 土坑645 (第77図 図版21・37)

Ⅲ区北側で検出した土坑である。検出長4.9m、幅75~96cm、深さ53cmを測る、2段落ちの溝状遺構である。下段の上場幅が中央から東にかけて急に細くなっている。北側に隣接している埋甕遺構に伴う土坑とも考えられる。

342は瀬戸・美濃焼天目碗である。343・344は砂目痕を持つ唐津焼皿である。17世紀前半の所産である。

#### 土坑647 (第77図 図版37)

Ⅲ区土坑645の西隣に位置する土坑である。径1.15×0.65mの楕円形を呈し、深さ35~42cmを測る。

土坑内から瀬戸・美濃焼天目碗(345)が出土している。17世紀初頭の所産である。

#### 土坑648 (第77図 図版37・38)

Ⅲ区土坑647に切られている土坑である。1.65×0.87mの長方形を呈し、深さ38~45cmを測る。

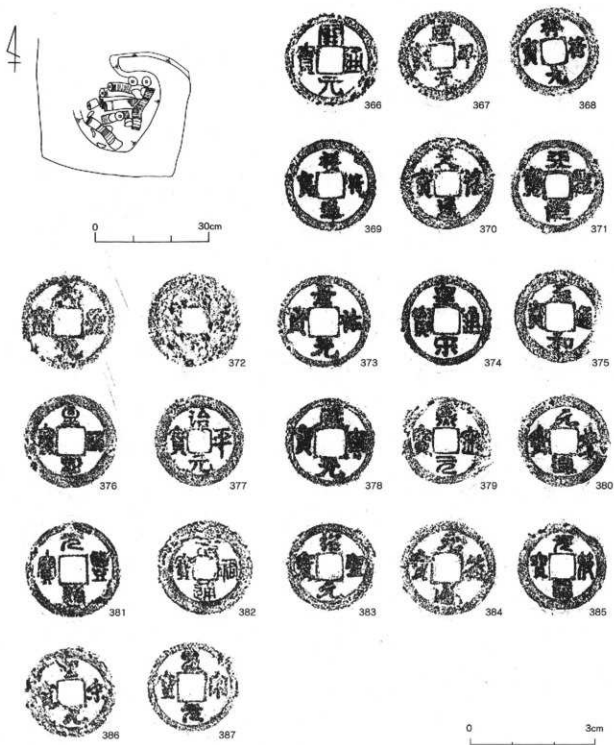
346は瓦質浅鉢である。脚を持たず、平底である。内面中央は炭素吸着が掻き取られている。口縁上面に打ち欠きが見られることなどから、灰落としに使用されていたと考えられる。347は唐津焼溝縁皿である。皿の高台内には兜巾が見られる。17世紀初頭の所産である。

#### 土坑651 (第77図 図版38)

Ⅲ区土坑648の西に位置する土坑である。1.7×1.15mの不定形を呈し、深さ22~35cmを測る。にぶい黄褐色砂質土を埋土とする。

348は焙烙である。体部外面に右上がりの平行タタキを施す、いわゆる難波編年A類である。349は瀬戸・美濃焼天目碗である。350は左巻き三巴文軒丸瓦である。巴頭は僅かに尖り、内区を半周する長い尾を引く。外縁高は浅い。珠文は粗く12個である。17世紀前半の所産である。





第79図 土坑910埋納銭出土状況、出土銭貨

土坑655 (第78図 図版38)

Ⅲ区土坑651の南で検出した土坑である。検出長1.43×0.65m、深さ42~51cmを測る。にふい黄褐色砂質土を埋土とする。

遺物では土師器・瓦などが出土している。352は焙烙である。体部外面に右上がりの平行タタキを施す、いわゆる難波編年A類である。土坑651出土の焙烙(348)に比べて腰が張っており、かなり深手である。口縁部内面の内傾幅は小さい。353・354は丹波焼播鉢である。口縁部内面に凹線を施し、体

部外面には指頭圧痕が目立つ。353は口縁端部が三角形を呈する。351は土師皿である。口縁端部が内傾気味に段を持って立ち上がり、内面・外面口縁部はヨコナデ、体部は縦方向にナデを施し丁寧な作っている。にぶい黄橙色を呈し、雲母が目立つ胎土である。355は肥前白磁染付皿である。畳付部分を幅広くした蛇の目高台を持つ。356は右巻き三巴文軒丸瓦である。巴頭は小さく、内区を半周する細長い尾を引く。内圏線は省略され、珠文は17個である。17世紀前半の遺物である。

#### 土坑701 (第78図 図版38)

I区東壁中央で検出した土坑で、調査区外に広がっている。検出長1.1m、幅2.6m、深さ28cmを測る。埋土はオリーブ褐色粘質土である。土坑内に径50～60cm、深さ22cmの掘り方を2基確認できることから、南北方向の埋壙遺構であった可能性が考えられる。

357は土師皿である。橙色を呈し、胎土は精良である。

#### 土坑709 (第78図 図版38)

I区土坑701の北西側に位置する土坑である。長さ2.9m、幅1.4mの長方形を呈し、深さ20cmを測る。炭混じりの褐色粘質土を埋土とする。土坑内からは備前焼甕片が出土しており、埋壙遺構の可能性もある。

358は土師皿である。にぶい黄橙色を呈し、胎土は精良である。口縁上面は波打っており、かなりいい加減な作りである。

#### 土坑723 (第78図 図版38)

I区土坑701の南西に位置する土坑である。70×60cmの方形を呈し、深さ16cmを測る。埋土は黄褐色粘質土である。土坑内には栗石や10cm大の石が残っており、礎石の根石痕と思われるが、柱の通りは確認できなかった。出土遺物から地鎮遺構の可能性も考えられる。

359は銅銭である。銭文は「景德元寶」、宋銭で初鑄年は景德元年(1004)。他に土師皿が出土している。

#### 土坑732 (第78図 図版38)

I区東南で検出した土坑である。80×80cmの不定形を呈し、深さ42～54cmを測る。埋土はオリーブ褐色粘質土。土坑内には10cm大の礫が多く残っており、礎石の根石痕と思われる。

360は土師皿である。にぶい黄褐色を呈し、胎土は精良である。口縁部は外反気味に開き、外面をヨコナデすることで端部が僅かに玉緑状を呈している。他に銭貨(種類は不明)が出土しており、地鎮遺構の可能性が考えられる。

#### 土坑744 (第78図 図版38)

I区南壁西側で検出した土坑である。検出長1.1m、幅1.1m、深さ22～23cmを測る。埋土はオリーブ褐色粘質土。

361は青花碗である。釉の掛かっていない部分の胎土が赤く発色している。体部壁が薄く丁寧な作りである。他に土師皿が出土している。17世紀中頃の所産である。

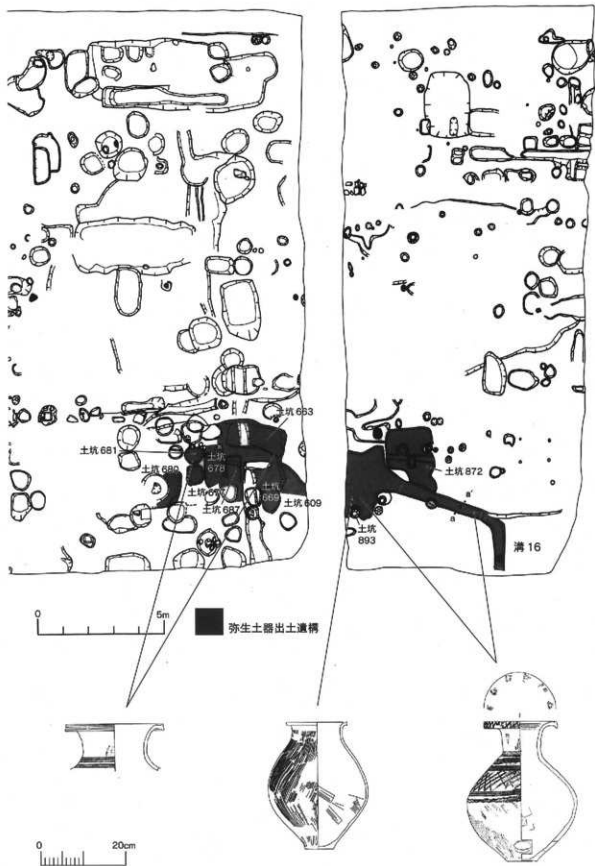
#### 土坑807 (第78図 図版38)

II区北側で検出した柱穴である。直径20cm、深さ20cmを測る。周辺には同様の大きさの柱穴が十数基確認できるが、建物跡を復元することはできなかった。

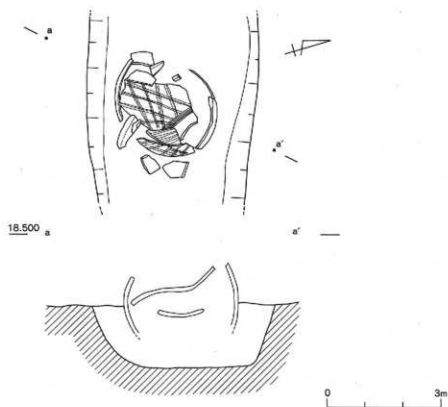
362は和泉型瓦器碗である。外面の指頭圧痕は目立たず、平底気味の丸底をなす。口縁部及び内面は丁寧にヨコナデを施し、内面の螺旋状ミガキは数周巡るにすぎない。焼成は良好で硬く焼き締まっている。尾上編年IV-4期の瓦器碗である。14世紀前半頃に相当する。

#### 土坑823 (第78図 図版38)

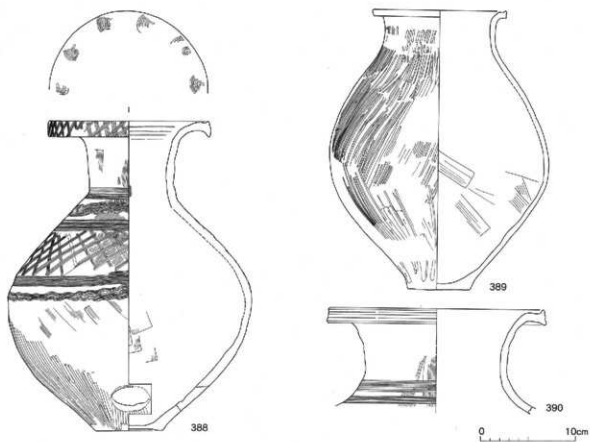
II区北側で検出した土坑である。60×30cmの方形で、深さ18～31cmを測る。



第80图 II·III区内弥生土器出土地点



第81圖 溝16平面(部分)・断面図



第82圖 溝16・土坑663出土遺物

363は焼塩壺である。下半部が膨らむコップ形をしている。口縁部内面は外傾して、端部は尖がる。橙色を呈し、雲母・クサリ礫・砂粒を多く含む胎土である。体部に「天下一堺ミなど／藤左衛門」の刻印を持つ。17世紀中頃の所産であろう。

#### 土坑825 (第78図)

Ⅱ区北側で検出した柱穴である。直径20cm、深さ19～21cmを測る。周辺では同様の大きさの柱穴を十数基確認できるが、建物跡を復元することはできなかった。褐色粘質土を埋土とする。

364は丹波焼鉢である。肩が小さく張出し、口縁部は短く立ち上がって、端部は玉縁状を呈す。

#### 土坑864 (第78図 図版39)

Ⅱ区中央東側で検出した土坑である。90×63cmの楕円形で、深さ15～20cmを測る。

365は土師皿である。口縁端部が内傾して僅かに立ち上がっている。外面は底部と体部に分けて単位の大きな指オサエを施し、内面は丁寧にナデ調整している。によい橙色を呈し、胎土は精良である。17世紀の所産であろう。

### 埋納銭遺構

#### 土坑910 (第79図 図版21・38)

Ⅲ区中央で検出した中世の埋納銭遺構である。直径25cmの土坑内に銭繙9繙が2段に重なった状態で出土した。甕や木箱などの容器に埋納された痕跡はなく、布か袋に包まれていた様子も確認できない。繙の残存状態は良好ではなく、全く1繙分と思われるものは4繙であるが、銭貨枚数は104枚、102枚、101枚、97枚であり一定していない。他の繙は86枚、85枚、74枚、58枚、53枚、バラ銭68枚である。58枚と53枚の繙は引付いた状態で出土しており、1繙分を埋納の際に解体したことが考えられる。残る3繙についてはバラ銭を合わせると313枚で、それを3繙に分けると1繙104枚のもの2繙、105枚が1繙に復元できる。したがって、埋納されていた銭繙は銭貨97～111枚を1繙とする8繙であったと推測できる。中世では97文(枚)を百文に通用する省百法が用いられていたが、今回出土の繙銭は97枚より多い枚数の繙で構成されている。

繙を剥離していないため銭種の分類はできていないが、バラ銭の中で銭文の判読が可能なもの22枚については拓本を掲載している。最古銭は唐銭の開元通寶(初鑄621年)、最新銭は北宋銭の聖宋元寶(初鑄1101年)である。埋納時期については、最新銭の初鑄年代から12世紀前半を上限としておく。

### 弥生時代の遺構

Ⅱ・Ⅲ区南側では弥生時代の遺構を集中して検出することができた。遺物が出土している遺構について説明しておきたい。

#### 溝16 (第80・81・82図 図版22・39)

Ⅱ区南側で検出したL字状の溝で、南側は調査区外に延びる。検出長7.7m、幅55～36cm、深さ15～30cmを測る。溝内から壺(388・389)が置かれた状態で出土している。

388は広口壺である。口径17cm、器高32.8cm、底径7.4cmを測る。体部壁に比べて底部壁はかなり薄いつくりである。外面体部下半はヘラミガキ、上半から頸部にかけてハケ目調整している。大きく開く口縁部端面は櫛描きによる斜格子文を施し、内面には扇形文を配す。頸部下半から体部中位には櫛描きによる直線文・波状文・斜格子文を施し、櫛描文様帯の下端には波状文を配す。内面口縁部から頸部はヘラミガキ、体部はハケ目調整する。体部下半に穿孔が1ヶ所見られる。黒斑は体部中位に1ヶ所残っている。橙色を呈し、雲母・砂粒を含んでいるが精良な胎土である。

389は広口壺である。口径14.2cm、器高29.6cm、底径6.7cmを測る。直立する短い頸部に、小さく開

く口縁部がつく。無文で、調整痕がそのまま残っている。器体上半部は粗いタテハケを施し、下半はヘラミガキする。体部下半に煤が付着しており、甕として使用されていたようである。体部下半に1ヶ所の穿孔があり、体部中位片側に黒斑がみられる。橙色を呈し、雲母・砂粒の目立つ胎土である。

389と同タイプの壺の肩～体部片が溝の南端で出土している。無文で、体部上半を粗いタテハケ、下半をヘラミガキ調整している。橙色を呈し、雲母・砂粒・クサリ礫の目立つ胎土である。全体に煤が付着していることから甕として使用されていたことが分かる。弥生時代中期後半。

#### 土坑663 (第80・82図 図版22・39)

Ⅲ区で検出した東西方向の大きな溝状遺構で、検出長5.5m、幅3.15m、深さ19～27cmを測る。埋土は褐色土である。土坑内では他の遺構が集中して検出されており、土坑の詳細を知ることは難しい。

390は広口壺である。大きく開く口縁部端面に浅い凹線文を施している。口縁部から頸部上半はヨコナデ、頸部下半から肩部にかけては細かい単位ハゲ目調整をしている。頸部下部に櫛描きによる直線文を施す。内面は丁寧にヨコナデする。におい黄橙色を呈し、胎土はたいへん精良である。他に同個体と思われる体部片が出土している。櫛描きによる直線文と波状文が施され、体部下半はヘラミガキ、中位～上半は粗いハゲ目調整をしている。弥生時代中期後半。

#### 遺構外出土遺物 (第83～86図 図版39～41)

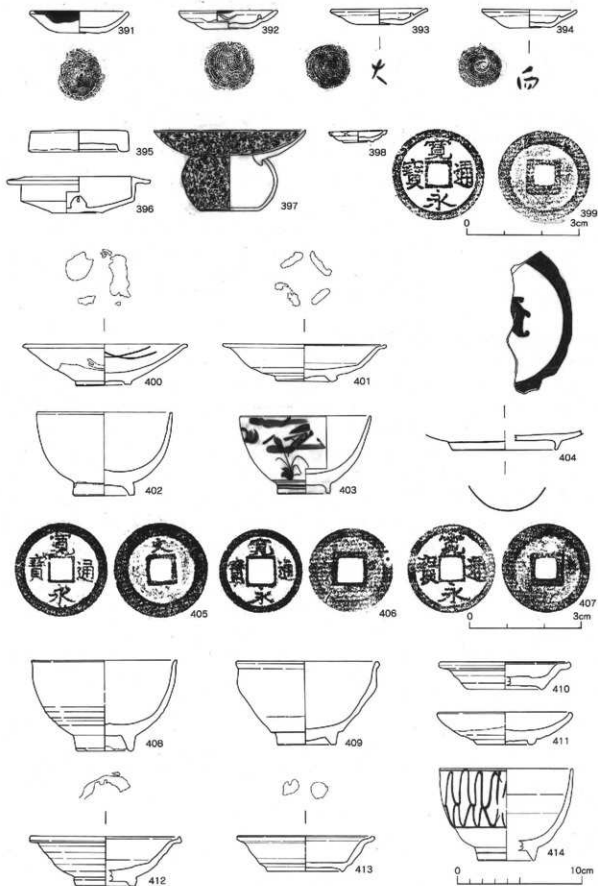
今回の発掘調査では、第1遺構面から第7遺構面まで確認された(表1参照)。各遺構面を検出していく掘削中に、遺構外の遺物として、総出土量の半数以上を占める多数の遺物を取り上げている。遺構出土遺物の多くは、各々層名がつけられ、Ⅳ層からⅧ層までである。Ⅰ～Ⅲ層の遺物は機械掘削中に出土し、確認したと考える。これらの遺物の中から上層から順に、取り上げた各層ごとに報告する。

391から399は第Ⅳ層で出土した。第Ⅳ層の遺物とは、重機掘削で表土を取り除いた後、第1・2遺構面調査のため、人力で掘削していく中で出土した遺物である。Ⅰ区の北側からは土師皿が出土し、南側から柿軸灯明皿・受皿が10枚以上出土した(391～394)。口縁部に煤が付着し、底部に「大」や「向」を墨書で記す。395は焼塩壺の蓋である。396は京焼系の土瓶の蓋である。397は肥前白磁染付唾壺である。口縁部は輪花で、細かい唐草文が施されている。398はミニチュア土製品である。内面に白色釉が施されている。概ね18世紀後半以降のものが出土している。

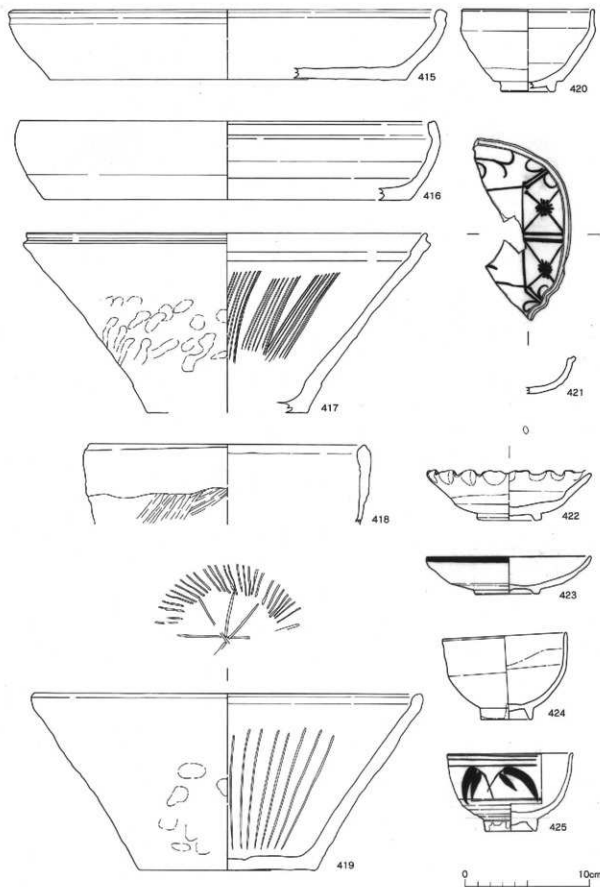
400から407は第Ⅴ層で出土した。第Ⅴ層の遺物とは、第3遺構面検出のため、掘削中に出土した遺物である。この層は、Ⅰ区東側からⅡ区の北側で約20cm程度堆積しているのが確認された。炭を多く含む焼土層である。400と401は唐津焼皿である。この手の若干古い遺物も含まれていた。402は唐津焼灰釉碗である。高台は内外面共に無釉である。403は肥前白磁染付碗である。高台径がやや小さめで、外形は直線的に立ち上がる。404は肥前白磁染付皿である。概ね17世紀中頃から18世紀前半のものが出土している。

408から417は第Ⅵ層で出土した。第Ⅵ層の遺物とは、第4遺構面検出のため、掘削中に出土した遺物である。408は瀬戸・美濃焼碗で、長石釉をかける。体部下半は器面に削りを施している。畳付部は露胎である。409は瀬戸・美濃焼天目碗である。414は肥前白磁染付碗で外面口縁部と体部下半に施した圏線の間に2段の網目文を施している。高台内は露胎である。415と416は丹波焼大平鉢である。415は外面底部に塗土を施し、内面見込みには自然釉が掛かる。416は内面体部から見込みにかけて灰釉を施し、底部に自然釉が掛かる。417は丹波焼播鉢である。概ね17世紀前半から中頃のものが出土している。

418から429は第Ⅶ層で出土した。第Ⅶ層の遺物とは、第5遺構面検出のため、掘削中に出土した遺物である。418は焙烙である。外面体部に右上がりの平行タタキが施されている。419・426は丹波焼播鉢である。421は絵唐津皿(向付)、422は唐津焼輪花皿、423は口鏝を施した唐津焼皿である。424・

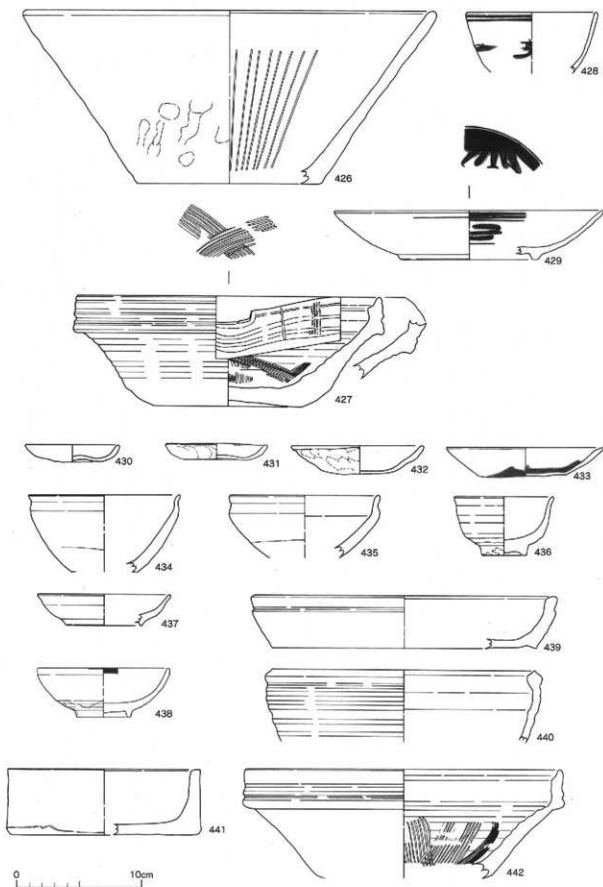


第83図 第IV層・第V層・第VI層(1)出土遺物

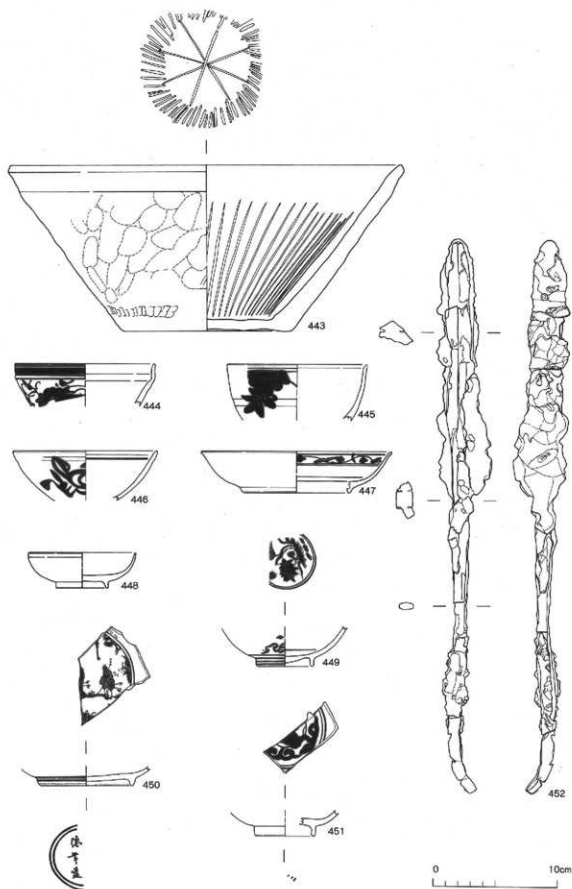


第84図 第Ⅵ層(2)・第Ⅶ層(1)出土遺物





第85圖 第Ⅶ層(2)・第Ⅶ層(1)出土遺物



第86図 第Ⅷ層(2)出土遺物

425・428は肥前磁器碗であるが、若干年代が新しい。427は備前焼播鉢である。概ね17世紀初頭から前半のものが出土している。

430から452は第Ⅷ層で出土した。第Ⅷ層の遺物とは、第6・7面検出のため、掘削中に出土した遺物である。430から433は土師皿である。430と431は、口径が約8cmで、底部中央が若干窪む。432は口径が11cm弱で、外面体部に指頭圧痕が明瞭に残る。433は口径が約14cm弱で、内面体部から外面口縁部周辺はヨコナデを施している。図版中の黒い部分は油分が変色して黒ずんだものであろう。434・435は瀬戸・美濃焼天目碗である。434は体部下半の露胎部に錆釉が施され、16世紀前半頃のもの。435は若干器高が低くなる16世紀後半のものと考えられる。446・447・449～451は中国製青花である。446は粗製の青花で、その他のものは精良な製品である。452は鉄製の槍先である。全長44.5cmで腐食が著しい。有岡城期の遺物であろうか。概ね16世紀代のものが出土している。

## 第4章 結語

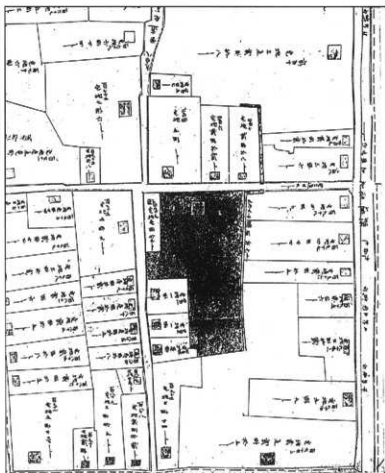
有岡城跡・伊丹郷町遺跡第66次調査は、伊丹郷町の中心部で行った本格的な発掘調査の最初であり、旧岡田家酒蔵（調査当時は県指定文化財）の隣接地ということもあって注目された。調査を進めてみると、火災跡や江戸前期に遡る酒造用遺構の発見、さらには礎石の根石に建築主を表す「鹿し清」の文字と酒名を表した「三つ鱗」の商標の墨書など、それまでの発掘調査になかった多くの新知見が得られた。また、時を経ずして行われた旧岡田家酒蔵の調査では、建築史や古文書などからも学際的な検討に加えて少なからず古文書の調査も行われているが、その契機はこの第66次調査であった。こうした伊丹郷町遺跡にとって記念碑的な発掘調査であったにもかかわらず、報告書刊行までに多くの時間を要したが、結果的にはその間に調査時には不明だった江戸時代の土地所有者などの検討が進んだ。ここでは、その要点を紹介し結語に代えたいと思う。

### 旧岡田家酒蔵の所有者

酒蔵の所有者については、「岡田利兵衛文書」の検討（註1）と旧岡田家酒蔵の解体修理に伴って行われた一連の調査（註2）によって明らかになってきた。それによれば、酒蔵は松屋と兵衛から享保14年に鹿島屋清右衛門に譲渡され、明治13年に鹿島屋から安藤由松へ所有が移った後、同33年に岡田正造が酒蔵を取得している。つまり、松屋と兵衛→鹿島屋清右衛門（清太郎）→安藤由松→岡田正造の変遷である。延宝2年（1674）の酒蔵創建時の所有者が松屋であったかどうかについては、今のところ確実な史料の裏付けがないが、松屋が酒蔵創建以前の寛文5年（1665）に既に酒造家として名が見えること、解体修理時に「松屋」と墨書された根石が発見されたことからその可能性が高いと考えられる。また、今回の調査でⅢ区の礎石建物1から出土した根石（図版6-2）に記された「鹿し清」銘が鹿島屋清右衛門の略称とみられることから、その建築年代は鹿島屋の所有に移った享保14年（1729）以降ということになるが、調査結果と齟齬は生じない。

### 調査範囲と旧岡田家酒蔵との関係

操業時の酒蔵建物配置図（第6図）をみると、広大な敷地の中に多くの関連施設や酒蔵所有者の住宅が建ち並んでいた。このうち調査範囲は、重要文化財旧岡田家酒蔵（店舗、洗い場・釜屋、酒蔵）東側にあった同酒蔵の関連施設（白屋、倉庫、宿舍）および住宅（酒蔵所有者の岡田利兵衛家居宅）の位



第87図 「大正4年伊丹町地籍図」(部分)  
(伊丹市立博物館所蔵 山村敏之文書)

置(第8図)にあたる。しかし、第6図に示した酒蔵建物の配置は、岡田利兵衛氏の居宅を含めたもので、岡田家が酒蔵を取得した明治33年以後の姿である。それ以前の酒蔵の規模を示すような資料がないが、天保15年(1844)「伊丹郷町分間絵図」(第4図)によれば、光明寺の南側にある変形したL字形の敷地に描かれている。この敷地は大正4年の伊丹町地籍図(第87図)とほぼ一致しているので参照すると、天保15年当時の酒蔵の範囲は地籍図の193-2番地(2反2畝15歩)にほぼ該当することがわかった。また、発掘調査を行った194番地、193-1番地の土地は天保15年当時には旧岡田家酒蔵と直接関係がないことになる。

#### 194番地の土地と稲寺屋次良三郎、鹿島屋(岡田)利兵衛との関係

194番地の土地については、酒蔵の所有者である岡田利兵衛氏の居宅が建っていた。この建物は昭和60年に解体されたが、「伊丹市史」によれば幕末に近い時期の建築(註3)であったという。この194番地に関係する土地の譲り状が「岡田利兵衛文書」に存在することが指摘されている(註4)。その譲り状は、享保11年(1726)に鹿島屋(岡田)利兵衛が稲寺屋次良三郎から購入した時のもので、土地は「表口七間裏行十八間」、「四畝拾歩」の規模である。194番地の土地は、今調査のⅠ区南端からⅡ区・Ⅲ区の北端辺りに位置する。検出した遺構をみると、第1遺構面(第10図)では石組み溝の溝6・溝7と溝8の間、第3遺構面(第12図)では溝11と溝12の間が、譲り状の表口(間口)7間(12.7m)とほぼ一致するので、南北を溝に限られたこの範囲が稲寺屋から岡田利兵衛に売却された土地と考えられる。

稲寺屋次良三郎は、江戸前期から酒造を営む伊丹郷町有数の酒道家で、銘酒「剣菱」の醸造元である。稲寺屋がいつ頃からの194番地の土地を所有していたか不明であるが、第2遺構面(18世紀前半)の白屋1と第3遺構面(17世紀前半～後半)の酒造用竈(竈28・29)などの酒造遺構が稲寺屋に関係する可能性がある。また、第1遺構面(18世紀後半～19世紀後半)の6基の小規模な竈(竈16～21)は時期的にみて岡田利兵衛家居宅の付属遺構と判断される。

#### おわりに

発掘調査を行った昭和63年当時は、この発掘調査と並行して民間の共同住宅建設に伴う発掘調査や伊丹市が行っていた再開発事業に伴う発掘調査が目白押しの状態であった。少ない専門職員での対応には限界があったが、そこをアルバイトの手配から発掘調査の指導までしていただいたのが大阪経済法科大学の村川行弘先生(現名誉教授)であった。早くに序文を頂戴しながら報告書の刊行が遅れたことを申し訳なく思うとともに、この間の学恩に感謝申し上げたい。

註1.「旧岡田家住宅・酒蔵調査報告書」伊丹市教育委員会 1990年

註2.「重要文化財 旧岡田家住宅保存修理工事報告書(災害復旧)」伊丹市 1999年

註3.「伊丹市史」第6巻 伊丹市役所 1970年

註4. 和島恭仁雄「古文書からみた旧岡田家住宅」『地域研究いたみ』第24号 伊丹市立博物館 1995年

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
溝6	第15図-1 図版23-1	皿	軟質施 釉陶器	口径 11.1 cm 器高 2.6 cm 底径 4.2 cm	ロク口成形 内面塗り土を施す 底部糸切り痕 有り 口縁につまみりヶ所残存 底部周辺ヘラ ケズリ	85% 口縁部煤付着 見込みに付着物有り
	第15図-2 図版23-2	染付皿	白磁	口径(13.1)cm 器高 3.8 cm 高台径 4.9 cm	内面二重斜格子文 見込み二重周縁有り 見込み 蛇の目縁周ぎ 重ね焼き痕有り 高台内施釉 量 付露胎	肥前 50% 内外面貫入
	第15図-3 図版23-3	染付碗	白磁	口径(10.5)cm 器高 5.9 cm 高台径 4.7 cm	外面花唐草文 高台内周縁有り 高台量付露 胎 重ね砂付着	肥前 25%
溝7	第15図-4	青花碗	白磁	高台径(5.5)cm	見込み草花文を周縁で囲む 高台量付露胎	中国 10%
竈 12-13-14	第17図-5	天目碗	陶器	口径(12.6)cm 器高 6.3 cm 高台径 4.0 cm	鉄釉 閉り出し内反り高台 高台周辺に鉄釉を 施す	瀬戸・美濃 30%
	第17図-6 図版23-6	小杯	白磁	口径(8.5)cm 器高 4.5 cm 高台径(3.1)cm	口縁端反り 高台内露胎	瀬戸 50%
	第17図-7 図版23-7	軒丸瓦	瓦	径 13.9 cm 周縁厚 1.8 cm 瓦当厚 1.2 cm	左巻き三巴文 珠文13個 瓦当面接合部の カキメ・キザミメ有り	瓦当部は100%
竈15	第18図-8 図版23-8	鉄絵碗	陶器	口径(10.3)cm 器高 6.4 cm 高台径 5.4 cm	口縁端反り 外面梅樹文 高台内文様有り 高台内施釉 高台露胎	京焼系(乾山写し)45%
	第18図-9 図版23-9	碗	陶器	口径(11.4)cm 器高 6.5 cm 高台径(4.8)cm	口縁輪花 灰釉 割れ高台 高台脚2ヶ所残 存 高台内「明石」の刻印有り 高台露胎	明石 45%
	第18図-10 図版23-10	碗	陶器	口径 14.9 cm 器高 9.8 cm 高台径 6.5 cm	口縁輪花3ヶ所切り込み有り 灰釉の上から 長石釉流し掛け 割れ高台 外面底部内「明 石」と高台量付に刻印 高台周辺露胎	明石 85%
	第18図-11 図版23-11	碗	陶器	口径 14.5 cm 器高 9.5 cm 高台径 7.2 cm	口縁槽円形 外面塗り土 その上から内外面鉄釉 内外面口縁部から灰釉掛け流す 割れ高台 高 台内「明石」の刻印有り 高台量付に刻印有り	明石 75%
	第18図-12 図版23-12	碗	陶器	口径 13.8 cm 器高 8.7 cm 高台径 6.0 cm	内外面象嵌と染付によって文様を施す 外面鶴 文 内面連続丸文 見込み文様と周縁有り 高台量付に刻印有り 高台量付露胎	京焼系 95%内外面貫入
	第18図-13 図版23-13	碗	陶器	口径(11.0)cm 器高 10.2 cm 高台径(8.3)cm	ロク口成形 筒形 灰釉 高台内「桑」の刻印 有り	京焼系(兼焼享し) 45% 内外面貫入 二次焼成受ける
	第18図-14 図版23-14	皿	陶器	口径 11.1 cm 器高 1.7 cm 高台径 6.4 cm	八角堂形 透明釉(全釉) 尖閣部分切り込み 有り 上面如意頭文 上面重ね焼き痕有り	関西系 98%
	第18図-15 図版23-15	皿	陶器	口径 6.0 cm 器高 1.3 cm 底径 2.2 cm	灰釉 外面口縁部から下露胎	京焼系 99% 内面貫入 口縁部煤付着
	第18図-16 図版23-16	蓋	陶器	口径 10.9 cm 器高 2.6 cm	灰釉 つまみ有り 外面露胎	京焼系 90% 内面貫入
	第18図-17 図版23-17	蓋	陶器	口径 8.1 cm 器高 1.5 cm	灰釉 下面露胎	京焼系 100% 上面貫 入
	第18図-18 図版24-18	蓋	陶器	口径 9.9 cm 器高 4.0 cm	ロク口成形 つまみ貼り付け 下面ナデと回転 ヘラケズリ	備前 100% (矢筈口水指の蓋か)
	第18図-19 図版23-19	蓋	陶器	口径 16.1 cm 器高 3.5 cm つまみ径 4.4 cm	灰釉 外面体部上半沈線螺旋状に4集めぐる 口縁部露胎	京焼系 50% 内外面貫入
第18図-20 図版23-20	線香立て	陶器	口径(2.7)cm 器高 9.8 cm 高台径 4.0 cm	鉄釉 竹形 内面口縁部から下、高台露胎	京焼系 85% 高台内露着有り	

表2 遺物観察表(1)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・現存率・年代等
電15	第18回-21 図版24-21	ミニチュア製品 軟質施 釉陶器	長さ 7.2 cm 最大幅 4.9 cm 厚み 0.3 cm	ままごと道具(甕) 裏部分側面柿釉 焚口部 分側面柿釉 上面ナデ 下面軽いヨコナデ	70%	
	第19回-22 図版24-22	壺	陶器	口径 7.8 cm 器高 12.5 cm 底径 5.8 cm	外面に塗り土を施す 外面体部縦方向の沈線 外面体部上面1条の沈線で区画し、×印を刻む 内面露胎	備前 45%
	第19回-23 図版24-23	楕木鉢	陶器	口径 13.3 cm 器高 9.8 cm 高台径 8.1 cm	口口成形 底部中央に孔有り	丹波 90%
	第19回-24 図版24-24	花器	陶器	口径(11.6)cm 器高 21.3 cm 底径 8.5 cm	内外面塗り土を施す 耳、もしくは把手のハクリ痕 有り 内面底部に「㊦」の刻印有り	備前か 80% 内外面 に自然釉掛かる
	第19回-25 図版24-25	壺	陶器	口径 23.2 cm 器高 41.7 cm 底径 18.3 cm	内外面塗り土 外面肩部3条の沈線と1条の波線 外面体部下半一条の沈線(3周する) 内面体部格 子目タキの後ナデ 内面底部格子目タキ痕有り	肥前 95%
	第19回-26 図版24-26	青花鉢	白磁	口径 14.9 cm 器高 7.1 cm 高台径 7.3 cm	口縁輪花で細入り 口縁部兵須を施す 内外 面、見込み仙芝祝寿文 高台内銘と二重圓線 有り 高台畳付露胎	中国 50% 焼き継ぎ痕 有り 高台内朱文字有り
	第19回-27 図版24-27	染付碗	白磁	口径 10.6 cm 器高 6.0 cm 高台径(4.0)cm	口縁端反り 外面松竹文 内面口縁部雷文 内面体部下半圓線有り 見込み「寿」字か 高 台畳付露胎	瀬戸・美濃か 70%
	第19回-28 図版24-28	染付碗	白磁	口径 10.9 cm 器高 6.2 cm 高台径 4.4 cm	口縁端反り 外面山水文 内外面口縁部如意 頭文と團線有り 見込み岩波文と二重圓線有り 高台内銘有り 高台畳付露胎	瀬戸・美濃 95%
	第19回-29	染付碗	白磁	口径(10.0)cm 器高 5.0 cm 高台径 4.4 cm	口縁端反り 内外面口縁部波文有り 外面体部 6区画に草花文 見込み花文と二重圓線 高台 内「宝徳年製」銘と二重圓線 高台畳付露胎	60%
	第19回-30	染付皿	白磁	高台径 5.4 cm	口縁輪花 口縁口筋 外面葡萄文 内面体 部8区画に草花文 見込み鱧と龍文 高台畳 付露胎	70%
	第19回-31 図版24-31	染付小碗	白磁	口径 8.1 cm 器高 4.4 cm 高台径(3.1)cm	外面草花文 高台畳付露胎	肥前 50%
	第19回-32 図版24-32	碗	白磁	口径(8.3)cm 器高 4.2 cm 高台径(3.4)cm	口縁端反り 外面瑠璃釉 内面、高台内白磁 釉 高台畳付露胎	肥前 30%
	第19回-33 図版24-33	染付碗	白磁	口径(8.1)cm 器高 4.7 cm 高台径 3.1 cm	蕃葡底 外面刻先文 高台畳付露胎 高台 内「大明高徳年製」銘有り	70%
	第19回-34 図版24-34	色絵皿	白磁	口径(13.9)cm 器高 4.5 cm 高台径 5.2 cm	外面口筋 外面赤玉瑠璃文 内面体部下半 陽刻で如意頭文 見込み唐子文と陽刻文有り 高台畳付露胎	肥前 50%
	第19回-35 図版24-35	染付皿	白磁	口径 8.0 cm 器高 2.5 cm 高台径 3.8 cm	方形 型押し成形 内面体部唐草文 見込 み蝶文 高台畳付露胎	瀬戸 90%
	第19回-36 図版24-36	染付小杯	白磁	口径(5.4)cm 器高 3.8 cm 高台径(3.0)cm	口縁端反り 外面山水文 内面口縁部二重圓 線有り 見込み山水文と團線有り 高台内「○ ○年玩」銘と團線有り 高台畳付露胎	肥前 45%
	第19回-37 図版24-37	小杯	白磁	口径(7.1)cm 器高 2.9 cm 高台径 2.6 cm	口縁端反り 高台畳付露胎	肥前 65%
	第19回-38 図版24-38	ミニチュア製品 軟質施 釉陶器	長さ(5.1)cm 器高 1.7 cm 高台径 4.6 cm	ままごと道具(段重) 外面緑釉と赤色で花文高 台周辺、高台内露胎	50%	
	第19回-39 図版24-39	ミニチュア製品 陶器	口径(3.9)cm 器高 2.8 cm 高台径 1.8 cm	ままごと道具(碗) 口縁端反り 灰釉 高台 周辺露胎	京焼系 50% 内外面 費入	
	電16-21	第22回-40 図版24-40	染付皿	白磁	口径 10.0 cm 器高 2.6 cm 高台径 5.7 cm	外面唐草文 内面紅葉流水文 高台内銘と團 線有り 高台畳付露胎 離れ砂付

表3 遺物観察表(2)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
電16~21	第22図-41 図版25-41	染付蓋物蓋	白磁	口径(11.3)cm 器高 3.3cm	外面花文 つまみ(鬘斗形)を貼り付け 口縁部露胎	肥前 60%
	第22図-42 図版25-42	染付蓋物	白磁	口径(9.9)cm 器高 9.1cm 高台径 6.1cm	外面コンニャク印判菊文と文様有り 内面口縁部、高台量付露胎	肥前 70%
土坑2	第23図-43	碗	陶器	口径(11.6)cm 器高 6.8cm 高台径 5.0cm	灰釉 高台周辺露胎	唐津 45% 内外面貫入
	第23図-44	碗	陶器	口径(11.1)cm 器高 6.0cm 高台径(6.3)cm	灰釉 高台周辺露胎	唐津 30% 二次焼成受ける
	第23図-45 図版25-45	碗	陶器	口径 10.8cm 器高 7.2cm 高台径 5.3cm	口縁輪花 灰釉 口縁3ヶ所切り込み有り 割れ高台 高台内「明石」の刻印有り 高台露胎	明石 90%
	第23図-46 図版25-46	鉄絵碗	陶器	口径(10.8)cm 器高 6.1cm 高台径(5.3)cm	口縁端反り 外面梅樹文 高台内銘有り 高台内施釉 高台露胎	京焼系(乾山写し) 45%
	第23図-47	碗	陶器	口径(11.2)cm	筒形 灰釉 外面体部に4本の沈線をめぐるし、一部体部を削り落としている	京焼系 5% 内外面貫入
	第23図-48 図版25-48	碗	陶器	口径 9.0cm 器高 4.9cm 高台径 3.1cm	外面若松文 高台周辺露胎	京焼系 90% 内外面貫入
	第23図-49 図版25-49	染付碗	陶胎	口径 8.6cm 器高 5.0cm 高台径 3.8cm	外面八人の賢人文 内面仙人を描く 高台量付露胎	三田 95%
	第23図-50 図版25-50	皿	陶器	口径 6.1cm 器高 1.3cm 底径 2.4cm	灰釉 外面体部から底部露胎	京焼系 98% 内面貫入 口縁部煤付着
	第23図-51 図版25-51	蓋	陶器	口径 15.4cm 器高 4.9cm	内面体部灰釉 つまみ貼り付け 外面つまみ周辺鉄釉で花文を施す	京焼系 98% 内面貫入
	第23図-52 図版25-52	蓋	陶器	口径 16.0cm 器高 5.1cm つまみ径 5.5cm	内面体部透明釉 外面鉄釉で横線文 外面イッチン描きによる松文 線の間の露胎部分にトビガンナを施す 内外面口縁部、つまみ内露胎	京焼系 98%
	第23図-53 図版25-53	蓋	陶器	口径 16.0cm 器高 4.1cm つまみ径 4.0cm	灰釉 口縁部、つまみ量付露胎	京焼系 95% 内外面貫入
	第23図-54 図版25-54	カンテラ	陶器	口径 5.0cm 器高 4.1cm 高台径 4.9cm	灰釉 口縁端部、高台周辺露胎 蓋:灰釉 外面下半、内面露胎	京焼系 80% 内外面貫入
	第23図-55 図版25-55	カンテラ	陶器	口径 6.6cm 器高 4.5cm 高台径 6.7cm	灰釉 外面口縁部、高台周辺露胎 蓋:灰釉 外面下半、内面露胎	京焼系 85% 内外面貫入
	第23図-56 図版25-56	小杯	白磁	口径 7.8cm 器高 3.5cm 高台径 3.1cm	口縁端反り 高台量付露胎	肥前 95%
	第23図-57 図版25-57	赤絵小杯	白磁	口径 6.8cm 器高 3.2cm 高台径 2.9cm	口縁端反り 外面菊花文 高台量付露胎	肥前 90%
	第23図-58 図版25-58	赤絵碗	白磁	口径(9.0)cm 器高 4.5cm 高台径 3.2cm	外面風景文 内面口縁部圍縁有り 見込み文様有り 高台量付露胎	肥前 55% 焼き継ぎ痕有り 高台内朱文字有り
	第23図-59 図版25-59	小碗	白磁	口径 8.7cm 器高 4.5cm 高台径 3.2cm	口縁端反り 外面瑠璃釉 高台内、内面白磁釉 高台量付露胎	肥前 99% 焼き継ぎ痕有り 高台内朱文字有り
	第23図-60 図版25-60	染付碗	白磁	口径 10.0cm 器高 5.6cm 高台径 4.0cm	口縁端反り 外面福祿寿字文と字の間に6つに区画した花文 内面口縁部具須を施す 見込み岩波文と二重圍縁有り 高台量付露胎	瀬戸 99%

表4 遺物観察表(3)



遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等	
土坑2	第23図-61 図版25-61	染付小杯	白磁	口径 6.4 cm 器高 4.6 cm 高台径 3.2 cm	口縁端反り 口縁口錆 外面竹文、草花文、漢詩有り 高台内銘有り 高台量付露胎	関西系 99%	
	第23図-62 図版25-62	染付小杯	白磁	口径 5.6 cm 器高 4.1 cm 高台径 2.6 cm	口縁端反り 内外面草花文 見込み鳥文 高台内「宣明年製」銘有り 高台量付露胎	関西系 90%	
	第23図-63 図版26-63	染付角皿	白磁	口径 8.2 cm 器高 2.4 cm 高台径 3.6 cm	型押し成形 内面体部花唐草文 見込み横文 高台量付露胎	瀬戸 95%	
	第22図-64 図版26-64	小皿	白磁	口径 9.1 cm 器高 2.3 cm 高台径 5.3 cm	型押し成形 瑠璃釉 口縁口錆 高台量付露胎	肥前 80%	
	第23図-65 図版26-65	青花小皿	白磁	口径 8.8 cm 器高 2.8 cm 高台径 4.1 cm	外面花文 内面人物山水文 内面口縁部二重圈線有り 高台内銘有り 高台量付露胎	中国 90% 焼き継ぎ痕有り 高台内朱文字有り	
	第24図-66 図版26-66	染付皿	白磁	口径 11.2 cm 器高 2.4 cm 高台径 5.6 cm	口縁端反り 外面横文 内面花蝶文 高台内銘有り 高台量付露胎	肥前 90% 焼き継ぎ痕有り 高台内朱文字有り	
	第24図-67 図版26-67	染付碗蓋	白磁	口径 9.4 cm 器高 2.9 cm つまみ径 3.6 cm	外面口縁部墨弾き如意頭文と風景文 内面口縁部墨弾き如意頭文と圈線 見込み岩波文と二重圈線有り つまみ内銘有り つまみ量付露胎	瀬戸 85%	
	第24図-68 図版26-68	青花碗蓋	白磁	口径 8.6 cm 器高 3.1 cm つまみ径 3.5 cm	外面梅文と草花文 内面花文 つまみ内「道光年製」銘 つまみ量付露胎	中国 95%	
	第24図-69 図版26-69	染付蓋	陶器	口径 7.8 cm 器高 2.2 cm つまみ径 1.5 cm	外面灰釉と白色釉で掛け分け 外面白色釉部分に横文 外面体部に孔有り 口縁部、内面露胎	京焼系 95%	
	第24図-70 図版26-70	染付燗徳利	白磁	口径 3.0 cm 器高 16.0 cm 底径 5.4 cm	口縁口全 外面金と呉須で山水文と漢詩 口縁部磨口	瀬戸 75%	
	第24図-71 図版26-71	染付燗徳利	白磁	口径 3.0 cm 器高 13.6 cm 底径 4.3 cm	外面唐人物文 内外面底部、内面体部露胎 「月玉照」銘有り	肥前 85%	
	第24図-72 図版26-72	染付段重	白磁	口径 7.9 cm 器高 3.2 cm 底径 7.1 cm	外面網目文に丸文 丸文の中に人物文、花文、梅文を施す 外面体部に4本の凸線をもぐらす 口縁部、外面腰部露胎	肥前 95%	
	第24図-73 図版26-73	紅皿	白磁	口径 4.9 cm 器高 1.6 cm 高台径 1.7 cm	型押し成形 外面体部露胎	肥前 100%	
	第24図-74 図版26-74	ミニチュア製品	軟質珪 輪陶器	口径 2.8 cm 器高 4.0 cm 底径 3.2 cm	ままごと道具(土瓶) 特軸 ロク口成形 底部永切り痕有り 外面イチン掻きで文様を施す 外面体部下半から底部露胎	70%	
	第24図-75 図版26-75	ミニチュア製品	軟質珪 輪陶器	長辺 6.0 cm 短辺 4.4 cm	ままごと道具(皿) 型押し成形 特軸 内面磨刻で文様を施す 内面の一部に線軸を施す 外面体部から底部露胎 上面に把手痕有り	80%	
	土坑4	第24図-76 図版26-76	皿	青磁	口径(15.4) cm 器高 3.2 cm 高台径(8.7) cm	口縁口錆 内面体部除刻で如意頭文 蛇の目 凹型高台 蛇の目軸割き部分に鉄軸を施す	肥前 15%
	土坑18	第24図-77 図版26-77	灯明皿	陶器	口径 6.0 cm 器高 1.1 cm 底径 2.1 cm	灰釉 外面口縁部下から底部露胎	京焼系 100% 内外面貫入 口縁部保付蓋
		第24図-78 図版26-78	土鍋	陶器	口径 14.2 cm 器高 4.2 cm 底径 4.6 cm	灰釉 把手1ヶ所残存 脚2ヶ所残存 口縁端部、蓋受部分、外面体部下半露胎	京焼系 80% 内外面貫入 外面体部下半保付している
	土坑35	第24図-79	染付碗	白磁	口径(10.8) cm 器高 6.3 cm 高台径 5.5 cm	口縁端反り 外面草花文と花流水文 高台内「宣明年製」銘と二重圈線有り 高台量付露胎	肥前 50%
	土坑164	第24図-80 図版26-80	甕	陶器	口径(36.9) cm 器高 24.8 cm 底径 26.9 cm	外面灰釉 内面鉄釉 内面底部放射状に7ヶ所釉を剥ぐ 口縁部、底部貼り付け 底部周辺露胎	40% 内面に白色付着物有り

表5 遺物観察表(4)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑164	第24図-81 図版26-81	染付碗	白磁	口径(11.1)cm 器高 4.8cm 高台径(4.7)cm	外面丸文 内面体部下重線有り 見込み蛇の目軸割ぎ アルミナ砂塗布 重ね焼き痕有り 高台量付露胎 離れ砂付蓋	肥前 40%
	第24図-82 図版26-82	染付碗	白磁	口径(9.0)cm 器高 5.0cm 高台径(4.6)cm	外面鉄軸 高台内、内面白磁釉 外面トビガンナ 内面山水文と二重線有り 高台量付露胎	30%
	第24図-83 図版26-83	染付小碗	白磁	口径(8.3)cm 器高 4.7cm 高台径(3.0)cm	外面宝文(スタンプ) 高台量付露胎	25%
	第24図-84 図版26-84	染付小杯	白磁	口径(6.2)cm 器高 5.7cm 高台径(4.3)cm	口縁端反り 外面口縁部文様有り 外面体部下半遠弁文の中に文字有り 高台量付露胎	関西系か 50% 外面体部下半は推定12角形を成す
土坑268	第25図-85 図版27-85	土師皿	素焼き	口径 7.2cm 器高 1.7cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	
	第25図-86 図版27-86	土師皿	素焼き	口径(7.0)cm 器高 1.4cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 25% 外面煤付着
	第25図-87 図版27-87	受皿	軟質施釉陶器	口径(9.2)cm 器高 1.7cm	特軸 ロク口成形 底部糸切り痕有り 外面底部露胎	20%
	第25図-88 図版27-88	受台	陶器	口径 7.3cm 器高 3.8cm 底径 3.6cm	鉄軸 ロク口成形 底部糸切り痕有り 内外面口縁部白色釉掛かる 外面体部下半から底部露胎	85%
	第25図-89 図版27-89	摺鉢	陶器	口径(37.6)cm	クシ目一単位7本	堺・明石 10%
	第25図-90 図版27-90	染付碗	青磁	口径 11.2cm 器高 5.8cm 高台径 4.6cm	外面青磁釉 内面、高台内白磁釉 内面口縁部四方禪文 見込み文様と二重線有り 高台内二重方形枠の溝掘り有り 高台量付露胎	肥前 85%
	第25図-91	染付碗	青磁	口径(11.3)cm 器高 6.4cm 高台径 4.4cm	外面青磁釉 内面、高台内白磁釉 内面口縁部四方禪文 見込み手描き五弁花と二重線高台内二重方形枠の溝掘り 高台内露胎 離れ砂付蓋	肥前 60% 内外面貫入
	第25図-92	染付碗	白磁	口径(11.9)cm	外面コンニャク印判菊文と染付丸文を併用 内面口縁部四方禪文 見込み二重線有り 高台内露胎有り	肥前 35%
	第25図-93	碗	白磁	口径(8.6)cm 器高 5.6cm 高台径 3.9cm	高台量付露胎	肥前 55%
	第25図-94 図版27-94	染付皿	白磁	口径(12.1)cm 器高 3.4cm 高台径 3.8cm	内面体部二重斜格子文 見込み蛇の目軸割ぎ 高台量付露胎	肥前 85%
	第25図-95 図版27-95	皿	白磁	口径 9.1cm 器高 2.7cm 高台径 3.9cm	見込み蛇の目軸割ぎ 高台周辺露胎	肥前 70%
	第25図-96 図版27-96	碗蓋	白磁	口径(9.4)cm 器高 3.1cm 高台径 3.3cm	つまみ量付露胎 離れ砂付蓋	肥前 50%
	第25図-97 図版27-97	仏飯具	青磁	口径(7.6)cm 器高 4.8cm 底径 3.9cm	青磁釉 底部露胎	肥前 75%
	第25図-98 図版27-98	紅皿	白磁	口径(4.7)cm 器高 1.4cm 高台径 1.4cm	型押し成形 外面口縁部より下露胎	肥前 100%
	第25図-99	紅皿	白磁	口径 4.6cm 器高 1.7cm 高台径 1.5cm	型押し成形 外面口縁部より下露胎	肥前 50%
	第25図-100 図版27-100	染付碗蓋	白磁	口径 10.2cm 器高 2.6cm つまみ径 4.0cm	外面草花文 内面口縁部四方禪文 見込みコンニャク印判五弁花と重線有り つまみ量付露胎 離れ砂付蓋	肥前 80%

表6 遺物観察表(5)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑268	第25図-101 図版27-101	染付襷蓋	白磁	口径 10.0 cm 器高 2.8 cm つまみ径 4.2 cm	外面竹文 内面口縁部四方博文 見込みコンニャク印判五弁花と二重園線有り つまみ畳付露胎	肥前 90%
	第25図-102 図版27-102	軒丸瓦	瓦	径 14.4 cm 周縁厚 2.2 cm 瓦当厚 1.7 cm	左巻き三巴文 珠文15個	瓦当部 100% 瓦当部 銀化現象
土坑950	第26図-103 図版27-103	灯明皿	陶器	口径(12.0)cm 器高 2.6 cm 底径 (4.2)cm	灰釉 見込み3条の平行クシ目有り 見込み目跡2ヶ所残存 外面口縁部から下露胎	京焼系 50% 内外面貫入 口縁部煤付着
	第26図-104	皿	陶器	口径(19.5)cm 器高 6.4 cm 高台径 7.8 cm	鉄釉 内外面巻刷毛目 見込み蛇の目輪割ぎ 高台周辺露胎	肥前系 80%
	第26図-105 図版27-105	土鍋	陶器	口径(15.1)cm 器高 7.3 cm 高台径 (7.3)cm	灰釉 外面体部白色釉で刷毛目風に施す 把手1ヶ所残存 脚1ヶ所残存 外面体部下半から高台、内面受部周辺露胎	京焼系 35% 外面体部下半煤けている
	第26図-106 図版27-106	壺	陶器	口径 11.7 cm 器高 5.1 cm つまみ径 4.2 cm	灰釉 外面白色釉で巻刷毛目 その上に黒色釉で文様を描く 内面灰釉 つまみ2ヶ所切り込みを入れる 口縁部露胎	京焼系 90%
	第26図-107 図版27-107	おろし板	陶器	長さ 13.5 cm 幅 8.5 cm 厚み 0.6 cm	板作り成形 塵取り形 側部貼り付け 表面粗い爪刺を起こす 指目部分灰釉を施す 持ち手部分孔有り	京焼系 90% 施釉部分の一部貫入 和泉音羽焼に類有り
	第26図-108	合子	陶器	口径(9.4)cm 器高 5.7 cm 底径 6.8 cm	灰釉 口縁部、外面底部露胎	京焼系 70%
	第26図-109 図版27-109	瓶	陶器	口径(12.0)cm 底径 3.6 cm	外面肩部から白色釉を掛け、透明釉を施す 白色釉部分掻き痕有り 底部露胎 離れ砂付着	60%
	第26図-110 図版27-110	染付碗	白磁	口径(12.0)cm	広東形か 外面草花文 内面口縁部二重園線有り 見込み墨線有り	肥前 35%
	第26図-111 図版27-111	染付碗	白磁	口径 10.5 cm 器高 5.3 cm 高台径 3.9 cm	外面二重網目文 高台畳付露胎 離れ砂付着	肥前 98%
	第26図-112 図版27-112	染付碗	白磁	口径(11.6)cm 器高 6.0 cm 高台径 6.7 cm	広東形 外面花唐草文 内面口縁部三重園線有り 見込み寿字文と園線有り 高台畳付露胎 離れ砂付着	肥前 40%
	第26図-113 図版28-113	染付碗	白磁	口径(11.2)cm 器高 5.5 cm 高台径 4.8 cm	外面二重格子文 内面口縁部二重園線有り 見込み斜格子文と園線、蛇の目輪割ぎ アルミナ砂塗布 重ね焼き痕有り 高台畳付露胎	肥前 50%
	第26図-114 図版28-114	染付碗	白磁	口径 11.1 cm 器高 5.6 cm 高台径 4.6 cm	口縁端反り 外面海浜風景文 見込み蛇の目輪割ぎ アルミナ砂塗布 重ね焼き痕有り 高台畳付露胎 離れ砂付着	肥前 70%
	第26図-115 図版28-115	染付碗	白磁	口径(10.6)cm 器高 5.9 cm 高台径 (4.5)cm	口縁端反り 外面花唐草文 内面口縁部三重園線有り 見込み二重園線有り 高台畳付露胎	瀬戸 30% 内外面貫入 内外面部に付着物有り
	第26図-116 図版28-116	染付碗	白磁	口径(10.6)cm 器高 5.3 cm 高台径 3.9 cm	口縁端反り 外面横線文と蝶文と丸文 内面口縁部二重園線有り 見込み園線有り 見込み蛇の目輪割ぎか 高台畳付露胎 離れ砂付着	肥前 45%
	第26図-117 図版28-117	染付碗	白磁	口径(10.6)cm 器高 5.6 cm 高台径 (4.3)cm	内外面網文様 高台畳付露胎	瀬戸 30%
	第26図-118 図版28-118	染付碗	白磁	口径 11.4 cm 器高 5.8 cm 高台径 4.5 cm	外面笹文 見込み蛇の目輪割ぎ アルミナ砂塗布 重ね焼き痕有り 高台畳付露胎	肥前 90%
第26図-119 図版28-119	染付碗	白磁	口径 11.7 cm 器高 5.1 cm 高台径 4.7 cm	外面丸文 見込み丸文と二重園線有り 見込み蛇の目輪割ぎ アルミナ砂塗布 重ね焼き痕有り 高台畳付露胎	肥前 95%	
第26図-120 図版28-120	染付小椀	白磁	口径(8.4)cm 器高 4.3 cm 高台径 3.6 cm	口縁端反り 外面寿字文と文様有り 内面口縁部良須を施す 見込み二重園線と丸文か 高台畳付露胎	瀬戸 60%	

表7 遺物観察表(6)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑950	第26図-121 図版28-121	染付皿	白磁	口径(12.2)cm 器高 3.1cm 高台径 4.4cm	内面二重斜格子文 見込み二重圏線有り 見込み蛇の目輪割ぎ アルミナ砂塗布 重ね焼き 痕有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 35%
	第26図-122 図版28-122	染付小皿	白磁	口径(8.0)cm 器高 2.2cm 高台径(3.9)cm	口縁に呉須を施す 内面二重斜格子文 高台量付露胎	瀬戸か 50%
	第26図-123 図版28-123	染付皿	白磁	高台径(8.8)cm	見込み蕉文 蛇の目凹型高台 高台量付露胎	肥前 15%
	第26図-124 図版28-124	皿	白磁	口径 10.1cm 器高 2.3cm 高台径 5.4cm	口縁端反り 見込み型押しによる寿字文 高台量付露胎	瀬戸 85%
	第26図-125 図版28-125	染付皿	白磁	口径 14.6cm 器高 4.1cm 高台径 8.8cm	外面唐草文 内面花唐草文 見込み環状松竹梅文 蛇の目凹型高台 高台内二重方形形の溝幅有り	肥前 95% 焼き継ぎ 痕有り 高台内朱文字 有り
	第26図-126 図版28-126	染付碗蓋	白磁	口径 8.3cm 器高 2.9cm 高台径 3.4cm	外面龍丸文 内面口縁部雷文 見込み鶴丸文と圏線有り 高台内縁と圏線有り つまみ量付露胎	肥前 85%
	第26図-127 図版28-127	染付碗蓋	白磁	口径(10.7)cm 器高 3.1cm つまみ径 4.5cm	外面牡丹唐草文 内面口縁部四方博文 見込み環状松竹梅文と二重圏線有り つまみ量付露胎	肥前 50%
	礎石列1	第28図-128	染付碗	白磁	口径(10.6)cm 器高 4.7cm 高台径(4.0)cm	外面松竹梅文 見込み蛇の目輪割ぎ アルミナ砂塗布 高台量付露胎 離れ砂付着
溝9	第32図-129 図版28-129	染付碗	白磁	口径(14.2)cm 器高 7.6cm 高台径 5.6cm	外面文様有り 見込みコンニャク印判五弁花と二重圏線有り 高台内「大明年製」銘と圏線有り 高台量付露胎	肥前 20%
	第32図-130 図版28-130	軒丸瓦	瓦	径 14.1cm 周縁厚 1.8cm 瓦当厚 1.3cm	左巻き三巴文 巴の尾部つながり圏線となる 珠文12個 丸瓦部分凸面ヘラナデ 凹面布目 痕有り 瓦当部雲母粉付着	60% 二次焼成受ける
	第32図-131 図版28-131	煙管	銅	火口径 1.7cm 長さ 7.1cm 接合部径 1.0cm	雁首 首部は火口部に向かって左横に合わせ目	100% 緑青付着
	第32図-132 図版28-132	煙管	銅	喉口径 0.6cm 長さ 7.0cm 接合部径 1.1cm	吸口 上面に合わせ目	100% 緑青付着 上面にへこみ有り
	第34図-133 図版28-133	土師皿	素焼き	口径(7.4)cm 器高 1.3cm	手捏ね成形 外面ナデと指頭圧痕 内面ナデ	25% 内面一部煤付着
第34図-134 図版28-134	土師皿	素焼き	口径(7.7)cm 器高 1.2cm	手捏ね成形 外面ナデと指頭圧痕 内面ナデ	20%	
第34図-135 図版28-135	摺鉢	瓦質	口径(27.9)cm	クシ目一単位10本 内外面口縁部ヨコナデ 外面ナデ(一部ヨコナデ)と指頭圧痕有り 内面ヨコナデ	15%	
第34図-136 図版29-136	染付碗	白磁	口径(9.9)cm 器高 5.3cm 高台径 3.8cm	外面コンニャク印判松文 高台内圏線と簡略化された「大明年製」銘有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 40%	
第34図-137 図版29-137	染付皿	白磁	口径(12.3)cm 器高 2.6cm 高台径(3.9)cm	内面文様有り 見込み蛇の目輪ハギ アルミナ砂塗布 高台間刃露胎	肥前 40% 二次焼成 受ける	
第34図-138 図版29-138	軒丸瓦	瓦	径 13.7cm 周縁厚 2.0cm 瓦当厚 1.6cm	左巻き三巴文 珠文13個 瓦当側接合面にカキメとキザミメ有り 瓦当部に離れ砂付着	瓦当部 99%	
第34図-139 図版29-139	軒丸瓦	瓦	径 14.9cm 周縁厚 2.0cm 瓦当厚 1.5cm	左巻き三巴文 珠文12個 瓦当側接合部にカキメとキザミメ有り	瓦当部 99% 瓦当部銀化現象	
第34図-140 図版29-140	隅丸瓦	瓦	径 7.1cm 周縁厚 1.4cm 瓦当厚 1.0cm	菊花文(花卉数8枚) 瓦当部に雲母粉付着 瓦当側接合部にカキメ有り	瓦当部 100% 二次焼成受ける	

表8 遺物観察表(7)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等	
焼土処理土坑1	第34図-141	隅丸瓦	瓦	径 7.3 cm 周縁厚 1.4 cm 瓦当厚 0.9 cm	菊花文(花卉数8枚) 瓦当部に雲母粉付着	瓦当部 97%	
	第34図-142 図版29-142	銭	銅	径 2.4 cm 厚み 0.1 cm	皇宋通寶(真書体)	100% 緑青付着が著しく判読難	
焼土処理土坑2	第34図-143 図版29-143	軒丸瓦	瓦	径 13.8 cm 周縁厚 1.8 cm 瓦当厚 1.3 cm	左巻き三巴文 巴の尾部つながり圏線となる 珠文14個 丸瓦部分凸面ヘラナデ 凹面布目 痕有り	60% 二次焼成受ける	
	第34図-144 図版29-144	軒丸瓦	瓦	径 13.9 cm 周縁厚 2.1 cm 瓦当厚 1.4 cm	左巻き三巴文 珠文13個 瓦当側接合面にカ キメとキザミメ有り 瓦当部に雲母粉付着	瓦当部 98%	
	第35図-145 図版29-145	軒丸瓦	瓦	径 14.9 cm 周縁厚 1.9 cm 瓦当厚 1.2 cm	左巻き三巴文 珠文12個 丸瓦部分凸面ヘラ ナデ 凹面布目痕有り 瓦当部に雲母粉付着	60%	
	第35図-146 図版29-146	軒丸瓦	瓦	径 14.3 cm 周縁厚 1.7 cm 瓦当厚 1.2 cm	左巻き三巴文 巴の尾部つながり圏線となる 珠文14個	瓦当部 97%	
	第35図-147 図版29-147	軒丸瓦	瓦	径 13.8 cm 周縁厚 1.9 cm 瓦当厚 1.5 cm	左巻き三巴文 珠文13個 瓦当部に雲母粉付 着	瓦当部 100%	
	第35図-148 図版29-148	軒丸瓦	瓦	径 15.0 cm 周縁厚 2.0 cm 瓦当厚 1.4 cm	左巻き三巴文 珠文12個 瓦当側接合面にカ キメとキザミメ有り	瓦当部 98% 瓦当部 表面銀化現象	
	第35図-149 図版29-149	軒平瓦	瓦	瓦当高 4.4 cm 周縁厚 1.8 cm	均整唐草文 瓦当内縁すべて面取り	40% 瓦当部表面銀化 現象 二次焼成受ける	
	第35図-150 図版29-150	軒平瓦	瓦	瓦当高 4.1 cm 周縁厚 1.8 cm	均整唐草文 瓦当内縁・上端部面取り	20% 二次焼成受ける	
	第35図-151 図版29-151	軒平瓦	瓦	瓦当高 4.1 cm 周縁厚 1.4 cm	均整唐草文 瓦当外縁・上端部面取り	20%	
	第35図-152 図版29-152	軒平瓦	瓦	瓦当高 3.8 cm 周縁厚 1.7 cm	均整唐草文	20%	
	第36図-153 図版29-153	隅丸瓦	瓦	径 6.9 cm 周縁厚 1.4 cm 瓦当厚 0.9 cm	菊花文(花卉数8枚) 瓦当部に雲母粉付着	60% 二次焼成受ける	
	第36図-154 図版29-154	隅丸瓦	瓦	径 7.1 cm 周縁厚 1.5 cm 瓦当厚 0.9 cm	菊花文(花卉数8枚) 瓦当部に雲母粉付着	50%	
	焼土処理土坑5	第36図-155 図版29-155	皿	陶器	口径 11.0 cm 器高 2.0 cm 高台径 6.2 cm	灰釉 高台内輪トチ痕有り 高台量付露胎	瀬戸・美濃 100%
		第36図-156 図版29-156	皿	陶器	口径 11.6 cm 器高 3.7 cm 高台径 4.3 cm	灰釉 見込み蛇の目輪割ぎ 高台周辺露胎	肥前 90%
第36図-157 図版29-157		軒丸瓦	瓦	径 14.3 cm 周縁厚 1.7 cm 瓦当厚 1.3 cm	左巻き三巴文 残存珠文数9個 瓦当側接合 面にカキメとキザミメ有り	瓦当部 60%	
第36図-158 図版30-158		軒平瓦	瓦	瓦当厚 3.9 cm 周縁厚 1.6 cm	均整唐草文 瓦当部に雲母粉付着	15%	
第36図-159 図版30-159		隅丸瓦	瓦	径 7.1 cm 周縁厚 1.2 cm 瓦当厚 0.8 cm	菊花文(花卉数8枚) 瓦当部に雲母粉付着	70% 二次焼成受ける	
焼土処理土坑6	第36図-160	染付碗	白磁	口径(10.4)cm	外面草花文	肥前 10%	

表9 遺物観察表(8)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
脱土地 埋土坑8	第36図-161 図版30-161	隅丸瓦	瓦	径 7.1 cm 周縁厚 1.7 cm 瓦当厚 1.0 cm	菊花文(花卉数8枚) 瓦当部に雲母粉付着	70% 二次焼成受ける
	第36図-162 図版30-162	軒丸瓦	瓦	径 13.9 cm 周縁厚 1.6 cm 瓦当厚 1.2 cm	左巻き三巴文 珠文13個 瓦当側接合面にキメとキザミメ有り 瓦当部に雲母粉付着	瓦当部 100%
	第36図-163 図版30-163	軒丸瓦	瓦	周縁厚 2.3 cm 瓦当厚 1.5 cm	右巻き三巴文 巴の尾部つながり圏線となる 残存珠文数9個	瓦当部 80% 二次焼成受ける
脱土地 埋土坑8	第36図-164 図版30-164	軒平瓦	瓦	瓦当高 3.6 cm 周縁厚 1.5 cm	均整唐草文 瓦当貼り付け式段額	瓦当部 80%
	第36図-165 図版30-165	軒平瓦	瓦	瓦当高 4.1 cm 周縁厚 1.8 cm	均整唐草文 瓦当部に雲母粉付着	瓦当部 50%
	第37図-166 図版30-166	軒丸瓦	瓦	径 16.9 cm 周縁厚 2.1 cm 瓦当厚 1.5 cm	左巻き三巴文 巴の尾部つながり圏線となる 珠文15個 丸瓦部分凸面ヘラナデ 凹面布目 痕の上からナデ	65% 二次焼成受ける
土坑75	第38図-167 図版30-167	始磨	素焼き	口径 27.6 cm 器高 7.6 cm	底部外型成形 外面体部ナデ(指頸圧復焼) 外 面口縁部から内面体部ココナデ 口縁部の2ヶ所に2 つ孔有り(片方は内側、もう片方は外側より貫通せず)	75% 内外面雲母粉付着 外面煤けている
	第38図-168 図版30-168	鉢	青磁	高台径 (9.5) cm	内面除刻で文様を施す 蛇の目凹型高台 輪 割ぎ部分に鉄漿を施す 重ね焼き痕有り	肥前 5% 内外面貫入
	第38図-169 図版30-169	銭	銅	径 2.5 cm 厚み 0.1 cm	寛永通寶	99% 緑青付着が著しく判読難
土坑78	第38図-170 図版30-170	軒平瓦	瓦	上依幅 24.5 cm 瓦当高 3.9 cm 周縁厚 1.9 cm	均整唐草文	65%
	第38図-171 図版30-171	軒丸瓦	瓦	周縁厚 1.7 cm 瓦当厚 1.6 cm	左巻き三巴文 珠文14個 瓦当側接合面にキメ有り	瓦当部 80% 二次焼成受ける
土坑112	第38図-172 図版30-172	蓋	陶器	口径 (15.4) cm 器高 3.4 cm	手捏ね成形 灰胎 つまみ貼り付け	35%
	第38図-173 図版30-173	銭	銅	径 2.4 cm 厚み 0.1 cm	寛永通寶	100% 緑青付着が著しく判読難
土坑133	第39図-174 図版30-174	煙管	銅	吸口径 0.6 cm 長さ 6.8 cm 接合部径 1.0 cm	吸口 上面に含ませ目	100% 緑青付着 上面吸口際 と下面左側にへこみ有り
土坑182	第39図-175 図版30-175	碗	白磁	口径 (8.8) cm 器高 6.0 cm 高台径 (5.1) cm	高台疊付露胎	肥前 15% 内外面貫入
	第39図-176 図版30-176	色絵碗	白磁	高台径 (4.7) cm	外面文様有り 高台疊付露胎	肥前 20% 内外面貫入
	第39図-177 図版30-177	軒丸瓦	瓦	径 14.0 cm 周縁厚 1.8 cm 瓦当厚 1.1 cm	左巻き三巴文 三巴文の周りに圏線めぐる 珠 文16個 丸瓦部中央に釘穴有り 丸瓦部凸面 ヘラナデ 凹面に布目痕有り	45%
	第39図-178 図版30-178	軒平瓦	瓦	瓦当高 3.9 cm 周縁厚 1.4 cm	均整唐草文 額貼り付け式段額か	70% 二次焼成受ける
	第39図-179 図版30-179	軒平瓦	瓦	瓦当高 3.7 cm 周縁厚 1.3 cm	均整唐草文 額貼り付け式段額	10%
	第39図-180 図版31-180	軒平瓦	瓦	瓦当高 3.9 cm 周縁厚 1.7 cm	均整唐草文	15%

表10 遺物観察表(9)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
第3遺構 面上層	第42図-181 図版31-181	板碑	花崗岩	高さ 43.0 cm 幅 24.5 cm 厚み 13.0 cm	彫りこぼれた輪郭の内側の下縁に蓮華座を刻み出す 銘文等は不明	90%
	第42図-182 図版31-182	無縫塔	花崗岩	高さ 9.0 cm 幅 26.4 cm	単製の基礎部	30%
	第42図-183 図版31-183	一石五輪塔	砂岩	幅 15.9 cm	正面「口律師(結)口/アー 二月口/文安三年」、右面「ア」、左面「アン」、背面「アク」と記す	20% 地輪のみ
	第42図-184 図版31-184	大皿	陶器	口径 21.4 cm 器高 3.6 cm 高台径 11.1 cm	黄瀬戸 口縁折れ縁 灰釉 内面体部に1条の沈線めぐる 内面に緑釉で文様描く 見込み3ヶ所釉を拭き取った跡有り 外面体部下半露胎	瀬戸・美濃 85%
溝11	第46図-185 図版31-185	皿	陶器	高台径 4.8 cm	灰釉 見込み砂目4ヶ所有り 外面体部下半露胎	唐津 30%
	第46図-186 図版31-186	碗	陶器	高台径 5.3 cm	灰釉 高台周辺露胎	肥前 20% 内外面貫入
	第46図-187 図版31-187	染付碗	白磁	高台径 (5.3) cm	施影錆 外面福字文 高台壘付露胎	肥前 10%
	第46図-188	染付碗	白磁	口径 (10.0) cm	外面山水文有り	肥前 10%
井戸4	第46図-189 図版31-189	土師皿	素焼き	口径 (11.0) cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 外面体部上半までココナデ 内外面底部ナデ	在地 50%
	第46図-190 図版31-190	土師皿	素焼き	口径 (10.9) cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 外面ナデ 内面体部上半ココナデ 内面底部ナデ	在地 25%
	第46図-191 図版31-191	土師皿	素焼き	口径 7.3 cm 器高 1.5 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 80%
竈24	第47図-192 図版31-192	土師皿	素焼き	口径 (7.5) cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 50% 口縁部煤付着
	第47図-193 図版31-193	焼塩釜	素焼き	口径 (5.8) cm 器高 9.1 cm 底径 (6.1) cm	板作り成形 外面指頭圧痕有り	50%
	第47図-194 図版31-194	壺	陶器	口径 (6.0) cm 器高 (11.2) cm 高台径 5.4 cm	内面口縁部から外面体部下半鉄釉 外面体部下半鉄釉を施す 外面下半螺旋状に沈線めぐる 内面露胎	50% 外面体部下半は鉄釉が焼成により、白色に変色
	第47図-195 図版31-195	煙管	銅	火皿径 1.5 cm 長さ 5.8 cm 接合部径 1.1 cm	雁首 首部は火皿に向かって左横に合わせ目	100% 緑青付着 首部上面へこみ有り
	第47図-196 図版31-196	鉢	陶器	口径 (30.5) cm 器高 9.1 cm 高台径 11.8 cm	三島手 外面口縁部から体部上半灰釉 外面体部下半鉄釉を施す 内面白色釉か 見込み砂目7ヶ所有り 高台壘付、高台内露胎	唐津 90%
	第47図-197 図版31-197	染付皿	白磁	口径 (14.3) cm 器高 3.2 cm 高台径 (6.6) cm	口縁折れ縁 内面墨文 高台内ハリ支え2ヶ所 残存 高台壘付露胎 離れ砂付着	肥前 50%
	第47図-198 図版31-198	染付皿	白磁	口径 (13.8) cm 器高 3.2 cm 高台径 (7.9) cm	口縁端反り 外面唐草文 内面鳥と草花文 高台内面線有り 高台内ハリ支え3ヶ所 残存 高台壘付露胎	肥前 50%
竈27	第48図-199 図版32-199	撰鉢	陶器	口径 (28.4) cm	クシ目一単位7本 内外面塗り土を施す	丹波 5% 外面口縁部自然釉が一部掛かる
	第48図-200 図版32-200	撰鉢	陶器		クシ目一単位7本 内外面塗り土を施す	丹波 5%

表11 遺物観察表(10)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
電27	第48図-201 図版32-201	槽鉢	陶器		クシ目一単位8本 内外面塗り土を施す 内面自然釉掛かる	丹波 5% 内面自然釉掛かる
	第48図-202 図版31-202	染付皿	白磁	口径(14.2)cm 器高 2.4 cm 高台径(7.6)cm	内面笹文 高台壘付露胎 離れ砂付蒔	肥前 25%
	第48図-203 図版31-203	染付皿	白磁		内面草花文 高台壘付露胎 離れ砂付蒔	肥前 25%
電28	第50図-204 図版32-204	土師皿	素焼き	高台径 6.0 cm 口径(12.0)cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 外面体部 ナデ(指頭圧痕残る) 内面ナデ	在地 50% 口縁部僅付蒔
	第50図-205 図版32-205	土師皿	素焼き	口径 10.8 cm 器高 2.0 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 外面体部 指頭圧痕 内面口縁部から体部ヨコナデ 見 込みナデ	在地 95% 口縁部僅付蒔
	第50図-206 図版32-206	鉢	陶器	口径(21.4)cm 器高 9.5 cm 高台径 9.0 cm	たまご手 口縁折れ縁 灰釉 高台壘付露胎	唐津 30% 内外面黄入
	第50図-207 図版32-207	壺	陶器		内外面塗り土を施す 外面体部10条以上の沈 線有り	丹波 25%
電29	第50図-208	小杯	陶器	口径 6.7 cm 器高 3.1 cm 底径 3.1 cm	灰釉 底部糸切り痕有り 外面体部下半露胎	唐津 85% 内外面黄入
	第50図-209 図版32-209	皿	陶器	口径 11.3 cm 器高 3.2 cm 高台径 3.2 cm	萐莆底 口縁部輪花 灰釉 見込み砂目3ヶ 所有り 外面体部下半露胎	唐津 60%
	第50図-210 図版32-210	染付碗	白磁	口径(10.1)cm 器高 5.8 cm 高台径 4.0 cm	外面文様有り 見込み蛇の目輪割ぎ アルミナ 砂塗布 高台内面線有り 高台壘付露胎 離 れ砂付蒔	肥前 45%
井戸2	第50図-211 図版32-211	皿	陶器	口径(17.6)cm	灰釉 内面刷毛目文 見込み蛇の目輪割ぎか	唐津 10%
	第50図-212 図版32-212	染付碗	白磁	口径(9.7)cm 器高 5.8 cm 高台径 3.9 cm	外面楓文(コンヤク印判) 高台内面線有り 高台壘付露胎 離れ砂付蒔	肥前 50%
電33と 周辺	第56図-213 図版32-213	土師皿	素焼き	口径 7.1 cm 器高 1.8 cm	手捏ね成形 外面ナデ 口縁部指頭圧痕 内 面一定方向のナデ	在地 100%
	第56図-214 図版32-214	土師皿	素焼き	口径(6.9)cm 器高 1.5 cm	手捏ね成形 外面ナデ 口縁部強いヨコナデ 内面一定方向のナデナデ	在地 70%
	第56図-215 図版32-215	土師皿	素焼き	口径 6.6 cm 器高 1.5 cm	手捏ね成形 外面ナデ 内面丁寧なナデ	在地 80%
	第56図-216 図版32-216	土師皿	素焼き	口径 14.1 cm 器高 2.3 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残る) 外面口縁部・内面体部ヨコナデ 底部ナデ	在地 75%
	第56図-217 図版32-217	土師皿	素焼き	口径 14.4 cm 器高 2.2 cm	手捏ね成形 外面ナデ 口縁部ヨコナデ 外 面口縁部・内面体部ヨコナデ 底部一定方向 のナデ	在地 75%
	第56図-218 図版32-218	皿	陶器	口径 13.0 cm 器高 4.3 cm 高台径 4.4 cm	口縁溝縁 灰釉 見込み砂目3ヶ所残存 高台壘付砂目3ヶ所残存	唐津 80%
	第57図-219 図版32-219	土師皿	素焼き	口径(7.8)cm 器高 1.5 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 50% 口縁部僅付蒔
土坑270	第57図-220 図版32-220	鉢	白磁	口径(13.2)cm 器高 5.0 cm 高台径(6.4)cm	口縁口唇 内面体部型打ち成形による唐草文 高台壘付露胎	肥前 15%

表12 遺物観察表(11)



遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑277	第57図-221 図版32-221	碗	青磁	高台径 4.5 cm	高台量付、高台内露胎	肥前 25% 高台量付鉄分付着
土坑281	第57図-222 図版32-222	擂鉢	陶器	口径(26.5) cm	クシ目一単位5本	丹波 2%
土坑282	第57図-223 図版32-223	土師皿	素焼き	口径 7.2 cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 90% 口縁部煤付着
土坑285	第57図-224 図版33-224	焙烙	素焼き	口径(23.9) cm	底部外型成形 内外面ヨコナデ 外面体部下 半右上がり平行タキ痕有り	在地 15% 外面煤けている
	第57図-225 図版33-225	焙烙	素焼き	口径(23.2) cm	底部外型成形 外面口縁部、内面ヨコナデ 外面体部下半右上がり平行タキ痕有り) その 上からナデ	在地 15%
	第57図-226 図版33-226	焙烙	素焼き	口径(19.9) cm	底部外型成形 外面口縁部、内面ヨコナデ 外面体部下半右上がり平行タキ痕有り) その 上からナデ 指頭圧痕有り	在地 5%
	第57図-227 図版32-227	皿	陶器	口径(12.6) cm	口縁溝縁 灰釉	唐津 5% 内外面貫入
	第57図-228 図版32-228	染付碗	白磁	口径(8.7) cm	外面口縁部雷文 外面体部煤文 高台量付 露胎	肥前 15%
土坑296	第57図-229 図版32-229	皿	陶器	口径 12.1 cm 器高 2.5 cm 高台径 4.9 cm	口縁溝縁 灰釉 見込み砂目有り 外面体部 下半と高台露胎	唐津 98%
土坑329	第57図-230 図版33-230	土師皿	素焼き	口径 8.1 cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 外面口縁部、内面ヨコナデ 外 面体部、内面底部ナデ	在地 99% 口縁部煤付着
	第57図-231 図版33-231	土師皿	素焼き	口径 8.3 cm 器高 1.8 cm	手捏ね成形 外面口縁部、内面ヨコナデ 外 面体部ナデ(指頭圧痕残る)	在地 98% 口縁部煤付着
	第57図-232 図版33-232	土師皿	素焼き	口径(7.7) cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形 外面口縁部、内面ヨコナデ 外 面体部指頭圧痕	在地 40%
	第57図-233 図版33-233	土師皿	素焼き	口径(8.0) cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形 外面口縁部ヨコナデ 外面体部 指頭圧痕 内面ナデ	在地 30%
	第57図-234 図版33-234	皿	陶器	口径(12.9) cm 器高 2.7 cm 高台径 4.4 cm	口縁溝縁 灰釉 見込み砂目3ヶ所有り 外面 体部下半露胎	唐津 50% 内外面貫入
土坑339	第57図-235 図版33-235	皿	陶器	口径(14.3) cm 器高 4.3 cm 高台径 4.9 cm	灰釉 見込み砂目3ヶ所有り 高台周辺露胎	唐津 20%
土坑365	第57図-236 図版33-236	碗	陶器	高台径 5.3 cm	灰釉 高台量付、高台内露胎	瀬戸・美濃 30% 内外面貫入
土坑376	第57図-237 図版33-237	銭	銅	径 2.4 cm 厚み 0.1 cm	元祐通寶(真書体)	100% 緑青付着 「通」の字明瞭難 北宋 元祐元年(1086)初鋳
土坑371	第57図-238 図版33-238	青花皿	白磁	高台径(11.8) cm	内面体部文様有り 見込み花文と二重線縁有 り 高台内露胎 高台量付離れ砂付着	中国 5%
土坑380	第57図-239 図版33-239	鳥会瓦	瓦	径 14.5 cm 周縁厚 2.1 cm 瓦当厚 1.2 cm	左巻き三巴文 珠文16個 頭頂部に3ヶ所孔 有り 瓦当部離れ砂付着 木苧の木目残る	40%
土坑433	第57図-240 図版33-240	染付碗	白磁	口径(11.6) cm 器高 5.8 cm 高台径 4.8 cm	外面一重胡目文 高台内銘有り 高台量付露 胎 離れ砂付着	肥前 40%

表13 遺物観察表(12)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑451	第58図-241 図版33-241	皿	陶器	口径(13.4)cm	口縁溝縁 灰釉	唐津 5% 内外面貫入
	第58図-242 図版33-242	染付皿	白磁	高台径(4.5)cm	内面体部文様有り 見込み蛇の目輪刺ぎ 高台周辺露胎 高台壘付離れ砂付蓋	肥前 15%
土坑456	第58図-243 図版33-243	碗	陶器	口径(11.5)cm 器高 6.3cm 高台径(5.0)cm	灰釉 外面体部下半露胎 露胎部は赤褐色	唐津 15%
	第58図-244 図版33-244	銭	銅	口径 2.4cm 厚み 0.1cm	熙寧元寶(真書体)	100% 緑青付蓋「熙寧」の字判読難 北宋熙寧元年(1068)初鑄
土坑398	第58図-245 図版33-245	羽釜	瓦質	口径(22.0)cm	外面口縁部、罎上ヨコナデ 罎下横方向のケズリ 内面ヨコナデ、一部ハケメ残る	5% 外面罎下襷付蓋
	第58図-246	皿	陶器	口径(11.4)cm 器高 3.4cm 高台径 4.5cm	灰釉 高台周辺露胎 露胎部は赤褐色	唐津 70%
	第58図-247 図版33-247	皿	陶器	口径(13.5)cm 器高 3.0cm 高台径 4.5cm	口縁溝縁 灰釉 見込み砂目3ヶ所有り 高台壘付、高台内露胎	唐津 60%
	第58図-248 図版33-248	播鉢	陶器	口径(24.3)cm	播目単位不明	備前 2%
	第58図-249 図版33-249	播鉢	陶器	口径(36.8)cm	播目ヘラ描き 内外面塗り土を施す	丹波 3%
	第58図-250 図版33-250	播鉢	陶器		播目ヘラ描き	丹波 25%
	第58図-251 図版33-251	硯	石	底径(12.1)cm	粘板岩	50%
	第59図-252 図版34-252	甕	素焼き	口径(55.0)cm 器高(54.1)cm 底径(31.1)cm	内外面口縁部ヨコナデ 外面体部左上がりのタキ目 内面体部ハケメ調整	淡 30%
	第3 遺構面 下層	第62図-253 図版34-253	石臼	花崗岩	径(28.0)cm 厚み 7.6cm	下臼 6分面6溝
第62図-254 図版34-254		石仏	花崗岩	幅 20.1cm 厚み 18.6cm	彫りぼめた輪郭の中に石仏の上半身を刻み出す	80%
埴列 建物1	第63図-255 図版34-255	青花皿	白磁	口径(12.9)cm 器高 2.8cm 高台径 7.8cm	内外面口縁部界線有り 見込み文様有り 高台壘付露胎 離れ砂付蓋	中国 20%
	第63図-256 図版34-256	埴	瓦	全長 28.5cm 幅 22.7cm 厚さ 3.0cm	上面端部面取り 上下面付蓋物のため調整不明	100%
井戸5	第64図-257 図版34-257	土師皿	素焼き	口径 7.3cm 器高 1.4cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕若干残る) 内面丁寧なナデ	在地 50%
	第64図-258 図版34-258	土師皿	素焼き	口径 6.8cm 器高 1.5cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残る) 内面一定方向のナデ	在地 100%
	第64図-259 図版34-259	土師皿	素焼き	口径 8.4cm 器高 2.2cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残る) 内面ナデ	在地 100% 口縁部僅付蓋
	第64図-260 図版34-260	土師皿	素焼き	口径 7.0cm 器高 1.6cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残る) 内面丁寧なナデ	在地 98%

表14 遺物観察表(13)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
井戸5	第64図-261 図版34-261	土師皿	素焼き	口径(7.6)cm 器高 2.5 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頸圧痕若干残る) 内面ナデ	在地 50%
	第64図-262 図版34-262	土師皿	素焼き	口径 7.2 cm 器高 1.5 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頸圧痕残る) 内面 丁寧なナデ	在地 100%
	第64図-263 図版34-263	土師皿	素焼き	口径(8.0)cm 器高 2.0 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頸圧痕残る) 内面 口縁部ヨコナデ 内面ナデ	在地 50%
	第64図-264 図版34-264	土師皿	素焼き	口径 6.9 cm 器高 1.5 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面ナデ(指頸圧痕残る) 内面ナデ	在地 100%
	第64図-265 図版34-265	土師皿	素焼き	口径 7.2 cm 器高 1.4 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頸圧痕残る) 内面 ナデ	在地 100% 口縁部煤付着
	第64図-266 図版34-266	土師皿	素焼き	口径(10.0)cm 器高 1.9 cm	手捏ね成形 外面ナデ(口縁部に指頸圧痕有 り) 内面ナデ	在地 30% 口縁部煤付着
	第64図-267 図版34-267	土師皿	素焼き	口径 9.5 cm 器高 2.1 cm	手捏ね成形 外面ナデ 内面ナデ 口縁部ヨ コナデ	在地 100% 口縁部煤付着
	第64図-268 図版34-268	土師皿	素焼き	口径(10.8)cm 器高 2.0 cm	手捏ね成形 外面ナデ 内面ナデ 口縁部ヨ コナデ	在地 25%
	第64図-269 図版34-269	土師皿	素焼き	口径 10.4 cm 器高 2.2 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頸圧痕若干残る) 外面口縁部・内面ヨコナデ	京都系か 98% 口縁部煤付着
	第64図-270 図版34-270	鉄絵皿	陶器	口径 12.0 cm 器高 3.5 cm 高台径 4.5 cm	灰釉 内面文様有り 見込み胎土目4ヶ所残存 高台壘付露胎	唐津 70% 内外面貫入
	第64図-271 図版34-271	皿	陶器	口径 10.9 cm 器高 4.1 cm 高台径 4.2 cm	灰釉 見込み胎土目4ヶ所有り 外面体部下 半露胎	唐津 100%
	第64図-272 図版34-272	天目碗	陶器	口径(11.7)cm	鉄釉 高台周辺露胎	瀬戸・美濃 35%
	第64図-273 図版34-273	皿	陶器	口径(10.1)cm 器高 2.9 cm 高台径 4.4 cm	灰釉 見込み砂目2ヶ所残存 外面体部下 半露胎 露胎部赤褐色	唐津 15% 二次焼成受ける
	第64図-274 図版34-274	皿	陶器	口径 12.7 cm 器高 3.8 cm 高台径 4.5 cm	口縁濃緑 灰釉 見込み砂目4ヶ所有り 高台 周辺露胎	唐津 85%
	第64図-275 図版35-275	鉢	陶器	口径(21.8)cm	内外面ヨコナデ 外面体部下半ナデアゲ	丹波 10%
	第64図-276 図版35-276	壺	陶器	底径 8.0 cm	内外面ヨコナデ	丹波 5%
	第64図-277 図版35-277	染付皿	白磁	口径(13.0)cm 器高 2.8 cm 高台径(4.8)cm	見込み文様有り 高台壘付露胎 離れ砂付着	肥前 20%
	第64図-278 図版35-278	青花皿	白磁	口径 13.9 cm 器高 4.3 cm 高台径 5.8 cm	口縁端反り 内面口縁部圏線有り 見込みな ずな文 蛇の目高台 高台壘付・高台内露胎	中国 90%
	第64図-279 図版35-279	軒平瓦	瓦	瓦当高 3.9 cm 周縁厚 1.4 cm	均整唐草文	35%
	土器 瀬まり1	第67図-280 図版35-280	土師皿	素焼き	口径(9.2)cm 器高 1.9 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頸圧痕有り) 内面 ナデ

表15 遺物観察表(14)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土器 溜まり	第67図-281 図版35-281	土師皿	素焼き	口径 (7.6) cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形 外面指頸圧痕 内面ナデ	在地 50%
	第67図-282 図版35-282	土師皿	素焼き	口径 7.2 cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形 内外面ナデ	在地 65%
	第67図-283 図版35-283	土師皿	素焼き	口径 (8.6) cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 内外面ナデ(外面口縁部に指頸 圧痕有り)	在地 25%
	第67図-284 図版35-284	土師皿	素焼き	口径 (9.8) cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頸圧痕残る) 内面 ナデ	在地 30%
	第67図-285 図版35-285	土師皿	素焼き	口径 (7.2) cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形 内外面ナデ	在地 60%
	第67図-286 図版35-286	土師皿	素焼き	口径 (7.8) cm 器高 1.5 cm	手捏ね成形 内外面ナデ	在地 50%
	第67図-287 図版35-287	土師皿	素焼き	口径 (9.0) cm 器高 2.1 cm	手捏ね成形 外面ナデ(口縁部指頸圧痕有り) 内面一定方向のナデ	在地 45% 内外面燻けている
	第67図-288 図版35-288	土師皿	素焼き	口径 (9.6) cm	手捏ね成形 内外面ナデ	在地 30%
	第67図-289 図版35-289	土師皿	素焼き	口径 (7.4) cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頸圧痕有り) 内面 ナデ 口縁ヨコナデ	在地 25%
	第67図-290 図版35-290	土師皿	素焼き	口径 (7.2) cm 器高 1.5 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面ナデ(指頸圧痕有 り) 内面ナデ	在地 25%
	第67図-291 図版35-291	土師皿	素焼き	口径 (9.5) cm 器高 1.9 cm	手捏ね成形 外面ナデ(口縁部指頸圧痕残る) 内面一定方向のナデ 口縁ヨコナデ	在地 30%
	第67図-292 図版35-292	碗	陶器	口径(12.8) cm 器高 6.1 cm 高台径 5.0 cm	灰釉 高台周辺露胎	唐津 35%
	第67図-293 図版35-293	碗	陶器	口径(10.2) cm 器高 6.6 cm 高台径 (3.9) cm	灰釉 外面体部下露胎	唐津 50% 外面煤付燻
	第67図-294 図版35-294	碗	陶器	口径 (9.2) cm 器高 5.6 cm 高台径 (4.1) cm	長石釉 輪高台 高台壘付露胎	瀬戸・美濃(志野) 25%
第67図-295 図版35-295	皿	陶器	口径(13.0) cm 器高 4.0 cm 底径 4.6 cm	三島手 全釉 見込み兼嵌と白泥釉で波状文 見込み刷毛目有り 見込み砂目4ヶ所有り 高 台壘付砂目4ヶ所有り	唐津 25%	
第67図-296 図版35-296	皿	陶器	口径(13.2) cm 器高 3.5 cm 高台径 4.4 cm	口縁溝縁 灰釉 底部糸切り痕有り(右巻き) 見込み砂目3ヶ所有り 底部周辺露胎	唐津 40% 内外面貫入	
第67図-297 図版35-297	皿	陶器	口径 (13.2) cm 器高 3.5 cm 高台径 4.4 cm	灰釉 見込み砂目5ヶ所有り 高台周辺露胎	唐津 35%	
第68図-298 図版36-298	皿	陶器	口径 13.5 cm 器高 3.1 cm 高台径 4.9 cm	口縁溝縁 灰釉 見込み砂目3ヶ所有り 高台 壘付砂目3ヶ所有り 外面体部下露胎	唐津 90%	
第68図-299 図版36-299	皿	陶器	口径 14.0 cm 器高 3.4 cm 高台径 5.3 cm	口縁溝縁 灰釉 見込み砂目3ヶ所有り 外面 体部下露胎 高台壘付砂目4ヶ所有り	唐津 65%	
第68図-300 図版36-300	皿	陶器	口径(13.8) cm 器高 3.4 cm 高台径 4.7 cm	口縁溝縁 灰釉 見込み環状に砂目有り 外 面体部下露胎	唐津 75%	

表16 遺物観察表(15)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土器 溜まり	第68図-301 図版35-301	片口鉢	陶器	口径(18.3)cm 器高 10.8 cm 高台径(7.2)cm	灰釉 見込み砂目3ヶ所有り 外面体部下半露胎	唐津 40%
	第68図-302 図版36-302	擂鉢	陶器	口径(31.1)cm 器高 13.3 cm 底径 13.4 cm	擂目へら描き 外面口縁部ヨコナデ 外面体部ナデアゲ	丹波 35%
	第68図-303 図版36-303	擂鉢	陶器	口径(31.9)cm 器高 11.8 cm 底径(13.4)cm	擂目へら描き 外面ナデアゲとヨコナデ	丹波 25%
	第68図-304 図版35-304	染付碗	白磁	口径(10.0)cm	外面口縁部、体部文様有り	肥前 20%
	第68図-305 図版36-305	染付皿	白磁	口径(13.9)cm 器高 3.5 cm 高台径 5.2 cm	型打ち成形 見込み草花文と二重圏線有り 高台量付露胎	肥前 30%
土器 溜まり 周辺	第69図-306 図版36-306	石臼	花崗岩	径(32.2)cm 厚み 8.1 cm	上臼 6分画5溝	40%
	第69図-307 図版36-307	板碑	花崗岩	幅 21.1 cm 厚み 10.4 cm	彫りくぼめた輪郭の内側の下端に蓮華座を刻み出す 銘文等は不明	40% 全体に煤けている
土坑481	第70図-308 図版36-308	染付碗	白磁	口径(9.9)cm 器高 7.0 cm 高台径(4.2)cm	外面山水文 高台量付露胎 離れ砂付蓋	肥前 30%
土坑484	第70図-309 図版36-309	皿	陶器	口径(10.9)cm 器高 2.8 cm 高台径 4.7 cm	灰釉 見込み胎土目4ヶ所有り 高台周辺露胎 露胎部赤褐色	唐津 75% 口縁部煤付蓋 二次焼成を受ける
土坑521	第70図-310 図版36-310	擂鉢	陶器	口径(33.8)cm	擂目へら描き 外面ナデアゲと内外面口縁部ヨコナデ	丹波 3%
土坑542	第70図-311 図版36-311	鉢	瓦質	口径(26.7)cm	内外面ヨコナデ 外面体部ミガキ	15%
埴壇 遺構1	第72図-312 図版37-312	焼塩壺	素焼き	口径(7.0)cm 器高 10.3 cm 底径(6.0)cm	輪積み成形 外面、内面口縁部ナデ 外面体部一重方形種の「天下一壺○○○/壺○○○」の押印有り 内面布目痕残る	淡 50%
	第72図-313 図版37-313	擂鉢	陶器	口径(36.0)cm	クシ目一単位7本	丹波 15%
	第72図-314 図版37-314	染付碗	白磁	口径(9.9)cm 器高 6.7 cm 高台径 4.0 cm	外面口縁部文様有り 外面体部笹文 高台周辺露胎	肥前 65%
土坑561	第75図-315 図版37-315	土師皿	素焼き	口径(11.0)cm 器高 1.9 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残る) 内面ナデ	在地 25%
	第75図-316 図版37-316	土師皿	素焼き	口径(10.9)cm 器高 2.0 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残る) 内面ナデ	在地 20%
土坑573	第75図-317	銭	銅	径 2.4 cm 厚み 0.1 cm	政和通寶(篆書体)	100% 銀青付蓋「通」判読難 北宋 政和元年(1111)初銭
土坑586	第75図-318 図版37-318	軒平瓦	瓦	瓦当高 5.2 cm 周縁厚 3.1 cm	青海波文と文字「甲」	10%
土坑620	第75図-319 図版37-319	土師皿	素焼き	口径 7.7 cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残る) 内面一定方向のナデ	在地 95%
	第75図-320 図版37-320	土師皿	素焼き	口径 7.3 cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残る) 内面一定方向のナデ	在地 100%

表17 遺物観察表(16)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑620	第75図-321 図版37-321	土師皿	素焼き	口径 10.8 cm 器高 2.1 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕有り) 外面体部中ほど強いナデ 内面体部ヨコナデ 内面底部ナデ	在地 98%
土坑625	第75図-322 図版37-322	土師皿	素焼き	口径 (7.6) cm 器高 1.2 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残る) 内面一定方向のナデ	在地 35% 口縁部煤付着
土坑626	第76図-323 図版37-323	土師皿	素焼き	口径(10.0) cm 器高 1.1 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残る) 内面ナデ	在地 30%
	第76図-324 図版37-324	土師皿	素焼き	口径 (7.8) cm 器高 1.5 cm	手捏ね成形 内外面ナデ	在地 75%
	第76図-325 図版37-325	土師皿	素焼き	口径 (8.4) cm 器高 1.4 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残る) 内面一定方向のナデ	在地 35%
	第76図-326 図版37-326	土師皿	素焼き	口径 9.0 cm 器高 1.9 cm	手捏ね成形 外面口縁部、内面ヨコナデ 外面体部ナデ(指頭圧痕残る)	在地 99% 口縁部煤付着
	第76図-327 図版37-327	土師皿	素焼き	口径 (8.4) cm 器高 1.4 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残る) 内面ナデ	在地 45%
	第76図-328	土師皿	素焼き	口径 (8.3) cm 器高 1.4 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 20%
	第76図-329 図版37-329	土師皿	素焼き	口径 (7.4) cm 器高 1.4 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 50%
	第76図-330 図版37-330	土師皿	素焼き	口径 (7.4) cm 器高 1.3 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残る) 内面一定方向のナデ 内面雲母粉付着	在地 30%
	第76図-331 図版37-331	土師皿	素焼き	口径 7.7 cm 器高 1.6 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残る) 内面ナデ	在地 85%
	第76図-332 図版37-332	土師皿	素焼き	口径 10.0 cm 器高 2.2 cm	手捏ね成形 外面口縁部、内面ヨコナデ 外面体部ナデ	在地 90%
	第76図-333 図版37-328	土師皿	素焼き	口径 (9.8) cm 器高 1.8 cm	手捏ね成形 外面口縁部、内面ヨコナデ 外面体部底部ナデ(指頭圧痕残る)	在地 40% 口縁部煤付着
	第76図-334 図版37-334	土師皿	素焼き	口径(10.2) cm 器高 2.2 cm	手捏ね成形 内外面ヨコナデ	在地 30% 口縁部若干煤けている
	第76図-335 図版37-335	土師皿	素焼き	口径 (9.9) cm 器高 1.9 cm	手捏ね成形 内外面口縁部ヨコナデ 内外面体部ナデ	在地 30% 外面体部鉄片付着
	第76図-336 図版37-336	土師皿	素焼き	口径 10.0 cm 器高 2.0 cm	手捏ね成形 内外面口縁部ヨコナデ 内外面体部ナデ	在地 75% 口縁部煤付着
	第76図-337 図版37-337	土師皿	素焼き	口径(11.6) cm 器高 2.1 cm	手捏ね成形 内外面口縁部ヨコナデ 内外面体部底部ナデ	在地 25% 内面体部煤付着
	第76図-338 図版37-338	土師皿	素焼き	口径(11.3) cm 器高 2.1 cm	手捏ね成形 外面口縁部、内面ヨコナデ 外面体部ナデ(指頭圧痕残る)	在地 35% 口縁部煤付着
第76図-339 図版37-339	土師皿	素焼き	口径(11.3) cm 器高 2.0 cm	手捏ね成形 外面ナデ 内面ヨコナデ	在地 20% 口縁部煤付着 内面煤けている	
第76図-340 図版37-340	天目碗	陶器	口径(11.6) cm	鉄釉	瀬戸・美濃 10%	

表18 遺物観察表(17)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑626	第76図-341 図版37-341	皿	白磁	口径(12.3)cm 器高 2.9 cm 高台径(6.7)cm	口縁端反り 外面高台部、高台畳付露胎	中国 45%
土坑645	第77図-342 図版37-342	天目碗	陶器	高台径(4.0)cm	内面鉄釉 外面下半露胎	瀬戸・美濃 10%
	第77図-343 図版37-343	皿	陶器	口径(13.0)cm 器高 3.8 cm 高台径(4.8)cm	口縁溝縁 灰釉 見込み砂目2ヶ所残存 高台畳付砂目2ヶ所残存 高台周辺露胎	高津 40%
	第77図-344 図版37-344	皿	陶器	高台径(5.3)cm	灰釉 見込み砂目3ヶ所残存 高台周辺露胎	高津 15% 高台畳付露胎有り
土坑647	第77図-345 図版37-345	天目碗	陶器	口径(11.5)cm 器高 6.7 cm 高台径(5.3)cm	鉄釉 外面下半露胎	瀬戸・美濃 20%
土坑648	第77図-346 図版37-346	鉢	瓦質	口径(17.7)cm 器高 6.2 cm 底径(14.7)cm	外面体部に粘土紐で波状の凸帯を2条めぐらす凸帯の間にヘラ描きの波状文を施す 内外面ヨコナデ	25%
	第77図-347 図版38-347	皿	陶器	口径(13.6)cm 器高 4.0 cm 高台径 5.0 cm	口縁溝縁 灰釉 見込み砂目4ヶ所有り 高台畳付砂目4ヶ所有り 高台露胎	高津 45%
土坑651	第77図-348 図版38-348	焙烙	素焼き	口径(23.9)cm	底部外型成形 外面上半、内面ヨコナデ 外面体部下右上がり平行タキ痕有り	在地 10% 底部爆けている
	第77図-349 図版38-349	天目碗	陶器	高台径 5.2 cm	内外面鉄釉の上から灰流し 高台周辺露胎	瀬戸・美濃 35%
	第77図-350 図版38-350	軒丸瓦	瓦	径 13.9 cm 周縁厚 2.0 cm 瓦当厚 1.7 cm	左巻き三巴文 珠文12個 瓦当側接合面縦方向のカキメ有り 瓦当部離れ砂付着	40% 二次焼成受ける
土坑655	第78図-351 図版38-351	土師皿	素焼き	口径(12.1)cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残る) 内面ナデ	在地 25% 口縁部、内面煤付着
	第78図-352 図版38-352	焙烙	素焼き	口径(23.4)cm	底部外型成形 外面体部上半、内面ヨコナデ 外面体部下右上がり平行タキ痕有り	在地 15%
	第78図-353 図版38-353	摺鉢	陶器		クシ目一単位6本 内外面口縁部、内面ヨコナデ 外面体部ナデ(指頭圧痕残る)	丹波 3%
	第78図-354 図版38-354	摺鉢	陶器	口径(35.4)cm	クシ目一単位7本 内外面口縁部ヨコナデ 外面体部にナデ(指頭圧痕残る) 内面ナデ	丹波 50% 外面体部下に付着物有り
	第78図-355 図版38-355	染付皿	白磁	高台径(5.0)cm	見込み花文と二重圏縁有り 高台畳付露胎 離れ砂付着	肥前 15% 内外面貫入
	第78図-356 図版38-356	軒丸瓦	瓦	径 15.3 cm 周縁厚 1.9 cm 瓦当厚 1.5 cm	右巻き三巴文 珠文残存数14個 瓦当側接合面にカキメ・キザメなし	65%
	第78図-357 図版38-357	土師皿	素焼き	口径(7.5)cm 器高 1.5 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 30%
土坑709	第78図-358 図版38-358	土師皿	素焼き	口径(7.9)cm 器高 1.3 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 30%
土坑723	第78図-359 図版38-359	鉢	銅	径 2.4 cm 厚み 0.1 cm	景徳元寶	100% 緑青付著しく 判読難 北宋 景徳元年(1004)初鋳
土坑732	第78図-360 図版38-360	土師皿	素焼き	口径(11.6)cm 器高 2.1 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面口縁部ヨコナデ	在地 35%

表19 遺物観察表(18)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑744	第78図-361 図版38-361	青花碗	白磁	高台径 (5.4) cm 口 径 (11.2) cm 器 高 3.0 cm	外面文様有り 内面見込み文様と圈線有り 高台内縁有り 高台壘付露胎 離れ砂付着	中国 10%
土坑807	第78図-362 図版38-362	椀	瓦器	口 径 (11.2) cm 器 高 3.0 cm	外面口縁部ヨコナデと外面ナデと指押さへ 内 面ヨコナデと螺旋線ミガキ	和泉型 15%
土坑823	第78図-363 図版38-363	焼塩壺	素焼き	口 径 5.7 cm 器 高 9.3 cm 底 径 4.8 cm	輪積み成形 外面ナデ 外面体部一重方形輪 の「天下一堺ミなとノ摩左衛門」の刻印有り 内面布目痕	淡 90%
土坑825	第78図-364	鉢	陶器	口 径 (15.6) cm	内外面塗り土を施す	丹波 2%
土坑864	第78図-365 図版39-365	土師皿	素焼き	口 径 9.8 cm 器 高 2.3 cm	手捏ね成形 外面ナデ(指頭圧痕残る) 内面ヨコナデ	在地 100% 口縁部煤付着
土坑910	第79図-366 図版38	銭	銅	径 2.5 cm 厚 み 0.1 cm	開元通寶	100% 緑青付着 唐 武徳4年(621)初鋳
	第79図-367 図版38	銭	銅	径 2.4 cm 厚 み 0.1 cm	咸平元寶	100% 緑青付着 「賈」 の字刺跡雖 北宋 咸平 元年(998)初鋳
	第79図-368 図版38	銭	銅	径 2.4 cm 厚 み 0.1 cm	祥符元寶	100% 緑青付着 北宋 大中祥符元年(1008)初 鋳
	第79図-369 図版38	銭	銅	径 2.4 cm 厚 み 0.1 cm	祥符通寶	100% 緑青付着 北宋 大中祥符2年(1008)初 鋳
	第79図-370 図版38	銭	銅	径 2.5 cm 厚 み 0.1 cm	天禧通寶?	100% 緑青付着 北宋 天禧年間(1017-)初鋳
	第79図-371 図版38	銭	銅	径 2.5 cm 厚 み 0.1 cm	天聖元寶(真書体)	100% 緑青付着 北宋 天聖元年(1023)初鋳
	第79図-372 図版38	銭	銅	径 2.5 cm 厚 み 0.1 cm	天聖元寶(篆書体)	100% 緑青付着 北宋 天聖元年(1023)初鋳
	第79図-373 図版38	銭	銅	径 2.4 cm 厚 み 0.1 cm	景祐元寶(真書体)	100% 緑青付着 北宋 景祐元年(1034)初鋳
	第79図-374 図版38	銭	銅	径 2.4 cm 厚 み 0.1 cm	皇宋通寶(真書体)	100% 緑青付着 北宋 宝元2年(1039)初鋳
	第79図-375 図版38	銭	銅	径 2.4 cm 厚 み 0.1 cm	至和通寶(真書体)	100% 緑青付着 北宋 至和元年(1054)初鋳
	第79図-376 図版38	銭	銅	径 2.5 cm 厚 み 0.1 cm	至和通寶(篆書体)	100% 緑青付着 北宋 至和元年(1054)初鋳
	第79図-377 図版38	銭	銅	径 2.4 cm 厚 み 0.1 cm	治平元寶(真書体)	100% 緑青付着 北宋 治平元年(1064)初鋳
	第79図-378 図版38	銭	銅	径 2.4 cm 厚 み 0.1 cm	熙寧元寶(真書体)	100% 緑青付着 北宋 熙寧元年(1068)初鋳
	第79図-379 図版38	銭	銅	径 2.4 cm 厚 み 0.1 cm	熙寧元寶(篆書体)	100% 緑青付着 北宋 熙寧元年(1068)初鋳
第79図-380 図版38	銭	銅	径 2.4 cm 厚 み 0.1 cm	元豐通寶(真書体)	100% 緑青付着 北宋 元豐元年(1078)初鋳	

表20 遺物観察表(19)



遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
土坑910	第79図-381 図版38	銭	銅	径 2.5 cm 厚み 0.1 cm	元豊通寶(篆書体)	100% 緑青付着 北宋 元豊元年(1078)初鑄
	第79図-382 図版38	銭	銅	径 2.5 cm 厚み 0.1 cm	元祐通寶(篆書体)	100% 緑青付着 北宋 元祐元年(1086)初鑄
	第79図-383 図版38	銭	銅	径 2.4 cm 厚み 0.1 cm	紹聖元寶(真書体)	100% 緑青付着 北宋 紹聖元年(1094)初鑄
	第79図-384 図版38	銭	銅	径 2.5 cm 厚み 0.1 cm	元符通寶(真書体)	100% 緑青付着 北宋 元符元年(1098)初鑄
	第79図-385 図版38	銭	銅	径 2.4 cm 厚み 0.1 cm	元符通寶(篆書体)	100% 緑青付着 北宋 元符元年(1098)初鑄
	第79図-386 図版38	銭	銅	径 2.4 cm 厚み 0.1 cm	聖宋元寶(真書体)	100% 緑青付着 北宋 建中靖国元年(1101)初鑄
	第79図-387 図版38	銭	銅	径 2.4 cm 厚み 0.1 cm	聖宋元寶(篆書体)	100% 緑青付着 北宋 建中靖国元年(1101)初鑄
溝16	第82図-388 図版39-388	広口壺	弥生土器	口径 17.0 cm 器高 32.8 cm 底径 7.4 cm	外面頸部が体上半部ハケメ 体部下斜部ハケメ及び外 内面口縁部が頸部へラズガキ 外面口縁部3本単位の斜格子文 体上半部直文・波状文・斜格子文等 内面口縁部屈折文	70%
	第82図-389 図版39-389	壺	弥生土器	口径 14.2 cm 器高 29.6 cm 底径 6.7 cm	外面上半部歪いタテハケ 体部下半ケズリの横ミ ガキ 外面口縁部から内面口頸部ヨコナデ 内 面体部ハケメ	80%
土坑663	第82図-390 図版39-390	広口壺	弥生土器	口径(23.0)cm	外面口縁部ヨコナデ 頸部縦ハケメ 内面へ ラ工具による丁寧なヨコナデ 口縁部2条の凹 線 外面頸部下位10本単位の横描き直線文	20%
	第83図-391 図版39-391	皿	軟質施 釉陶器	口径 8.0 cm 器高 1.8 cm 底径 3.7 cm	柿釉 ロク口成形 底部糸切り痕有り 外面口縁部より下露胎	98% 口縁部煤付着
第IV層	第83図-392 図版39-392	受皿	軟質施 釉陶器	口径 7.9 cm 器高 1.5 cm 底径 3.8 cm	柿釉 ロク口成形 受口に1ヶ所切り込み有り 底部糸切り痕有り 外面体部下半露胎	100% 口縁部煤付着
	第83図-393 図版39-393	受皿	軟質施 釉陶器	口径 7.8 cm 器高 1.3 cm 底径 3.5 cm	柿釉 ロク口成形 底部糸切り痕有り 外面口縁部より下露胎	95% 口縁部煤付着 底部に「大」の墨書有り
	第83図-394 図版39-394	受皿	軟質施 釉陶器	口径 7.6 cm 器高 1.5 cm 底径 3.4 cm	柿釉 ロク口成形 底部糸切り痕有り 外面口縁部より下露胎	95% 底部に「向」の墨書有り
	第83図-395 図版39-395	焼塩甕蓋	素焼き	径 8.0 cm 厚み 1.8 cm	外面回転ナデ 内面布目痕有り	100%
	第83図-396 図版39-396	蓋	陶器	口径 11.5 cm 器高 2.9 cm 底径 4.0 cm	灰釉 外面露胎 つまみ有り	京焼系 95% 内面貫入
	第83図-397 図版39-397	唾壺	白磁	口径 12.2 cm 器高 6.5 cm 底径 4.9 cm	口縁輪花 外面、内面受け部花唐草文 底部 露胎	肥前 90%
	第83図-398	ミニチュア製品	軟質施 釉陶器	口径(4.6)cm 器高 0.9 cm 高台径 2.4 cm	ままごと道具(八角形皿) 外面露胎	50%
	第83図-399	銭	銅	径 2.5 cm 厚み 0.1 cm	寛永通寶	100% 緑青付着
	第V層	第83図-400 図版39-400	鉄絵皿	陶器	口径 13.2 cm 器高 3.3 cm 高台径 4.4 cm	灰釉 内面文様有り 見込み砂目4ヶ所有り 高台周辺露胎

表21 遺物観察表(20)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
第V層	第83図-401 図版39-401	皿	陶器	口 径 13.1 cm 器 高 3.0 cm 高台径 4.9 cm	口縁溝線 灰釉 見込み砂目4ヶ所有り 高台 壘付砂目4ヶ所有り	唐津 85%
	第83図-402 図版39-402	碗	陶器	口 径 10.9 cm 器 高 6.7 cm 高台径 4.9 cm	灰釉 高台露胎	唐津 85% 内外面貫入
	第83図-403 図版39-403	染付碗	白磁	口 径 10.5 cm 器 高 6.3 cm 高台径 4.3 cm	外面草花文 高台壘付露胎 離れ砂付蓋	肥前 95% 内外面貫入
	第83図-404 図版39-404	染付皿	白磁	口 径 10.5 cm 器 高 6.3 cm 高台径 4.3 cm 高台径 8.5 cm	見込み墨弾きによる文具文と唐草文 高台内 ハリ支え1ヶ所と圈線有り 高台壘付露胎	肥前 15%
	第83図-405	銭	銅	径 2.5 cm 厚み 0.1 cm	寛永通寶 背文有り	100% 緑青付蓋「正 字文」寛文8年(1668) 初鑄
	第83図-406	銭	銅	径 2.2 cm 厚み 0.1 cm	寛永通寶	100% 緑青付蓋
	第83図-407	銭	銅	径 2.4 cm 厚み 0.1 cm	寛永通寶	100% 緑青付蓋
第VI層	第83図-408 図版39-408	碗	陶器	口 径 11.6 cm 器 高 7.3 cm 高台径 4.6 cm	長石釉 外面体部下半削りが施されている 高 台壘付露胎	瀬戸・美濃(志野) 70% 内外面貫入
	第83図-409 図版39-409	天目碗	陶器	口 径(11.5)cm 器 高 6.8 cm 高台径 4.7 cm	鉄釉 外面体部下半露胎	瀬戸・美濃 30%
	第83図-410 図版40-410	皿	陶器	口 径(10.7)cm 器 高 2.2 cm 高台径(5.8)cm	口縁折れ線 灰釉 内面見込み中央の凸面内 壳有り 高台内軸トテ跡有り 高台壘付露胎	瀬戸・美濃 15% 内外面貫入
	第83図-411 図版40-411	皿	陶器	口 径(10.9)cm 器 高 2.6 cm 高台径 4.7 cm	灰釉 外面体部下半露胎	唐津 75%
	第83図-412 図版40-412	皿	陶器	口 径(12.1)cm 器 高 4.0 cm 高台径(4.8)cm	口縁溝線 灰釉 見込み環状の砂目有り 高 台露胎 高台壘付重ね焼き痕有り	唐津 20%
	第83図-413 図版40-413	皿	陶器	口 径 11.0 cm 器 高 2.9 cm 高台径 6.1 cm	口縁折れ線 鉄釉 見込み胎土目2ヶ所有り 高台内重ね焼き痕有り 高台壘付露胎	瀬戸・美濃 50%
	第83図-414 図版39-414	染付碗	白磁	口 径(10.8)cm 器 高 7.4 cm 高台径(4.6)cm	外面一重網目文 高台壘付、高台内露胎	肥前 50%
	第84図-415 図版40-415	平鉢	陶器	口 径(35.0)cm 器 高 5.7 cm 底 径(28.4)cm	内外面口縁部鉄釉 内面体部、底部灰釉 外面体部露胎	丹波 5%
	第84図-416 図版40-416	鉢	陶器	口 径(33.2)cm 器 高 6.3 cm 底 径 29.2 cm	外面体部指頭圧痕 底部塗り土を施す	丹波 10% 内面、口縁 端部自然釉掛かる
	第84図-417 図版40-417	摺鉢	陶器	口 径(32.0)cm 器 高 13.0 cm 高台径(12.8)cm	クシ目一単位8本 外面体部上半、底部周辺ヨ コナデ 外面体部下半ナデアゲ	丹波 40% 外面上半部灰被り
	第VII層	第84図-418 図版40-418	焙烙	素焼き	口 径(22.8)cm	外面体部上半ヨコナデ 外面体部下半右上下 り平行タタキ痕有り 内面ヨコナデ
第84図-419 図版40-419		摺鉢	陶器	口 径(31.3)cm 器 高 14.2 cm 底 径(14.0)cm	摺目へう描き 外面口縁部、底部周辺、内面ヨ コナデ 外面体部ナデアゲ	丹波 25%
第84図-420 図版40-420		天目碗	陶器	口 径(10.7)cm 器 高 6.7 cm 高台径(4.4)cm	鉄釉 外面底部下半露胎	瀬戸・美濃 40%

表22 遺物観察表(21)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
第Ⅴ層	第84図-421 図版40-421	鉄絵皿	陶器		口縁一部輪花状 内面文様有り	唐津 25%
	第84図-422 図版40-422	皿	陶器	口径(13.2)cm 器高 4.0cm 高台径(5.0)cm	口縁輪花 灰釉 見込み胎土目2ヶ所残存 外面体部下半露胎	唐津 50% 内外面貫入
	第84図-423 図版40-423	皿	陶器	口径 13.3cm 器高 3.0cm 高台径 5.2cm	灰釉 口縁口錆 見込み胎土目4ヶ所有り 外 面体部下半露胎	唐津 75% 内外面貫入
	第84図-424 図版40-424	碗	青磁	口径(10.1)cm 器高 6.8cm 高台径 4.2cm	掛け分け 外面から内面口縁部青磁釉 内面 口縁部より下白磁釉 高台露胎	肥前 50% 青磁釉部分貫入
	第84図-425 図版40-425	染付碗	白磁	口径(10.1)cm 器高 6.2cm 高台径 4.1cm	外面笹文 高台露胎	肥前 40%
	第85図-426 図版40-426	擂鉢	陶器	口径(32.6)cm 器高 13.9cm 高台径 14.8cm	擂目へう掻き 外面口縁部、底部周辺ヨコナデ 外面体部指頭圧痕とナデ	丹波 20%
	第85図-427 図版40-427	擂鉢	陶器	口径(24.3)cm 器高(8.9)cm 高台径(11.8)cm	放射状のクシ目一単位10本 斜め方向の擂目 一単位9本 見込み「X」の擂目一単位8本	備前 50%
	第85図-428 図版40-428	染付碗	白磁	口径(10.6)cm	外面山水文	肥前 20%
	第85図-429 図版41-429	青花皿	白磁	口径(21.6)cm 器高 4.0cm 高台径(11.0)cm	内面文様有り 見込み文様と二重界線有り 高台内露胎 高台壘付離れ砂付蓋	中国 10%
	第Ⅵ層	第85図-430 図版41-430	土師皿	素焼き	口径 7.5cm 器高 1.4cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナ デ
第85図-431 図版41-431		土師皿	素焼き	口径(8.1)cm 器高 1.3cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナ デ	在地 50% 口縁部煤けている
第85図-432 図版41-432		土師皿	素焼き	口径(10.6)cm 器高 2.3cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 45%
第85図-433 図版41-433		土師皿	素焼き	口径 13.7cm 器高 2.1cm 底径 8.0cm	手捏ね成形 外面口縁部、内面ヨコナデ 外面体部下半、底部指頭圧痕とナデ	在地 80%
第85図-434 図版41-434		天目碗	陶器	口径(12.1)cm	鉄釉 外面体部下半露胎	瀬戸・美濃 10%
第85図-435 図版41-435		天目碗	陶器	口径(12.2)cm	鉄釉 外面体部下半に化粧掛けを施す	瀬戸・美濃 10%
第85図-436 図版41-436		碗	陶器	口径(8.0)cm 器高 4.7cm 高台径 3.6cm	口縁端反り 灰釉 外面腹部のみ露胎 高台 壘付砂目3ヶ所有り 高台壘付露胎	唐津 50% 内外面貫入
第85図-437 図版41-437		皿	陶器	口径(10.7)cm 器高 2.5cm 高台径(6.1)cm	灰釉 高台壘付露胎	瀬戸・美濃 15%
第85図-438 図版41-438		皿	陶器	口径(10.6)cm 器高 3.9cm 高台径(4.3)cm	灰釉 口縁口錆 外面体部下半露胎	唐津 30% 内外面貫入
第85図-439 図版41-439		鉢	陶器	口径(24.6)cm 器高 4.2cm 底径(21.1)cm	外面口縁部から内面塗り土を施す 底部灰釉	丹波 5%
第85図-440 図版41-440		鉢	陶器	口径(22.2)cm	口ク口成形	丹波 2%

表23 遺物観察表(22)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代等
第Ⅷ層	第85図-441 図版41-441	匣鉢	陶器	口径(15.4)cm 器高 5.3cm 底径(14.8)cm	外面鉄釉 底部ヘラ切り 口縁端部、内面露胎	50%
	第85図-442 図版41-442	擂鉢	陶器	口径(25.3)cm	クシ目一単位12本	備前 5%
	第86図-443 図版41-443	擂鉢	陶器	口径(31.6)cm 器高 13.4cm 高台径(13.5)cm	擂目ヘラ掻き 外面口縁部、内面ヨコナデ 外面体部ナデアゲ 外面底部付近ヘラ削り 一部ヘラ押しえ 見込み擂目「*」	丹波 50%
	第86図-444 図版41-444	染付碗	白磁	口径(11.3)cm	口縁端部を内湾させる 外面牡丹唐草文	5%
	第86図-445 図版41-445	染付碗	白磁	口径(11.2)cm	外面草花文 内面文様か	15%
	第86図-446 図版41-446	青花碗	白磁	口径(11.6)cm	外面草花文 内面口縁部二重界線有り 外面体部下半、見込み露胎	中国 5% 内外面貫入
	第86図-447 図版41-447	青花皿	白磁	口径(15.3)cm 器高 3.4cm 高台径(8.8)cm	内面口縁部唐草文 見込み二重界線有り 高台量付露胎	中国 10% 二次焼成 受ける
	第86図-448 図版41-448	小皿	白磁	口径(8.6)cm 器高 2.9cm 高台径 4.2cm	高台量付露胎	65%
	第86図-449 図版41-449	青花碗	白磁	高台径(4.6)cm	外面文様有り 見込み蓮華文と三重界線有り 高台内中央に兜巾状の突出有り 高台量付露胎	中国 10%
	第86図-450 図版41-450	青花皿	白磁	高台径(7.8)cm	見込み人物文 高台内「○○○徳年造」銘と二重界線有り 高台量付露胎	中国 5%
	第86図-451 図版41-451	青花碗	白磁	高台径(4.9)cm	見込み唐草文と二重界線有り 高台内銘有り 高台量付露胎	中国 5%
	第86図-452 図版41-452	槍先	鉄	長さ 44.5cm 幅 2.7cm 厚み 0.8cm		

表24 遺物観察表(23)

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ありおかじょうあとはくつちょうさほうこくしょ							
書名	有岡城跡発掘調査報告書XII							
副書名								
巻次								
シリーズ名	伊丹市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第31集							
編著者名	小長谷正治・中畔明日香・和島恭仁雄・細川佳子							
編集機関	伊丹市教育委員会							
所在地	〒664-8503 兵庫県伊丹市千僧1丁目1番地							
発行年月日	2006年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第66次調査	伊丹市宮ノ前 2丁目193-10	28207	61	34°46'44"	135°25'12"	19870726~ 19871011	857	その他建物 (公共施設)
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第66次調査	城館跡・生産遺跡	中世・近世		酒造遺構・礎石建物・竈 地下室・井戸・土器溜まり		土器器・陶磁器・赤生土器		近世の 酒蔵跡



1. 旧岡田家酒蔵店舗南面（解体修理後）



2. 旧岡田家酒蔵店舗南面（解体修理前）

## 図版2



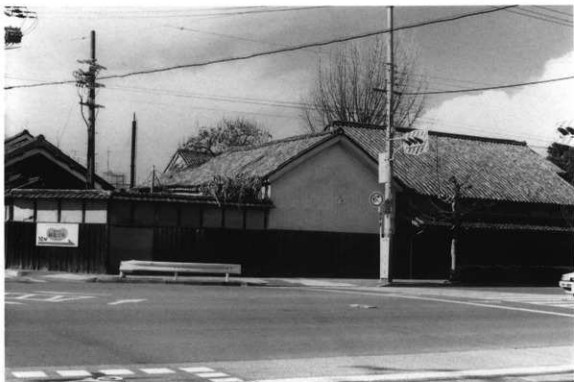
1. 旧岡田家酒蔵店舗・釜屋・酒蔵東面（解体修理後）



2. 旧岡田家酒蔵店舗・釜屋・酒蔵東面（解体修理前）



1. 旧岡田家酒蔵店舗・白屋南面



2. 旧岡田家酒蔵倉庫・本宅東面



## 図版4



1. 調査区より旧岡田家酒蔵店舗東面を見る



2. 第1・2遺構面 調査区全景



1. 第1・2遺構面 I区全景(北より)



2. 第1・2遺構面 II・III区全景(西より)

図版6



1. 礎石建物1 (西より)



2. 「鹿し清」銘根石



1. 地下室1と溝6 (南より)



2. 地下室1 (西より)



3. 地下室1 (北西より)



4. 地下室1 (北より)



5. 地下室1 (東より)

図版8



1. 竈12・13・14 (南より)



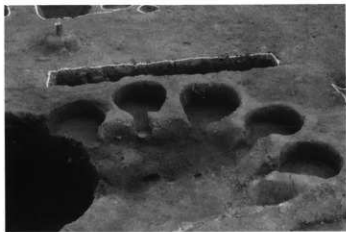
2. 竈15 (南西より)



3. 竈22・23 (南より)



1. 井戸1と竈1～11 (北より)



2. 竈1～5 (北より)



3. 竈6～11 (北より)

## 図版10



1. 竈16~21と溝7 (南より)



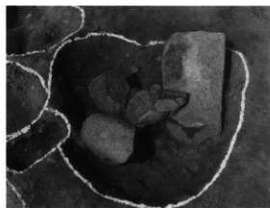
2. 礎石列1と焼土処理土坑5~8 (東より)



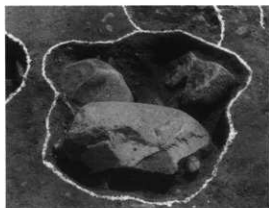
3. 白屋1 (西より)



1. 礎石列2と溝3 (西より)



2. 土坑126 (東より)



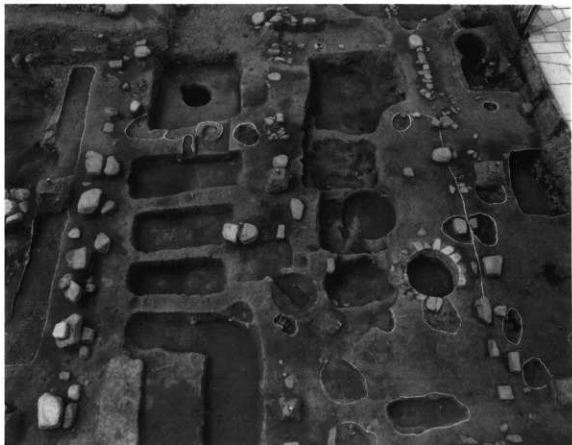
3. 土坑249 (西より)



4. 土坑263 (西より)



図版12



1. 第3遺構面上層 I区全景 (東より)



2. 第3遺構面上層 II区全景 (西より)



1. 第3遺構面上層 III区全景 (西より)

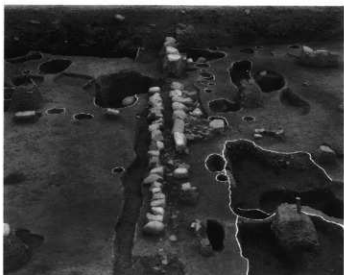


2. 礎石列4と礎石建物2の北列 (東より)



3. 礎石列2と礎石建物2の南列 (東より)

図版14



1. 溝11 (西より)



2. 溝11 (西より)



3. 竈24・27 (東より)

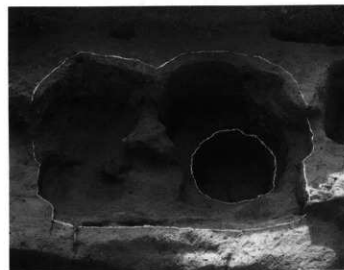
図版15



1. 竈24焚口（北より）



2. 竈28・29と礎石列3（東より）



3. 竈30・31と井戸2（東より）

図版16



1. 竈35 (東より)



2. 竈25 (東より)



3. 竈26 (東より)



1. 第3遺構面下層 I区全景 (東より)



2. 第3遺構面下層 II区全景 (北より)

## 図版18



1. 埴列建物1（北より）



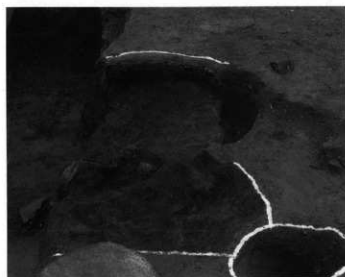
2. 埴列建物1北東隅（北東より）



3. 埴列建物1北西隅（北より）



1. 井戸5と井戸6 (東より)



2. 壙34 (東より)



3. 土器溜まり1 (南より)



図版20



1. 第4遺構面 I区全景(南より)



2. 第4遺構面 II区全景(北より)



1. 第4遺構面 III区全景 (東より)



2. 土坑645周辺 (西より)



3. 土坑910埋納銭出土状況 (西より)

図版22



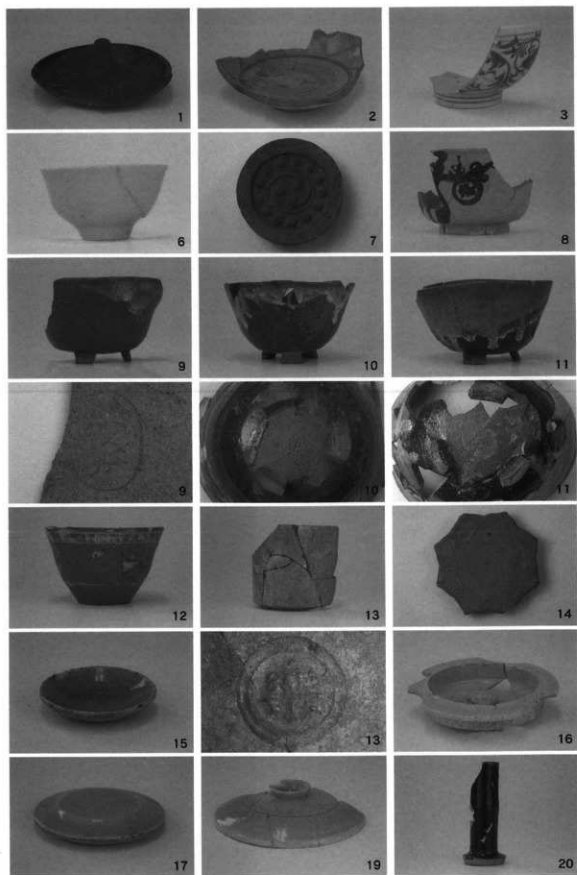
1. 土坑663周辺 弥生土器出土地区  
(東より)



2. 溝16周辺 (北より)

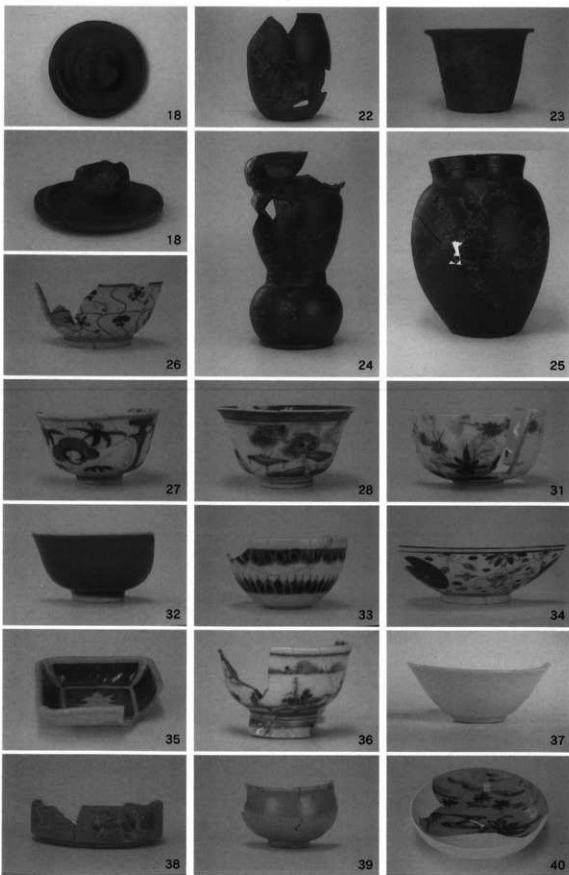


3. 溝16 弥生土器出土状況 (東より)

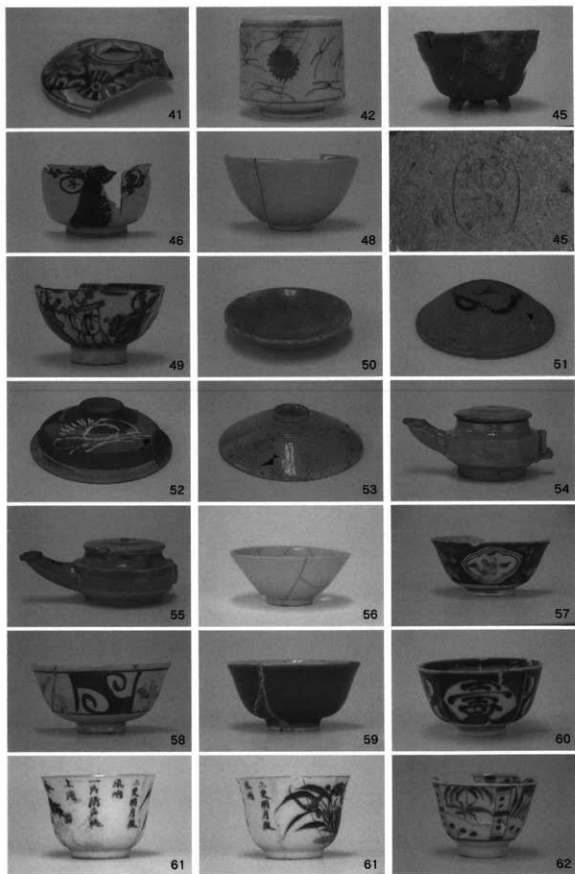


出土遺物 (1) 溝6 (1~3) 竈12・13・14 (6・7) 竈15 (8~17・19・20)

図版24

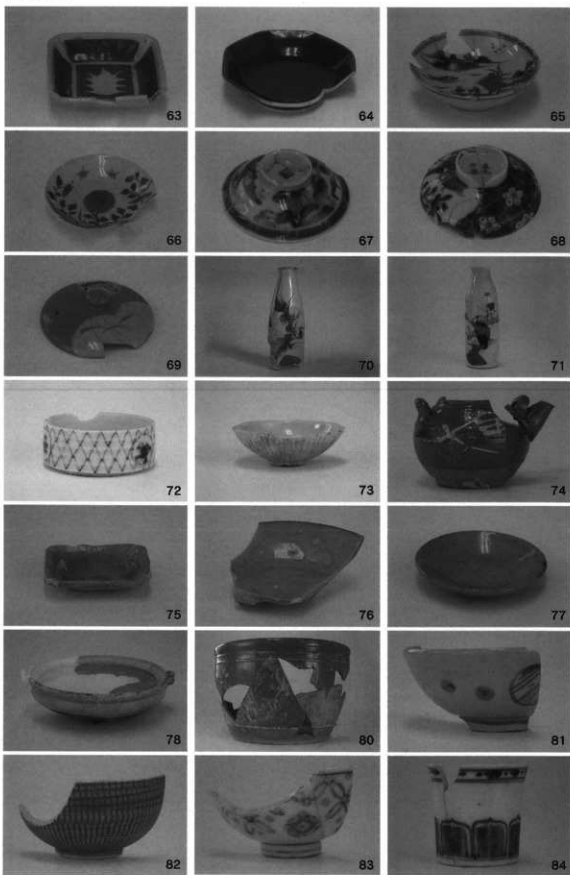


出土遺物 (2) 竈15 (18・22~28・31~39) 竈16~21 (40)

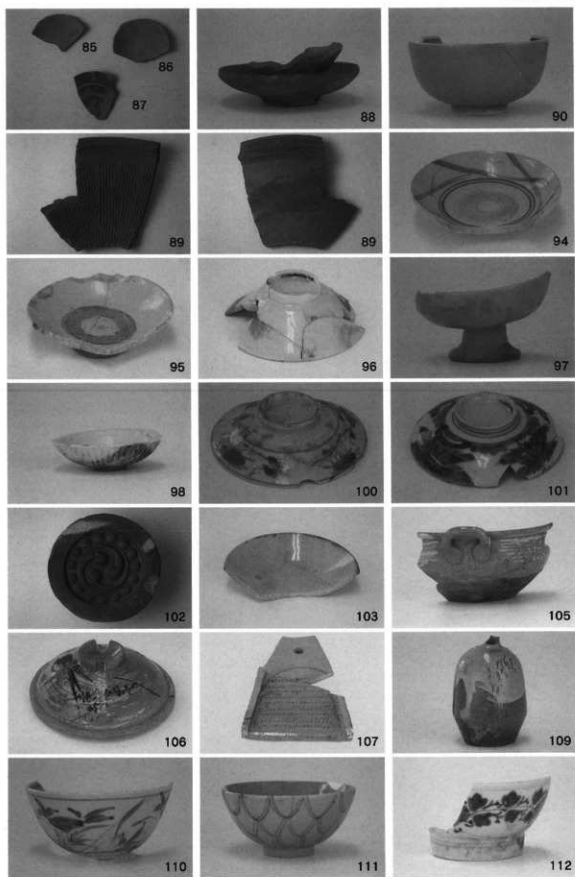


出土遺物 (3) 羅16~21 (41・42) 土坑2 (45・46・48~62)

# 图版26



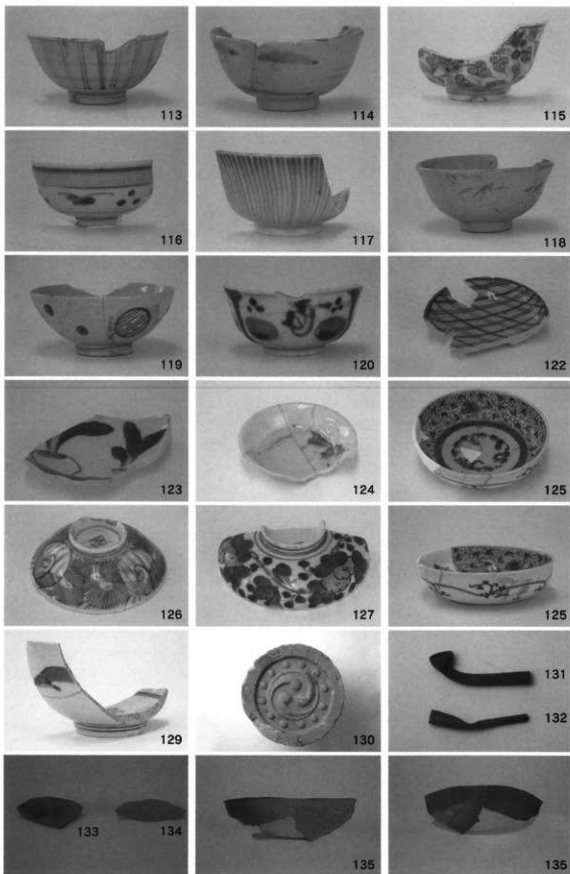
出土遺物(4) 土坑2 (63~75) 土坑4 (76) 土坑18 (77・78) 土坑164 (80~84)



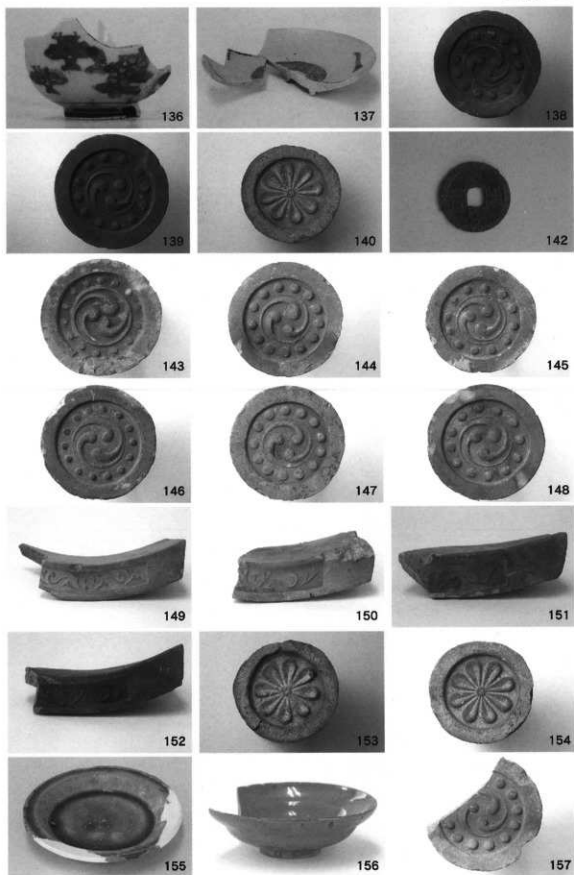
出土遺物 (5) 土坑268(85~90・94~98・100~102) 土坑950 (103・105~107・109~112)



图版28

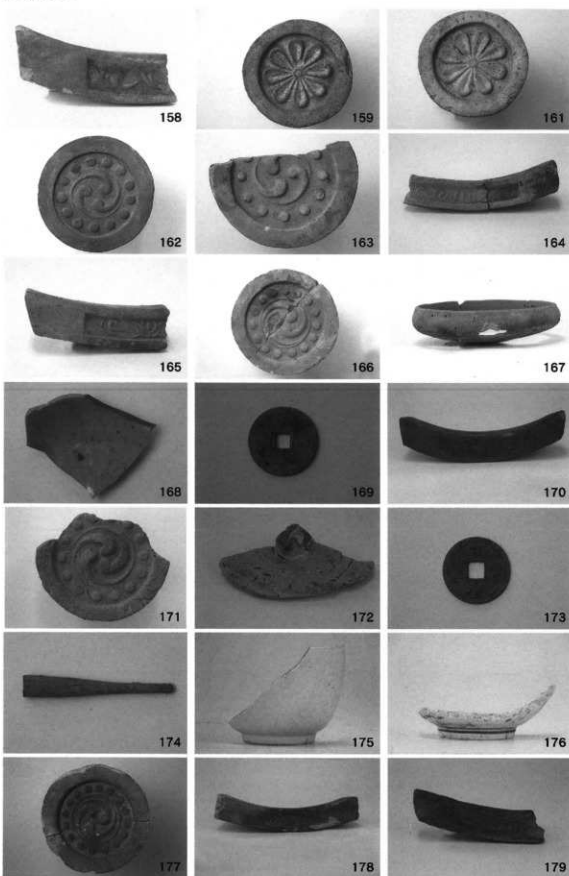


出土遺物 (6) 土坑950 (113~120·122~127) 溝9 (129~132)  
 焼土処理土坑1 (133~135)

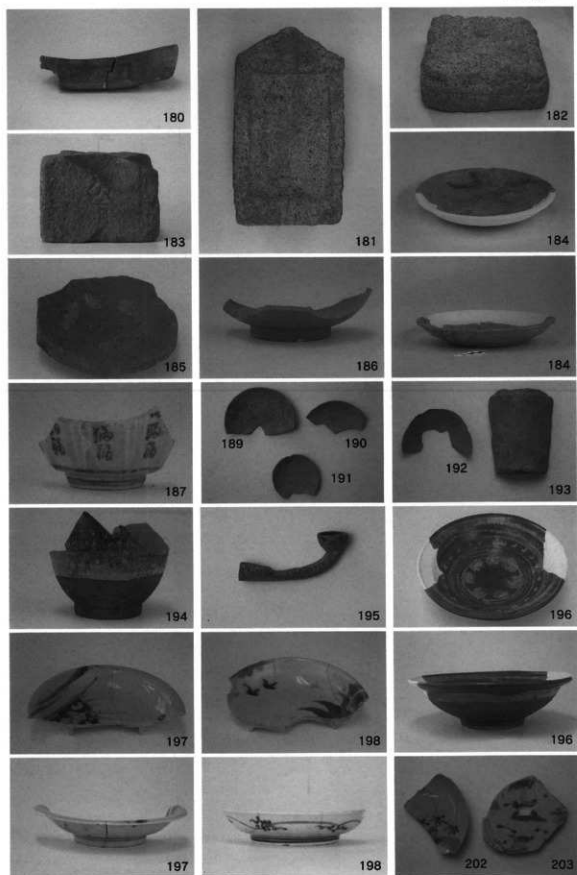


出土遺物 (7) 焼土処理土坑 1 (136~140・142) 焼土処理土坑 2 (143~154)  
 焼土処理土坑 5 (155~157)

图版30

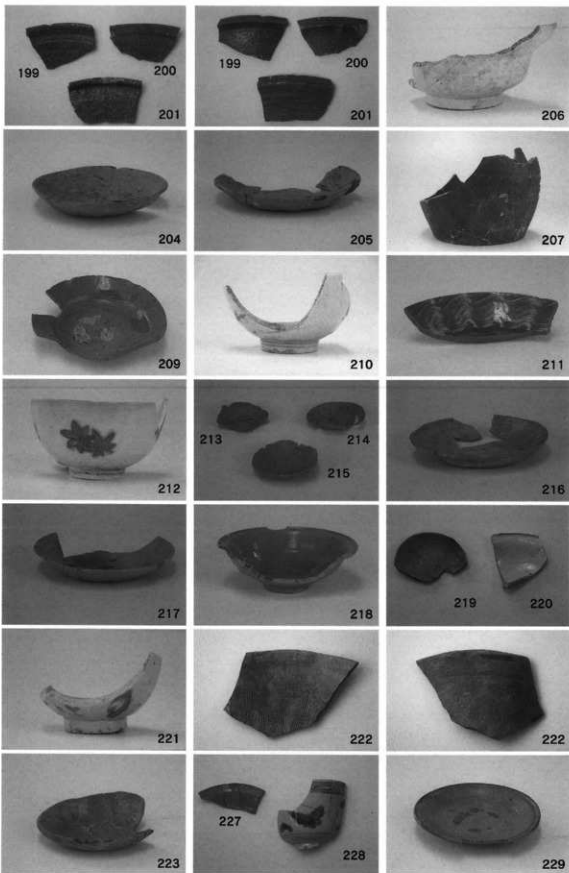


出土遺物(8) 焼土処理土坑5 (158・159) 焼土処理土坑6 (161・163)  
 焼土処理土坑8 (164・166) 土坑75 (167~169) 土坑78 (170・171)  
 土坑112 (172・173) 土坑133 (174) 土坑182 (175~179)

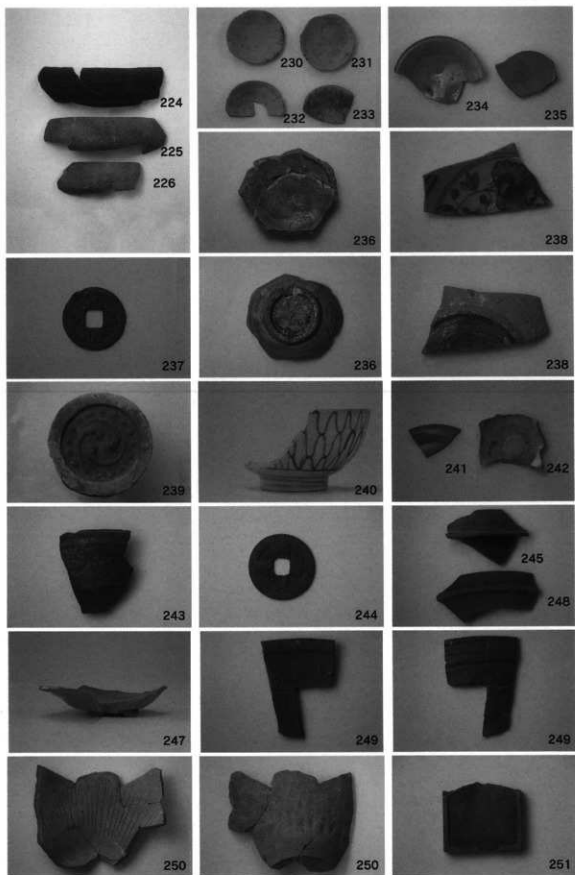


出土遺物 (9) 土坑182 (180) 第3遺構面上層 (181~184) 溝11 (185~187)  
井戸4 (189~191) 竈24 (192~198) 竈27 (202・203)

# 図版32

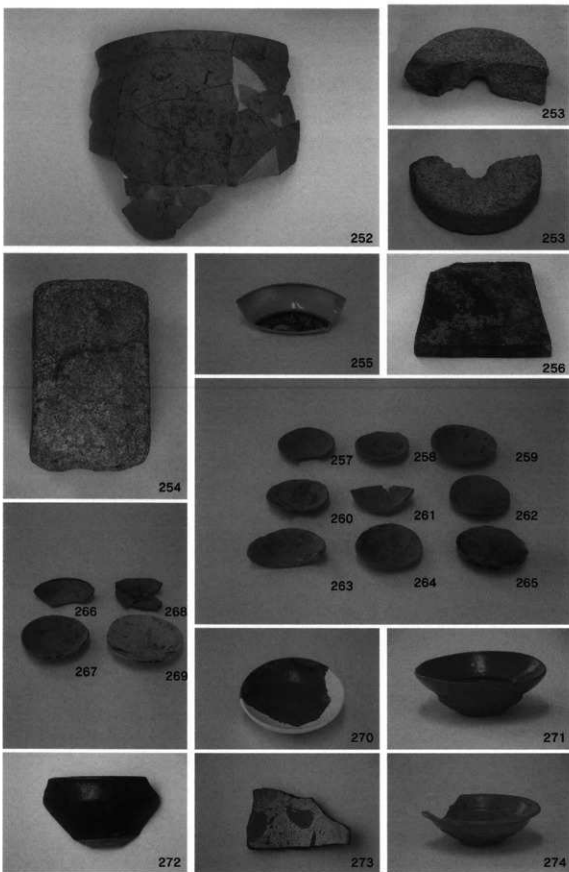


出土遺物(10) 甕27(199~201) 甕28(204~207) 甕29(209・210) 井戸2(211-212)  
 甕33周辺(213~218) 土坑270(219-220) 土坑277(221)  
 土坑281(222) 土坑282(223) 土坑285(227・228) 土坑296(229)

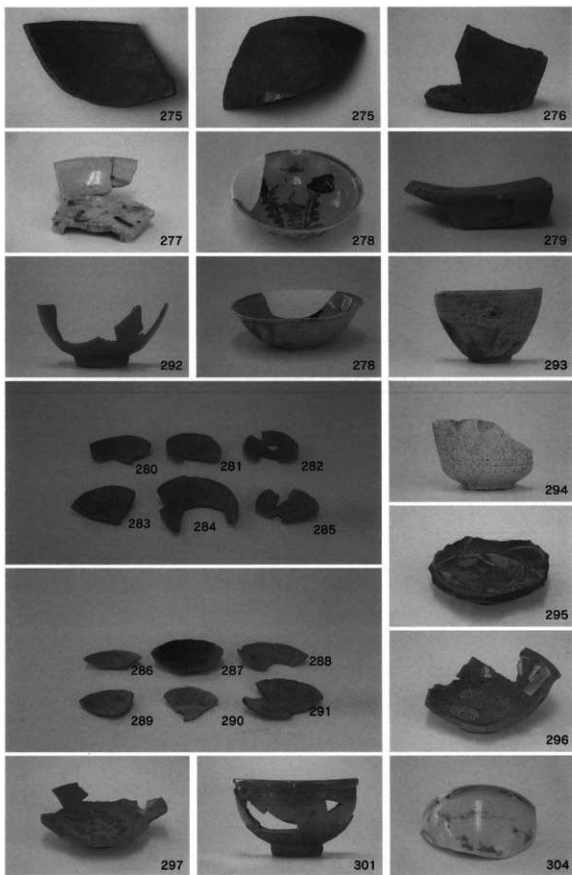


出土遺物(11) 土坑285 (224~226) 土坑329 (230~234) 土坑339 (235) 土坑365 (236)  
 土坑376 (237) 土坑371 (238) 土坑380 (239) 土坑433 (240)  
 土坑451 (241・242) 土坑456 (243・244) 土坑398 (245・247~251)

図版34



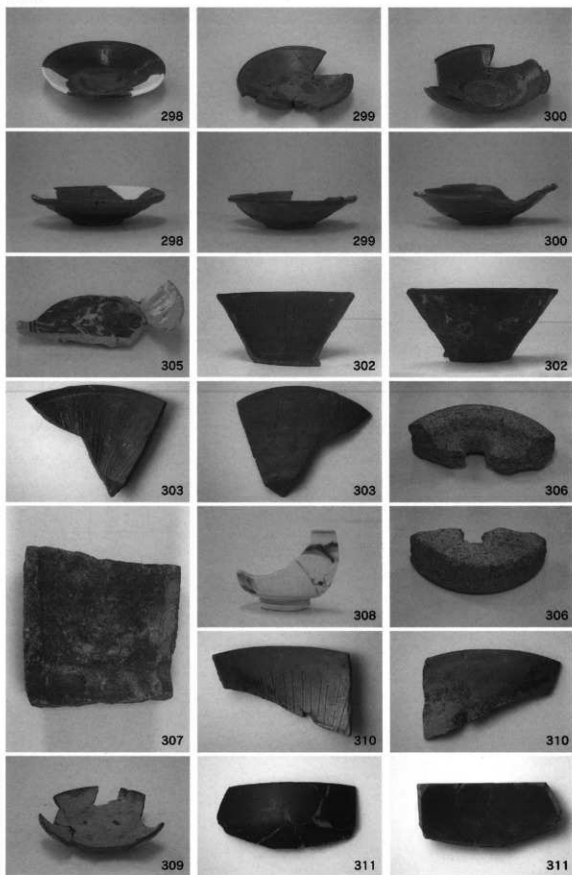
出土遺物 (12) 土坑398 (252) 第3遺構面下層 (253・254)  
 埴列建物1 (255・256) 井戸5 (257~274)



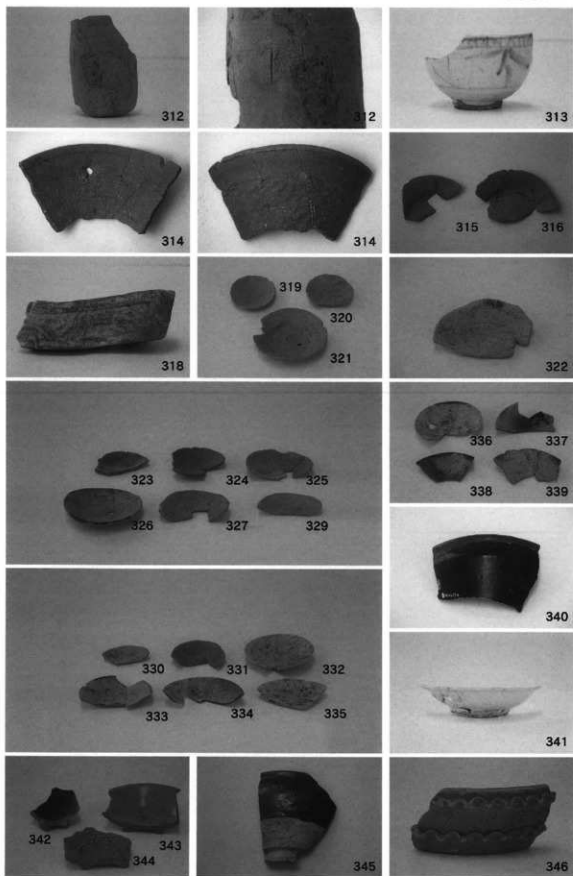
出土遺物 (13) 井戸5 (275~279) 土器溜まり1 (280~297・301・304)



图版36

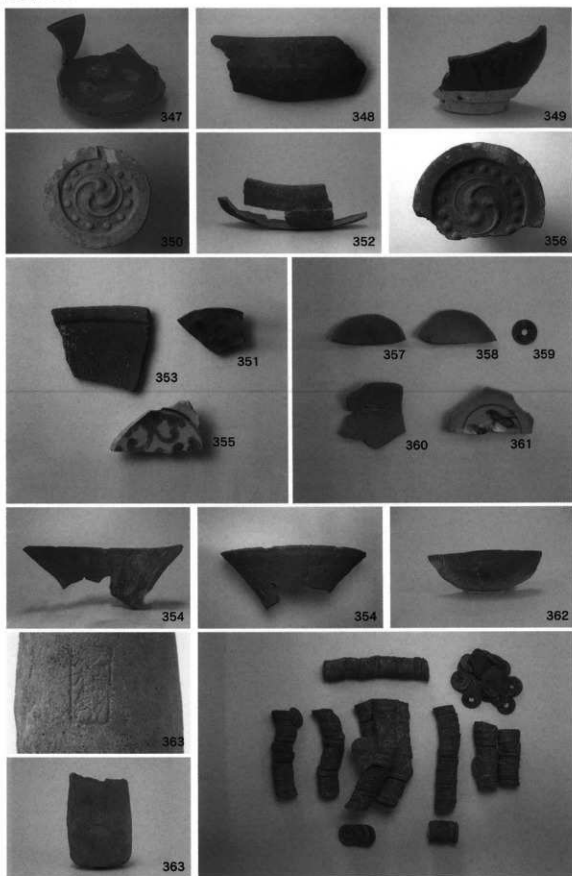


出土遺物 (14) 土器溜まり1 (298~300・302・303~305) 土器溜まり1周辺 (306・307)  
土坑481 (308) 土坑484 (309) 土坑521 (310) 土坑542 (311)

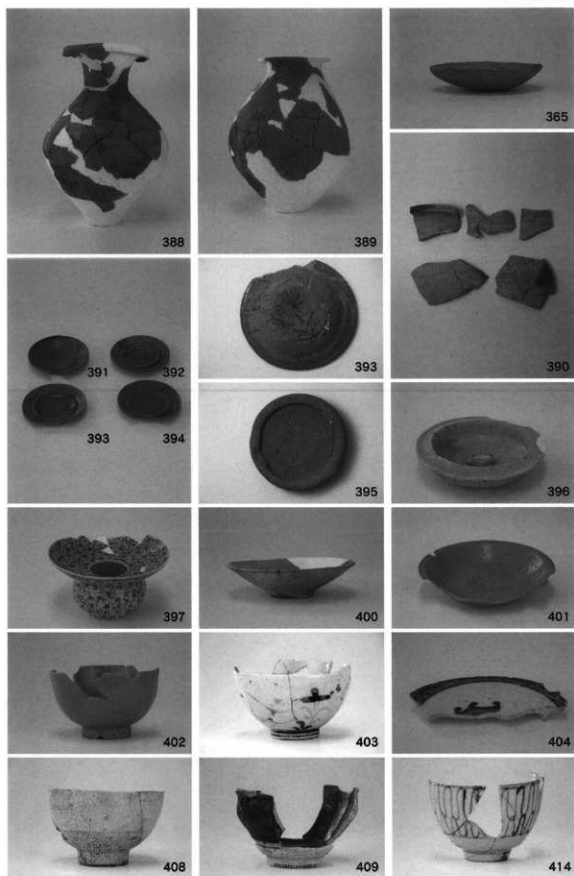


出土遺物 (15) 埋壘遺構1 (312~314) 土坑573 (315・316) 土坑586 (318) 土坑620 (319~321)  
 土坑625 (322) 土坑626 (323~327・329~341) 土坑645 (342~344)  
 土坑647 (345) 土坑648 (346)

# 图版38

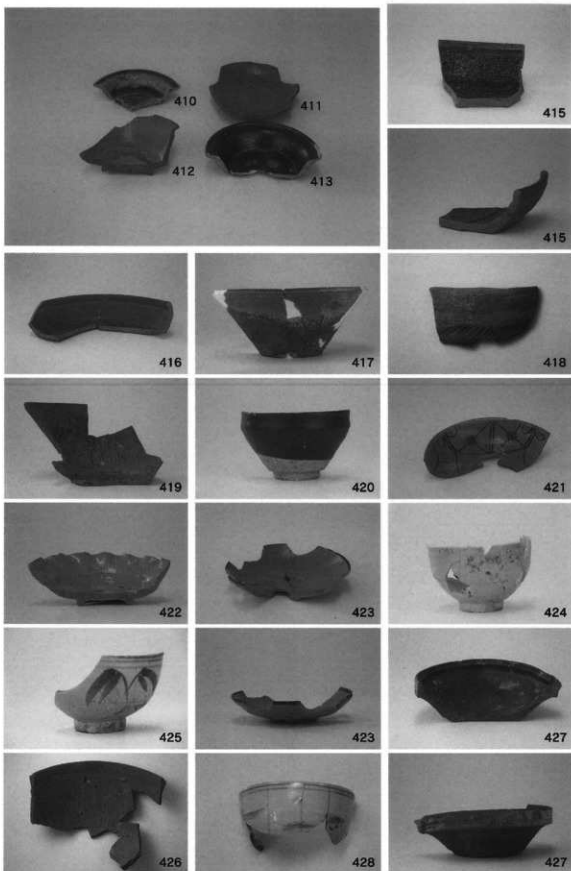


出土遺物 (16) 土坑648 (347) 土坑651 (348~350) 土坑655 (351~356) 土坑701 (357)  
 土坑709 (358) 土坑723 (359) 土坑732 (360) 土坑744 (361)  
 土坑807 (362) 土坑823 (363) 土坑910埋納錢

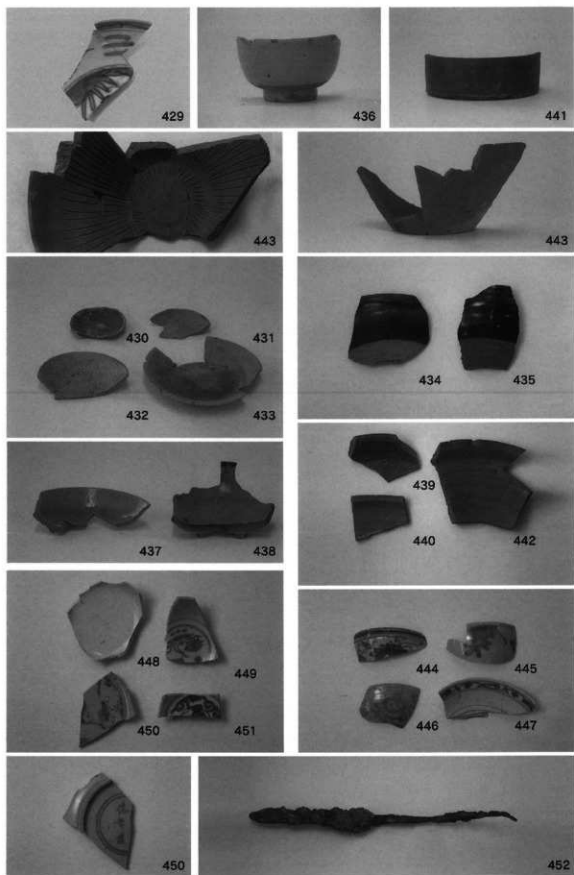


出土遺物 (17) 土坑864 (365) 土坑899 (388・389) 土坑633・681 (390) 第IV層 (391~397)  
 第V層 (400~404) 第VI層 (408・409・414)

图版40



出土遺物 (18) 第Ⅵ層 (410~413・415~417) 第Ⅷ層 (418~428)



出土遺物 (19) 第七層 (429) 第八層 (430~452)



伊丹市埋藏文化財調査報告書第31集  
有岡城跡発掘調査報告書 XII

— 第66次調査 —  
2006年3月31日

発行 伊丹市教育委員会  
兵庫県伊丹市千僧1丁目  
TEL072 - 783 - 1234  
印刷 株式会社 旭成社





